県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

尾　端　遺　跡

2003. 10

香　川　県　教　育　委　員　会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

尾　端　遺　跡

2003. 10

香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

序　　文

尾端遺跡は、県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴い発掘調査が行われた香川県木田郡三木町田中に所在する古代の集落遺跡です。

調査は、香川県教育委員会から委託を受け、平成8・9年度に用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、7世紀～8世紀前半頃の集落跡などを検出しました。集落の成立が、この地域の条里制施行に先行すること、南海道の整備時期にほぼ並行して集落が廃絶するなど、地域の歴史を考える上で貴重な資料が提供できたと考えております。

このたび、平成14年10月から実施しておりました整理事業が終了し、「県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　尾端遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、県土木部や関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成15年10月31日

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所　長　中村　仁

例　　言

1．本報告書は、県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県木田郡三木町田中に所在する尾端遺跡（おばないせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、試掘調査を平成7年10月30日～11月2日（香川県教育委員会事務局文化行政課担当）、本調査を平成8年11月21日～平成9年3月31日、平成10年1月1日～2月28日の間実施した。
　調査組織は、本文中に記したとおりである。

4．調査に当たっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、香川県高松土木事務所、地元各自治会、地元各水利組合

5．報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
編集・執筆は、同センター主任文化財専門員真鍋昌宏が担当し、近世・近現代遺物の記述については主任技師松本和彦が分担した。

6．本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
また遺構は、下記の略号により表示している。

ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＤ　溝状遺構	ＳＥ　井戸跡
ＳＫ　土坑	ＳＰ　柱穴跡	ＳＴ　墓
ＳＸ　不明遺構		

7．挿図の一部に、国土地理院地形図「高松南部」（1／50,000）を使用した。

本 文 目 次

序文

例言

第1章　調査の経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
　第3節　整理作業 …… 1
　第4節　発掘調査及び整理作業の体制 …… 2

第2章　立地と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3

第3章　調査の成果 …… 6
　第1節　調査区 …… 6
　第2節　基本層序 …… 6
　第3節　遺構・遺物 …… 6
　　1　掘立柱建物跡 …… 20
　　2　柱穴跡 …… 47
　　3　溝状遺構 …… 49
　　4　墓 …… 77
　　5　土坑 …… 84
　　6　井戸 …… 108
　　7　不明遺構 …… 110
　　8　包含層 …… 116
　第4節　平成10年度香川県教育委員会立会調査地区について …… 121

第4章　自然科学分析 …… 122
　第1節　樹種同定 …… 122
　第2節　花粉分析 …… 127

第5章　まとめ …… 133
　第1節　条里型地割について …… 133
　第2節　遺構の変遷 …… 133

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置及び周辺の遺跡
第 2 図　周辺の地形
第 3 図　調査区割図及び土層断面位置図
第 4 図　土層断面図 (1)
第 5 図　土層断面図 (2)
第 6 図　土層断面図 (3)
第 7 図　土層断面図 (4)
第 8 図　土層断面図 (5)
第 9 図　土層断面図 (6)
第 10 図　掘立柱建物跡配置図
第 11 図　SB01 平・断面図
第 12 図　SB02 平・断面図、出土遺物実測図
第 13 図　SB03 平・断面図
第 14 図　SB03 出土遺物実測図
第 15 図　SB04 平・断面図
第 16 図　SB04 出土遺物実測図
第 17 図　SB05 平・断面図、出土遺物実測図
第 18 図　SB06 平・断面図
第 19 図　SB06 出土遺物実測図
第 20 図　SB07 平・断面図
第 21 図　SB08 平・断面図、出土遺物実測図
第 22 図　SB09 平・断面図
第 23 図　SB10 平・断面図、出土遺物実測図
第 24 図　SB11 平・断面図、出土遺物実測図
第 25 図　SB12 平・断面図
第 26 図　SB13 平・断面図
第 27 図　SB14 平・断面図、出土遺物実測図
第 28 図　SB15 平・断面図
第 29 図　SB16 平・断面図
第 30 図　SB17 平・断面図
第 31 図　SB18 平・断面図
第 32 図　SB19 平・断面図、出土遺物実測図
第 33 図　SP 平・断面図、出土遺物実測図
第 34 図　溝状遺構配置図
第 35 図　SD01 ～ 03 平・断面図
第 36 図　SD05・12 平・断面図、出土遺物実測図
第 37 図　SD08・13 平・断面図
第 38 図　SD06・07・09・10・11・14・24 平面図、SD06・09・10 断面図、SD09・10 出土遺物実測図
第 39 図　SD10・11・14・24 断面図、出土遺物実測図
第 40 図　SD11 木橋出土状態図
第 41 図　SD11 出土遺物実測図 (1)
第 42 図　SD11 出土遺物実測図 (2)
第 43 図　SD11 出土遺物実測図 (3)
第 44 図　SD16 ～ 18・21 平・断面図
第 45 図　SD15・22 平・断面図、SD22 出土遺物実測図
第 46 図　SD27 平・断面図、出土遺物実測図
第 47 図　SD33 ～ 37 平・断面図、SD33・36 出土遺物実測図
第 48 図　SD38 ～ 44 平・断面図、SD43 出土遺物実測図
第 49 図　SD45・48 ～ 51 平・断面図
第 50 図　SD54 平・断面図
第 51 図　SD58・59・61 平・断面図
第 52 図　SD61・74 平・断面図、出土遺物実測図
第 53 図　SD62 ～ 64 平・断面図
第 54 図　SD65 平・断面図、出土遺物実測図
第 55 図　SD65・75・86 平・断面図、SD65 出土遺物実測図
第 56 図　SD66・69 平・断面図
第 57 図　SD71・72 平・断面図
第 58 図　SD79・87・88 平面図、SD87・88 断面図、SD79 出土遺物実測図
第 59 図　SD89 ～ SD92・94 平面図、SD92・94 断面図、SD90・92 出土遺物実測図
第 60 図　SD95・97 平・断面図、出土遺物実測図
第 61 図　墓・土坑・井戸・不明遺構配置図
第 62 図　ST01 平・断面図、出土遺物実測図
第 63 図　ST02 平・断面図、出土遺物実測図

第 64 図　ST03 平・断面図、出土遺物実測図
第 65 図　ST04 平・断面図
第 66 図　ST05 平・断面図、出土遺物実測図
第 67 図　SK02 平・断面図、出土遺物実測図
第 68 図　SK05 平・断面図
第 69 図　SK08 ～ 11 平・断面図、SK11 出土遺物実測図
第 70 図　SK12・14 ～ 18 平・断面図
第 71 図　SK19 ～ 22 平・断面図
第 72 図　SK24 ～ 27 平・断面図
第 73 図　SK28 ～ 30・32・33 平・断面図
第 74 図　SK34・36・39 平・断面図
第 75 図　SK41・42・44・54 平・断面図
第 76 図　SK57 平面図、出土遺物実測図
第 77 図　SK58・59 平・断面図
第 78 図　SK61 平・断面図
第 79 図　SK62・63 平・断面図、SK63 出土遺物実測図
第 80 図　SK64・65 平・断面図
第 81 図　SK69 平・断面図
第 82 図　SK70 平・断面図
第 83 図　SK71・72 平・断面図
第 84 図　SK73・75・78 平・断面図
第 85 図　SK79 平・断面図、出土遺物実測図
第 86 図　SK80 平・断面図、出土遺物実測図
第 87 図　SK81 平・断面図
第 88 図　SE01・02 平・断面図、出土遺物実測図
第 89 図　SX01・02 平・断面図、SX01 出土遺物実測図
第 90 図　SX03 平・断面図、出土遺物実測図
第 91 図　SX04 平・断面図、出土遺物実測図
第 92 図　SX05 平・断面図、出土遺物実測図
第 93 図　SX06 平・断面図
第 94 図　SX07 平・断面図、出土遺物実測図
第 95 図　包含層出土遺物実測図 (1)
第 96 図　包含層出土遺物実測図 (2)
第 97 図　包含層出土遺物実測図 (3)
第 98 図　平成 10 年度立会調査地区平面図
第 99 図　木材顕微鏡写真 1
第 100 図　木材顕微鏡写真 2
第 101 図　各地点の模式柱状図および試料採取位置
第 102 図　各地点における主要花粉化石群集の層位分布
第 103 図　花粉化石顕微鏡写真
第 104 図　周辺の条里型地割 (1/10000)
第 105 図　遺構変遷図 (1)
第 106 図　遺構変遷図 (2)
第 107 図　遺構変遷図 (3)

図 版 目 次

図版 1 － (1)　SB 群全景（西から）
図版 1 － (2)　SB 群全景（東から）
図版 2 － (1)　SB 群・下位 S D 群全景（東から）
図版 2 － (2)　SB01・02 全景（西から）
図版 3 － (1)　SB01・02 全景（南から）
図版 3 － (2)　SB01・02 全景（南から）
図版 4 － (1)　SB01 全景（南から）
図版 4 － (2)　SB01（Pit06）土層断面（東から）
図版 4 － (3)　SB02（Pit02）土層断面（西から）
図版 4 － (4)　SB02（Pit04）土層断面（南から）
図版 4 － (5)　SB02（Pit06）土層断面（東から）
図版 5 － (1)　SB02（Pit09）土層断面（東から）
図版 5 － (2)　SB02（Pit09）遺物出土状態（東から）
図版 5 － (3)　SB02・03・04 全景（西から）
図版 6 － (1)　SB02・03・04 全景（南から）
図版 6 － (2)　SB03・04 全景（南から）
図版 7 － (1)　SB03・04 全景（南西から）
図版 7 － (2)　SB03（Pit05）土層断面（南から）
図版 7 － (3)　SB04（Pit66・Pit03）土層断面（北から）
図版 7 － (4)　SB04（Pit462・Pit04）土層断面（北から）
図版 7 － (5)　SB04（Pit07）土層断面（北から）
図版 8 － (1)　SB04（Pit10）遺物出土状態（北から）
図版 8 － (2)　SB04（Pit10）遺物出土状態（北から）
図版 8 － (3)　SB04（Pit11）土層断面（南から）
図版 8 － (4)　SB04（Pit11）遺物出土状態（南から）
図版 8 － (5)　SB05・06 全景（西から）
図版 9 － (1)　SB05・06 全景（南から）
図版 9 － (2)　SB05 全景（西から）
図版 10 － (1)　SB06 全景（西から）
図版 10 － (2)　SB07・08 全景（西から）
図版 11 － (1)　SB09 全景（東から）
図版 11 － (2)　SB10 全景（南から）
図版 12 － (1)　SB11 全景（西から）
図版 12 － (2)　SB12 全景（東から）
図版 13 － (1)　SB15・16 全景（南から）
図版 13 － (2)　SB15・16 全景（北から）
図版 14 － (1)　SB15・16 全景（北から）
図版 14 － (2)　SB15（Pit01）土層断面（南から）
図版 14 － (3)　SB16（Pit01）土層断面（西から）
図版 14 － (4)　SP236 土層断面（南から）
図版 15 － (1)　SD06 全景（南から）
図版 15 － (2)　SD06 中央畦土層断面（西から）
図版 16 － (1)　SD06 東畦土層断面（西から）
図版 16 － (2)　SD 群 B 畦土層断面（西から）
図版 17 － (1)　SD 群 D 畦土層断面（西から）
図版 17 － (2)　SD09・10　a 畦土層断面（西から）
図版 18 － (1)　SD09・10　b 畦土層断面（西から）
図版 18 － (2)　SD09・11　b 畦土層断面（西から）
図版 19 － (1)　SD 群全景（西から）
図版 19 － (2)　SD11 木橋出土状態（北から）
図版 20 － (1)　SD11 木橋出土状態（北から）
図版 20 － (2)　SD11 木橋出土状態（西から）
図版 21 － (1)　SD11 木橋出土状態（東から）
図版 21 － (2)　SD11 木橋出土状態（西から）
図版 22 － (1)　SD11 木橋出土状態（南から）
図版 22 － (2)　SD11 木橋出土状態（北から）
図版 23 － (1)　SD11 木橋出土状態（南から）
図版 23 － (2)　SD11 木橋出土状態（東から）
図版 24 － (1)　SD11 木橋出土状態（西から）
図版 24 － (2)　SD11 木橋出土状態（南から）
図版 25 － (1)　SD11 木橋出土状態（北から）
図版 25 － (2)　SD11 木橋出土状態（北から）
図版 26 － (1)　SD11 木橋出土状態（北から）
図版 26 － (2)　SD11 木橋出土状態（北から）
図版 27 － (1)　SD11 杭検出状態（東から）
図版 27 － (2)　SD11 杭検出状態（東から）
図版 28 － (1)　SD11 全景（南から）
図版 28 － (2)　SD11 土層断面（北から）
図版 29 － (1)　SD11 遺物出土状態（東から）
図版 29 － (2)　SD11 遺物出土状態（西から）
図版 30 － (1)　SD17　b 畦土層断面（南から）
図版 30 － (2)　SD18　b 畦土層断面（南から）
図版 31 － (1)　SD22 全景（東から）
図版 31 － (2)　SD27 全景（南から）

図版 32 － (1)　SD27　a 畦土層断面（北から）
図版 32 － (2)　SD65　b 畦土層断面（西から）
図版 33 － (1)　SD65　c 畦土層断面（西から）
図版 33 － (2)　SD65　e 畦土層断面（西から）
図版 34 － (1)　SD65 土層断面（西から）
図版 34 － (2)　SD71 土層断面（東から）
図版 35 － (1)　SD92　c 畦土層断面（西から）
図版 35 － (2)　SD95 土層断面（北から）
図版 36 － (1)　SD95 A 群遺物出土状態（北から）
図版 36 － (2)　SD95 B 群遺物出土状態（北から）
図版 37 － (1)　ST01・02 完掘状態（西から）
図版 37 － (2)　ST01 東西土層断面（北から）
図版 38 － (1)　ST01 南北土層断面（西から）
図版 38 － (2)　ST01 南北土層断面（西から）
図版 39 － (1)　ST01 土層断面（西から）
図版 39 － (2)　ST01 土器出土状態（西から）
図版 40 － (1)　ST01 土器出土状態（西から）
図版 40 － (2)　ST02 土層断面（西から）
図版 41 － (1)　ST03 完掘状態（東から）
図版 41 － (2)　ST03（東から）
図版 42 － (1)　ST03 完掘状態（東から）
図版 42 － (2)　ST03 完掘状態（南から）
図版 43 － (1)　ST03 南北土層断面（東から）
図版 43 － (2)　ST03 南北土層断面（東から）
図版 44 － (1)　ST04 土層断面（北から）
図版 44 － (2)　ST05 土層断面（北から）
図版 45 － (1)　ST05 土層断面（北から）
図版 45 － (2)　SK26 土層断面（南から）
図版 46 － (1)　SK29 土層断面（北東から）
図版 46 － (2)　SK30 土層断面（南から）
図版 47 － (1)　SK33 土層断面（東から）
図版 47 － (2)　SK39 土層断面（南から）
図版 48 － (1)　SK42 土層断面（西から）
図版 48 － (2)　SK44 完掘状態（西から）
図版 49 － (1)　SK44 土層断面（東から）
図版 49 － (2)　SK57 土層断面（北から）
図版 50 － (1)　SK58 完掘状態（東から）
図版 50 － (2)　SK60 土層断面（北から）
図版 51 － (1)　SK61・62 完掘状態（南から）
図版 51 － (2)　SK61 土層断面（北から）
図版 52 － (1)　SK63 土層断面（北から）
図版 52 － (2)　SK63 遺物出土状態（北から）
図版 53 － (1)　SK64 完掘状態（南から）
図版 53 － (2)　SK64 柱痕断面（南から）
図版 54 － (1)　SK64 柱痕断面（南から）
図版 54 － (2)　SK69 完掘状態（北から）
図版 55 － (1)　SK72 土層断面（東から）
図版 55 － (2)　SK79 土層断面（北から）
図版 56 － (1)　SK80 土層断面（北から）
図版 56 － (2)　SK80 遺物出土状態（南から）
図版 57 － (1)　SX02 土層断面（南から）
図版 57 － (2)　SX05 完掘状態（北から）
図版 58 － (1)　Ⅰ区全景（西から）
図版 58 － (2)　Ⅲ・Ⅴ区全景（東から）
図版 59 － (1)　Ⅳ・Ⅵ区西側全景（東から）
図版 59 － (2)　Ⅵ区東側全景（西から）
図版 60　掘立柱建物出土遺物 (1)
図版 61　掘立柱建物出土遺物 (2)
図版 62　掘立柱建物・柱穴・溝出土遺物
図版 63　溝出土遺物 (1)
図版 64　溝出土遺物 (2)
図版 65　溝出土遺物 (3)
図版 66　溝出土遺物 (4)
図版 67　溝出土遺物 (5)
図版 68　溝出土遺物 (6)
図版 69　溝・土壙墓出土遺物
図版 70　土坑出土遺物 (1)
図版 71　土坑出土遺物 (2)
図版 72　土坑出土遺物 (3)
図版 73　井戸・不明遺構出土遺物
図版 74　不明遺構出土遺物
図版 75　不明遺構・包含層出土遺物
図版 76　包含層出土遺物

表 目 次

第1表　整理作業工程表
第2表　掘立柱建物跡一覧表
第3表　樹種同定結果
第4表　花粉分析結果
第5表　土器観察表
第6表　石器観察表
第7表　木製品観察表

付 図 目 次

付図1　尾端遺跡全体図 (1)
付図2　尾端遺跡全体図 (2)

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴い、香川県教育委員会が平成7年10月30日～11月2日に試掘調査（370㎡）を実施し、柱穴跡・溝状遺構・土坑を確認し、4,200㎡について事前の保護措置が必要と判断した。（『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅸ～国道バイパス等事業予定地内の調査～』平成8年3月　香川県教育委員会）

この結果、平成8年4月1日付けで本調査が財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託された。財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは、平成8年11月21日～平成9年3月31日に本調査を実施し、未退去家屋を除いて一旦終了した。未調査の部分については、家屋撤去後の平成10年1月1日～2月28日の間実施し、尾端遺跡の調査を終了した。

各年度の調査概要は、下記概報を刊行して周知した。

「尾端遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成8年度』1997.3　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

「尾端遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成9年度』1998.3　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

第2節　調査の経過

調査対象地は町道水上田中線に並行する形で、東西延長190m、面積4,200㎡を測る。調査区の設定は東よりⅡａ～Ⅱｄに4分割して調査を実施した。調査区の地目は水田・宅地である。この内、平成8年度は3,253㎡、平成9年度は家屋退去部分の947㎡の調査を実施した。

なお、平成10年度に調査区北側隣接地で香川県教育委員会が立会い調査を実施したが、この成果について本書に収録した。

第3節　整理作業

整理作業は、平成14年10月～平成15年3月の6ヵ月間で実施した。作業工程は第1表のとおりである。

	10	11	12	1	2	3
遺物の注記						
遺物の接合、石膏復元						
報告遺物の抽出						
遺物の実測						
遺構整理						
遺物図面のチェック						
遺物挿図原稿の作成						
遺構挿図原稿の作成						
付図、表原稿の作成						
遺物写真撮影						
原稿作成						
編集						
遺物の収納、台帳整備						

第1表　整理作業工程表

第4節　発掘調査及び整理作業の体制

平成8年度・9年度の本調査及び平成14年度の整理は、香川県教育委員会事務局文化行政課の指導の下、次の体制で実施した。

平成8年度

総括	所長	大森　忠彦			
	次長	小野　善範			
総務	係長	前田　和也	調査	主任文化財専門員	廣瀬　常雄
	主査	西川　大		主任文化財専門員	大山　真充
	主査	西村　厚二		文化財専門員	西村　尋文
		（平成8年5月31日まで）		文化財専門員	山下　浩行
	主査	佐々木隆司		参事	近藤　和史
		（平成8年6月1日から）		調査技術員	松尾　歩
	参事	別枝　義昭		調査補助員	溝口　幸一

平成9年度

総括	所長	大森　忠彦			
	次長	小野　善範			
総務	副主幹	田中　秀文	調査	主任文化財専門員	大山　真充
		（平成9年6月1日から）		主任文化財専門員	藤好　史郎
	係長	前田　和也		文化財専門員	西村　尋文
		（平成9年5月31日まで）		主任技師	溝渕　大輔
	主査	西川　大		参事	近藤　和史
	主査	佐々木隆司		調査技術員	佐々木明子
	主事	細川　信哉			
		（平成9年6月1日から）			
	参事	別枝　義昭			

平成14年度

総括	所長	小原　克己
	次長	渡部　明夫
総務	副主幹	野保　昌弘
	係長	多田　敏弘
	主査	山本　和代
	主任主事	高木　康晴
整理	主任文化財専門員	真鍋　昌宏
	担当	東條俊子、西本英里香、加藤恵子、藤澤明子、東川真希子 徳永貴美

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

尾端遺跡は、香川県の東部、木田郡三木町田中に所在し、町道田中氷上線に隣接する。地形的には讃岐山脈から北に派生する尾根の末端で、谷を堰き止めて築いた蓮池の西岸を形成する低丘陵の先端部に位置する。遺跡は、この低丘陵上及び西斜面に広がる。遺跡が斜面部を中心に展開する関係上、丘陵頂部の遺構と裾部の遺構との標高差は著しく、遺構検出面では頂部が標高 28.0 m、裾部が標高 21.5 m前後を測る。検出状況から、北側・南側に遺跡の広がりが考えられる。

蓮池を挟んだ東側には南天枝遺跡が立地している。

第２節　歴史的環境

尾端遺跡の周辺では、弥生時代～中世の遺跡が多く確認されている。

旧石器～縄文時代の遺跡・資料は少ないが、この内、十川東・平田遺跡では有舌尖頭器が出土している。

弥生時代の遺跡は、新たに確認され増加する傾向にある。前期では香川大学農学部遺跡、福万遺跡、中期では鹿伏・中所遺跡、白山２・３遺跡等の集落遺跡が確認されている。なお、白山１遺跡からは扁平鈕式銅鐸が出土している。後期には鹿伏・中所遺跡、西土居遺跡等、この地域の中心的な集落が確認されている。また、本遺跡の西側に隣接する十川東・平田遺跡や北側に位置する砂入遺跡等では小規模な集落も確認されている。

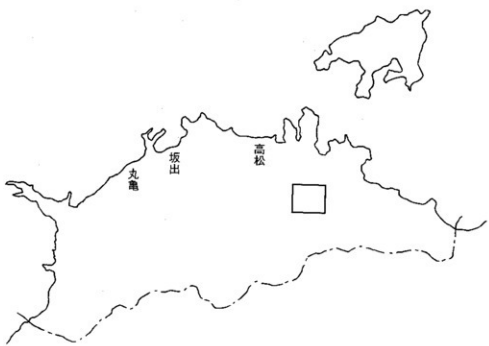
古墳時代には本遺跡の南側丘陵上に後期古墳が点在する。本遺跡の立地する低丘陵上には雷塚古墳、四十塚古墳等の古墳が所在するが、内容は不明である。集落の調査例は少ないが、本遺跡から東へ 300m 離れた南天枝遺跡や砂入遺跡、砂古遺跡等でこの時期の遺跡の調査が行われている。

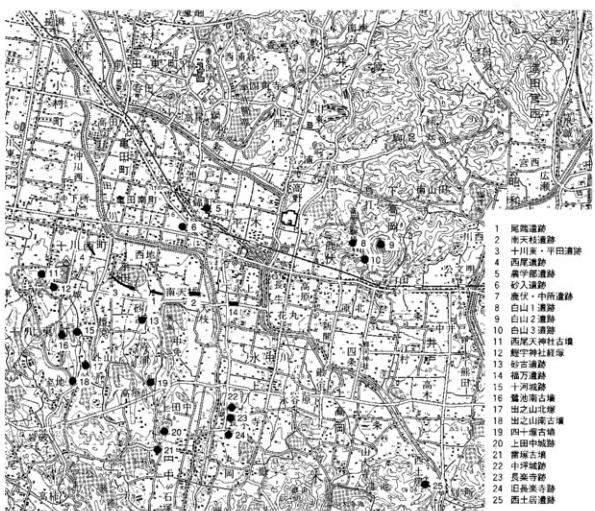
古代では、白鳳～奈良時代にかけて相次いで建立されたと考えられる始覚寺、香蓮寺、上高岡廃寺、長楽寺等の寺院跡が知られている。集落遺跡では本遺跡及び西尾遺跡等で調査が行われている。また、古代の幹線道である南海道が、本遺跡の北約 654m の地点を東西方向に延びているものと推定されている。

南海道は、現在の三木町役場付近では県道高松長尾大内線に重複すると考えられ、西の新川を渡ったあたりから高松東警察署の南側を通って吉田川に当たる東西ラインが想定されている。これを基軸として条里型地割が見られるが、本遺跡周辺は丘陵地であり条里型地割は確認されていない。

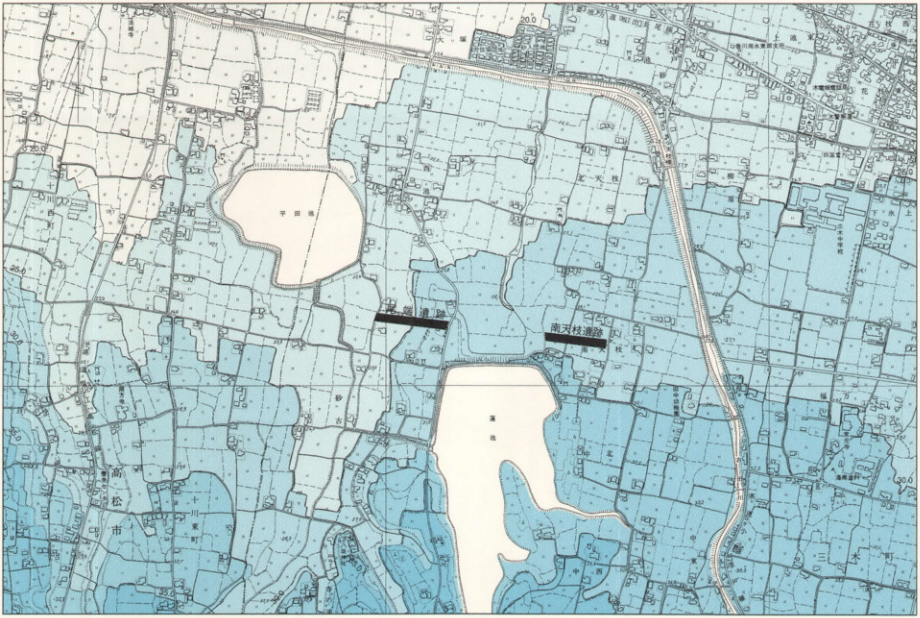
中世には東讃で勢力を持った十河氏の居城である十河城が南西の丘陵上に築かれ、遺跡周辺にも小規模な中世山城が多数点在する。また、集落遺跡は南天枝遺跡、十川東・平田遺跡、福万遺跡等で確認されており、最近の調査により増加する傾向にある。

この地域の平野部では、現在までのところ上記のように散発的に遺跡が確認される状況であるが、弥生時代以降の集落遺跡が相次ぎ確認され増加する傾向にある。このことは、高松平野から長尾平野への交通路に当たるこの地域の重要性を物語るものである。





第1図　遺跡位置及び周辺の遺跡



第２図　周辺の地形

第３章　調査の成果

第１節　調査区

調査区の区分は、概報段階では南天枝遺跡と尾端遺跡を平行して調査したことから、南天枝遺跡をⅠ区、尾端遺跡をⅡ区として大別し、Ⅱ区内を東からａ～ｄ区に細別して実施した。本書では、第３図に示したように、水路に規制された状態を維持して本調査を実施していることから、この状態を反映したⅠ区～Ⅵ区に区分して記述した。

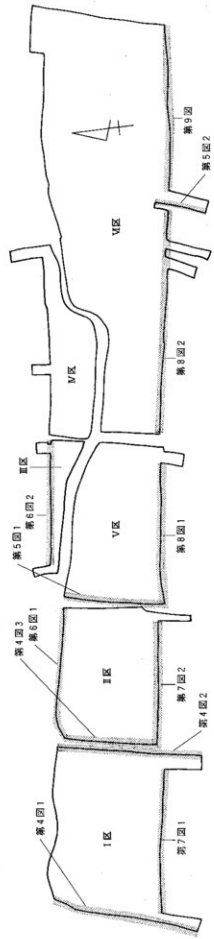
第２節　基本層序

土層図は、第３図に示したように、Ⅰ区西壁からⅥ区南壁までを第４図～第９図として掲載した。

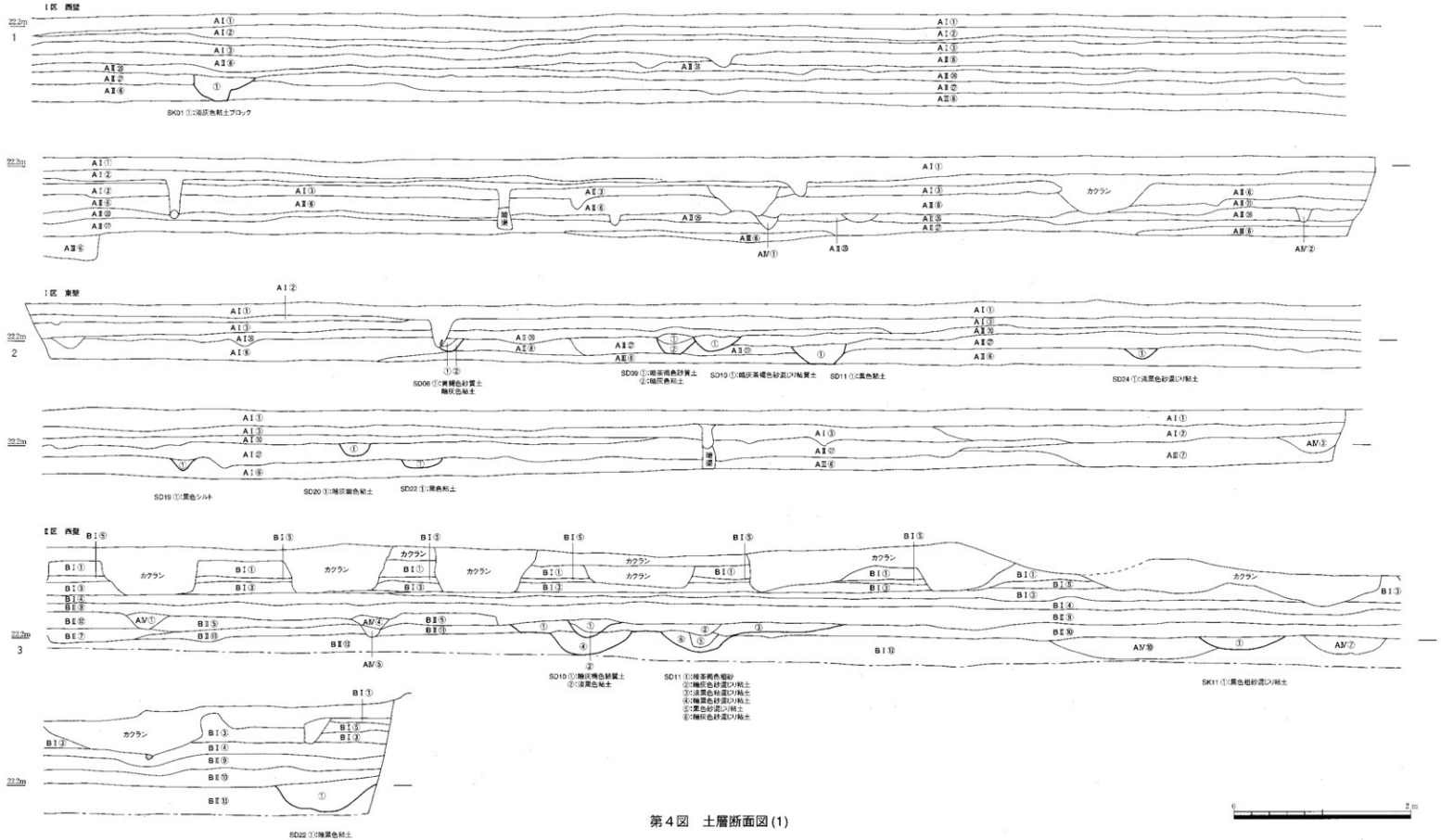
基本となる土層は同一の名称を付しており、遺構埋土などは個別の土層名を記した。遺物包含層が数層見られ、堆積状況と包含されている遺物の年代に矛盾は認められない。これについては、第３章第３節８の包含層の項目で触れている。このことから、土層堆積はほぼ順堆積と考えられる。

第３節　遺構・遺物

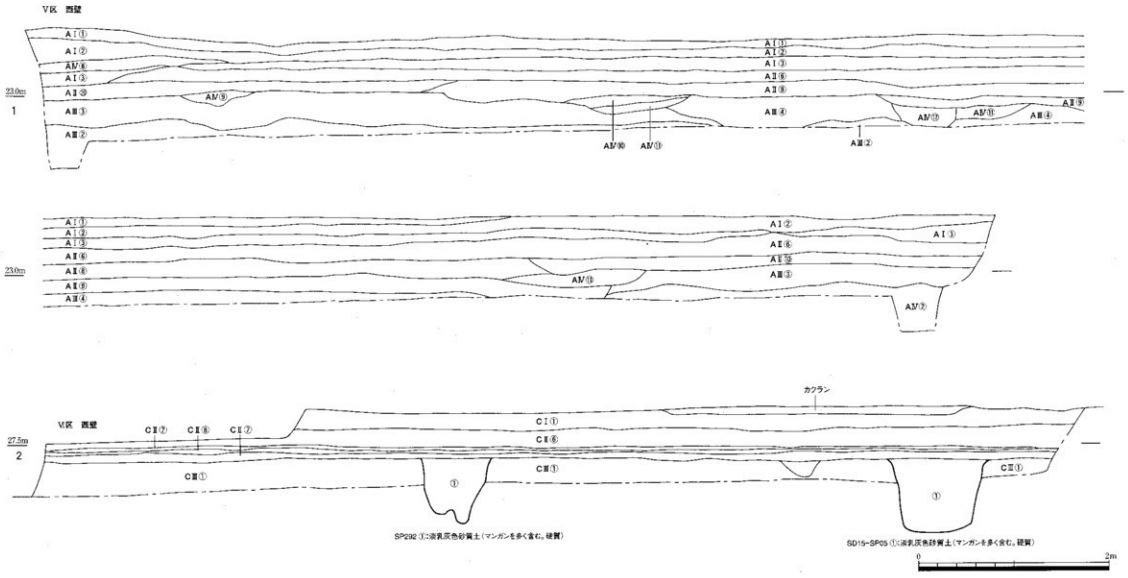
本遺跡は、出土している遺物から主として古代、近世の複合遺跡であることが分かる。年代を確定させることのできる出土遺物を持たない遺構も多々あることから、ここでは遺構の種別にそって記述し、時代ごとの概要については第５章でまとめた。



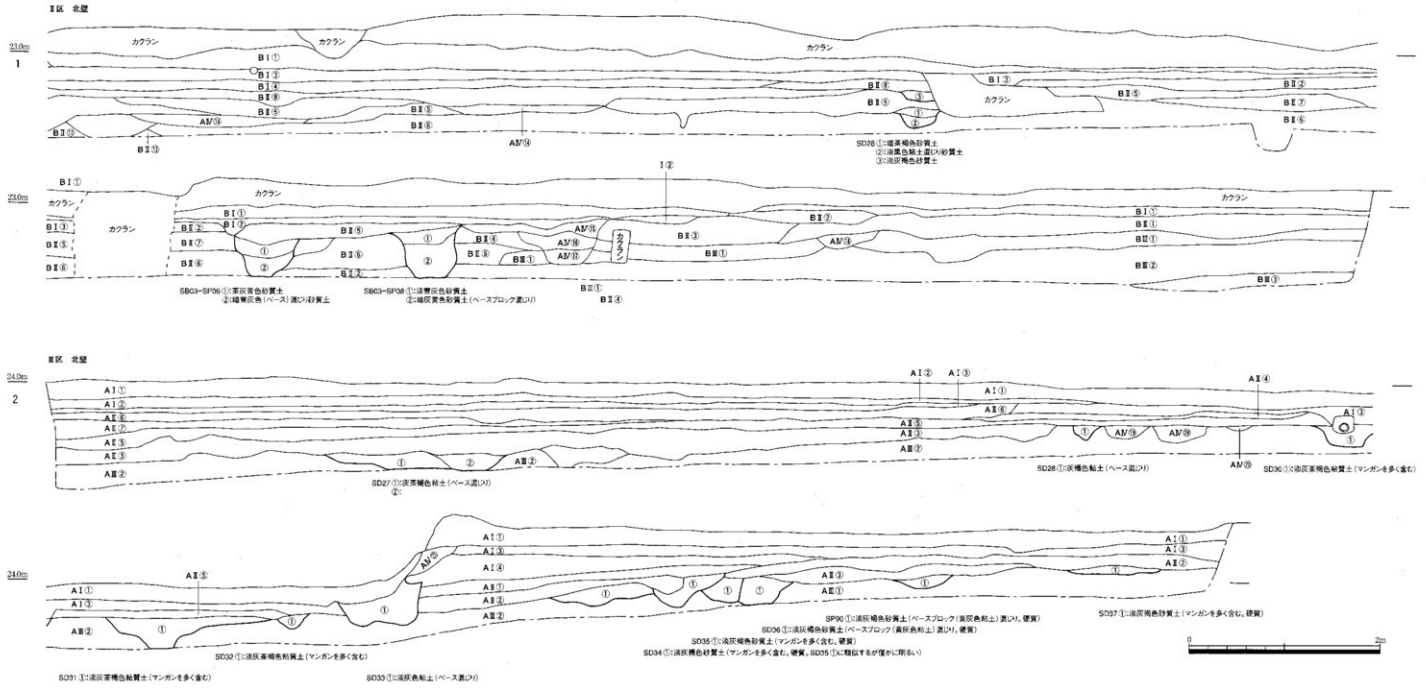
第３図　調査区割図及び土層断面位置図


Ⅰ区 西壁
Ⅰ区 東壁
Ⅱ区 西壁
22.2m
1
2
3
SK01 ①:灰色粘土ブロック
SD06 ①:黄褐色砂質土
②:暗灰色粘土
SD09 ①:暗茶褐色砂質土
②:暗灰色粘土
SD10 ①:暗灰茶褐色砂混じり粘質土
SD11 ①:黒色粘土
SD24 ①:淡黒色砂混じり粘土
SD19 ①:黒色シルト
SD20 ①:暗灰黒色粘土
SD22 ①:黒色粘土
SD10 ①:暗茶褐色粘質土
②:淡黒色粘土
SD11 ①:暗茶褐色粗砂
②:暗灰色砂混じり粘土
③:淡黒色粘質土混じり粘土
④:暗黒色砂混じり粘土
⑤:黒色砂混じり粘土
⑥:暗灰色砂混じり粘土
SK11 ①:黒色粗砂混じり粘土
SD22 ①:暗黒色粘土
カクラン
撹乱
0
2m

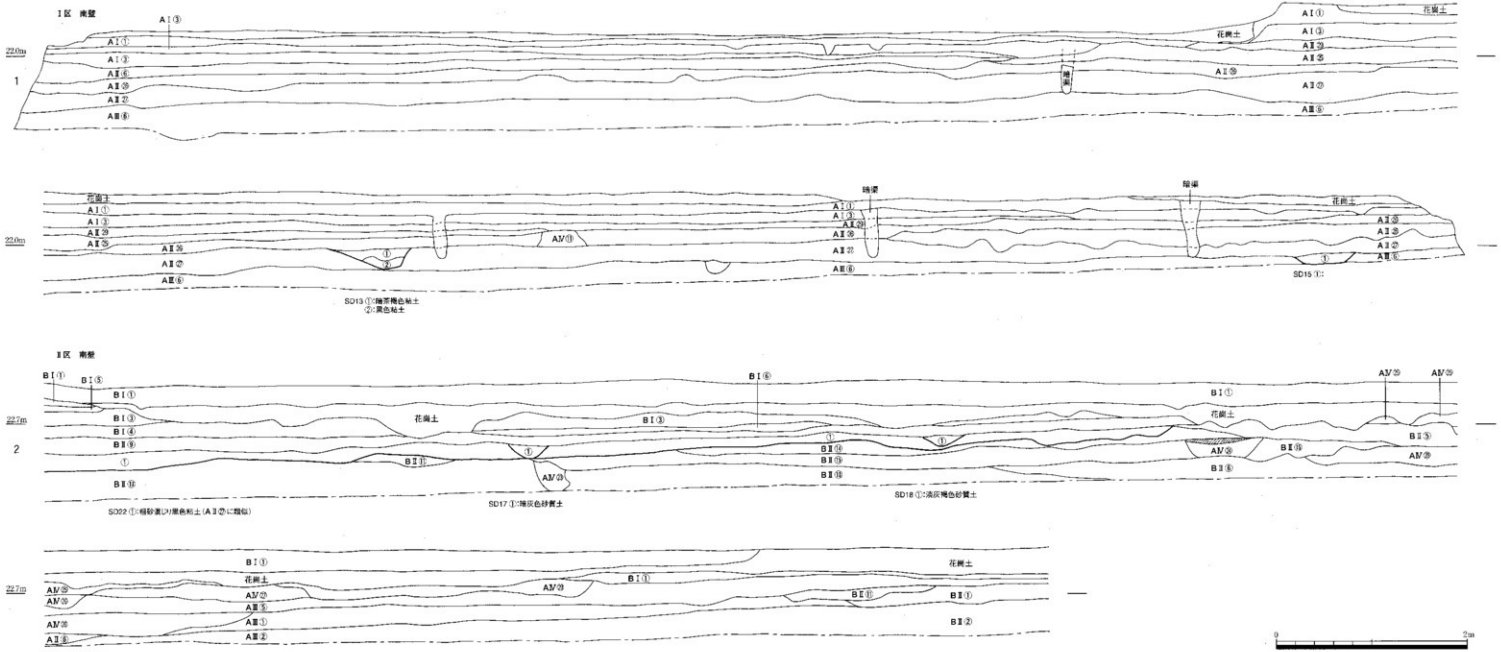
第４図　土層断面図(1)


V区 西壁
23.0m
1
23.0m
V区 西壁
27.5m
2
カクラン
SP292 ①:淡乳灰色砂質土(マンガンを多く含む。硬質)
SD15-SP05 ①:淡乳灰色砂質土(マンガンを多く含む。硬質)
0
2m

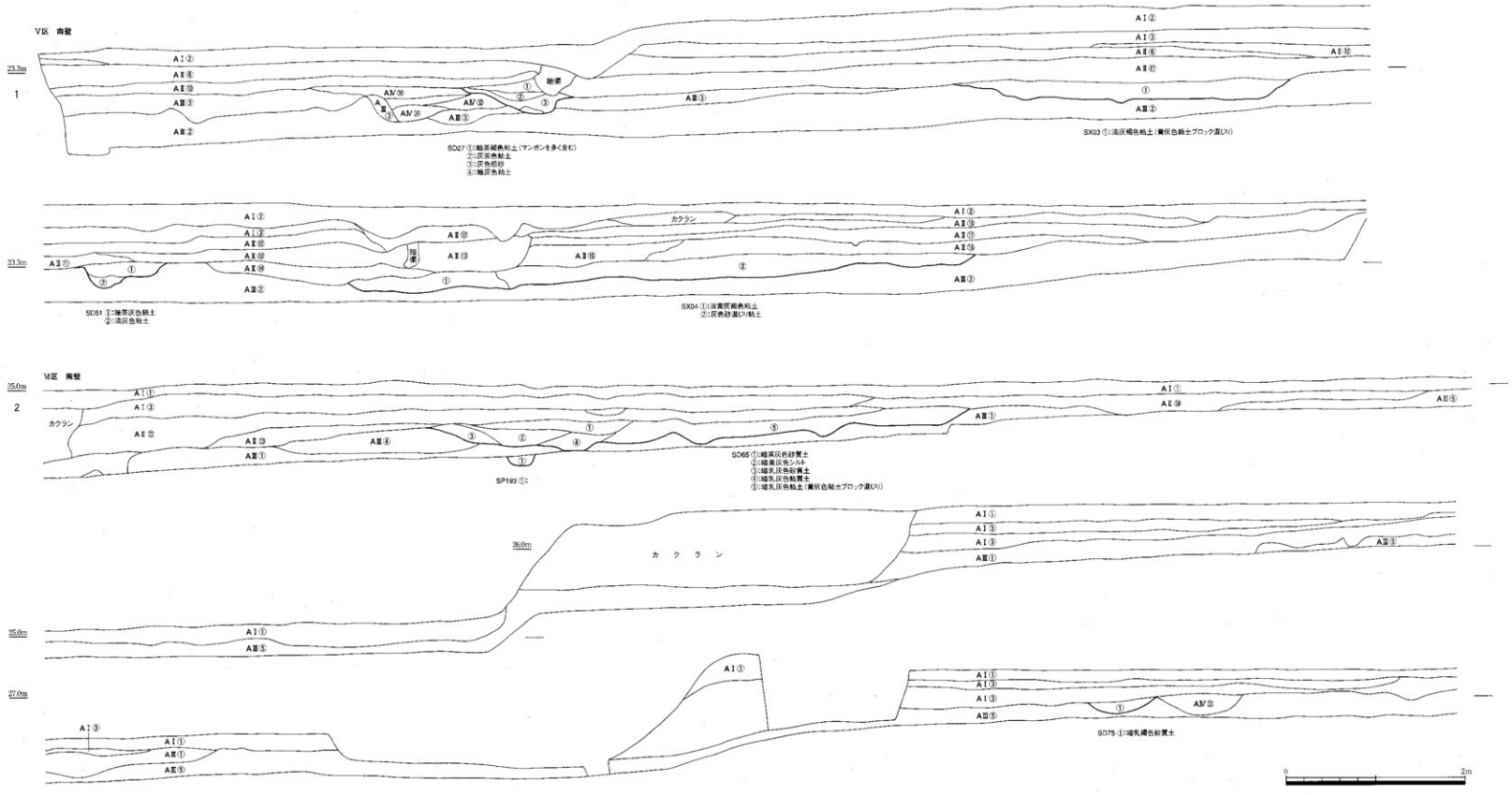
第５図　土層断面図(2)


Ⅰ区 北壁
23.0m
1
カクラン
SD28 ①:暗茶褐色砂質土
②:淡黒色粘土混じり砂質土
③:淡灰褐色砂質土
SB03-SP09 ①:茶灰黄色砂質土
②:暗青灰色（ベース）混じり砂質土
SB03-SP08 ①:淡青灰色砂質土
②:暗灰黄色砂質土（ベースブロック混じり）
Ⅲ区 北壁
24.0m
2
SD27 ①:灰茶褐色粘土（ベース混じり）
SD28 ①:灰褐色粘土（ベース混じり）
SD30 ①:淡灰茶褐色粘質土（マンガンを多く含む）
SD31 ①:淡灰茶褐色粘質土（マンガンを多く含む）
SD32 ①:淡灰茶褐色粘質土（マンガンを多く含む）
SD33 ①:淡灰色粘土（ベース混じり）
SD34 ①:淡灰褐色砂質土（マンガンを多く含む。硬質。SD35 ①に類似するが僅かに明るい）
SD35 ①:淡灰褐色砂質土（マンガンを多く含む。硬質）
SD36 ①:淡灰褐色砂質土（ベースブロック（黄灰色粘土）混じり。硬質）
SP90 ①:淡灰褐色砂質土（ベースブロック（黄灰色粘土）混じり。硬質）
SD37 ①:淡灰褐色砂質土（マンガンを多く含む。硬質）
0
2m

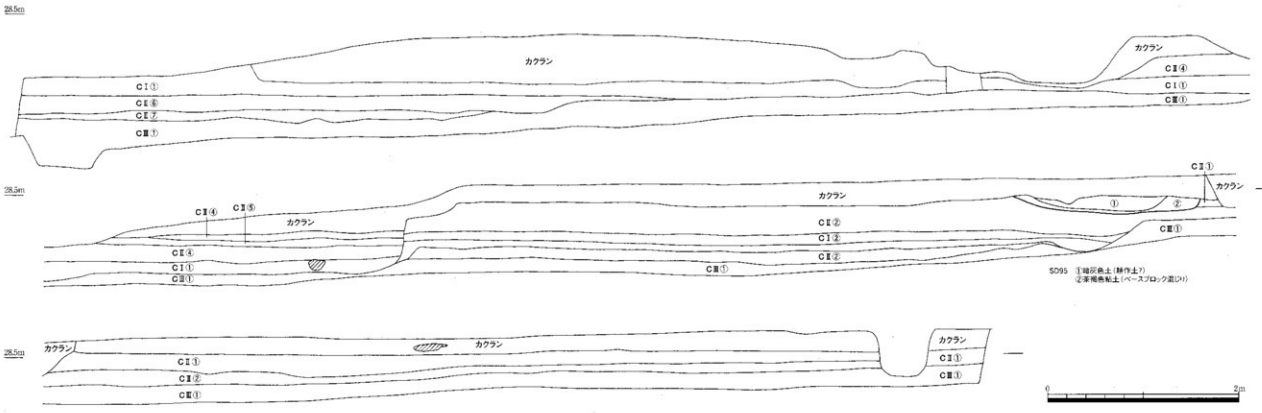
第６図　土層断面図 (3)


Ⅰ区 南壁
Ⅱ区 南壁
花崗土
SD13 ①:暗茶褐色粘土
②:黒色粘土
SD15 ①:
SD17 ①:暗灰色砂質土
SD18 ①:淡灰褐色砂質土
SD32 ①:相砂混じり黒色粘土(AⅡ②に類似)
0
2m

第７図　土層断面図(4)

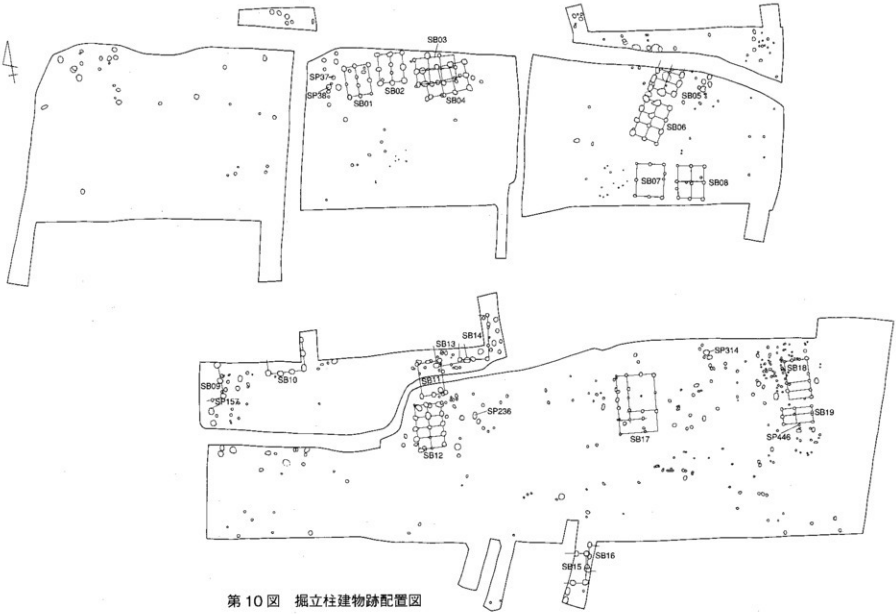

V区 南壁
23.3m
1
SD27 ①:暗茶褐色粘土(マンガンを多く含む)
②:灰茶色粘土
③:灰色相砂
④:暗灰色粘土
SX03 ①:淡灰褐色粘土(黄灰色粘土ブロック混じり)
23.3m
カクラン
SD51 ①:暗茶灰色粘土
②:淡灰色粘土
SX04 ①:淡黄灰褐色粘土
②:灰色砂混じり粘土
Ⅵ区 南壁
25.0m
2
カクラン
SP193 ①:
SD65 ①:暗茶灰色砂質土
②:暗黄灰色シルト
③:暗乳灰色砂質土
④:暗乳灰色粘質土
⑤:暗乳灰色粘土(黄灰色粘土ブロック混じり)
26.0m
カ ク ラ ン
25.0m
27.0m
SD75 ①:暗乳褐色砂質土
0
2m

第8図　土層断面図(5)



A Ⅰ①:耕作土
A Ⅰ②:暗灰色有機層(旧耕作土)
A Ⅰ③:茶褐色砂質土(A Ⅰ①の床土)
A Ⅰ④:黄灰色粘土(床土、地山に類似)
A Ⅰ⑤:淡灰褐色砂質土(A Ⅰ③に類似)
A Ⅱ①:灰褐色砂質土(マンガンを含む、硬質)
A Ⅱ②:暗灰褐色砂質土(マンガンを多量に含む、硬質)
A Ⅱ③:淡灰茶褐色砂質土(マンガンを含む、硬質)
A Ⅱ④:暗茶褐色粘土(マンガンが多い、かなり硬質、床土層か?)
A Ⅱ⑤:淡灰色粘土(マンガンを多量に含む)
A Ⅱ⑥:淡灰黄色砂質土
A Ⅱ⑦:淡黄灰色砂質土(A Ⅱ⑥より暗く粘性度が強い)
A Ⅱ⑧:灰黄褐色砂質土
A Ⅱ⑨:暗灰茶色砂質土(マンガンが多く粘性度が低い)
A Ⅱ⑩:茶褐色粘質土(マンガンが多い、粘性度が低い)
A Ⅱ⑪:茶灰褐色粘質土(マンガンが顕著である、A Ⅱ⑩に類似)
A Ⅱ⑫:淡灰色粘土
A Ⅱ⑬:灰色粘土
A Ⅱ⑭:暗茶灰色粘土
A Ⅱ⑮:淡灰黄褐色粘土
A Ⅱ⑯:淡灰黄色粘土
A Ⅱ⑰:暗灰茶褐色粘土
A Ⅱ⑱:暗黄褐色粘土
A Ⅱ⑲:暗灰色粘土
A Ⅱ⑳:淡灰色粘土(黄灰色粘土ブロック混じり)
A Ⅱ㉑:茶灰褐色砂質土(マンガンが多い)
A Ⅱ㉒:淡灰茶褐色砂質土(マンガンが多い)
A Ⅱ㉓:暗乳灰褐色砂質土(マンガンを含む)
A Ⅱ㉔:茶灰褐色粘土(黄灰色粘土ブロック混じり)
A Ⅱ㉕:灰紫色砂混じり粘土
A Ⅱ㉖:淡灰褐色砂質土(遺物を多く含む)
A Ⅱ㉗:黒褐色砂混じり粘土(6世紀末頃の遺物を多く含む)
A Ⅱ㉘:灰紫色砂混じり粘土(黒色粘土ブロック混じり、6~8世紀頃の遺物を多く含む)
A Ⅱ㉙:淡黄灰色砂混じり粘質土
A Ⅱ㉚:灰紫色砂混じり粘土(6~8世紀頃の遺物を多く含む、A Ⅱ㉚に類似)
A Ⅱ㉛:淡灰色砂質土(僅かに褐色)
A Ⅱ㉜:淡黄灰色粘土(マンガンを多く含む)
A Ⅱ㉝:黄灰褐色粘土(マンガンを多く含む)
A Ⅱ㉞:暗灰褐色砂質土(マンガンを多く含む、僅かに粘性がある)
A Ⅱ㉟:暗乳灰褐色砂質土
A Ⅱ㊱:黄灰色粘土
A Ⅱ㊲:暗黄灰色砂
A Ⅱ㊳:暗茶灰褐色粘砂(マンガンが茶色に変色)
A Ⅲ①:暗灰褐色砂質土
A Ⅲ②:灰褐色砂質土
A Ⅲ③:灰色砂質土
A Ⅲ④:暗灰褐色粘質土
A Ⅲ⑤:淡黒色粘土
A Ⅲ⑥:淡黒色砂混じり粘土
A Ⅲ⑦:黒色砂混じり粘土
A Ⅲ⑧:淡灰色砂質土
A Ⅲ⑨:淡黒色砂混じり粘土
A Ⅲ⑩:茶褐色粘砂
A Ⅲ⑪:淡灰色粘砂
A Ⅲ⑫:淡灰色粘砂(灰色粘土ブロック混じり)
A Ⅲ⑬:暗黄褐色粘砂
A Ⅲ⑭:灰茶褐色砂質土
A Ⅲ⑮:粗砂(暗茶褐色粘土混じり)
A Ⅲ⑯:灰茶褐色砂質土
A Ⅲ⑰:淡黒色粘土(ベースブロック粗砂混じり)
A Ⅲ⑱:淡黒灰色砂質土
A Ⅲ⑲:ベース混じり灰褐色粘土
A Ⅲ⑳:ベース混じり灰茶褐色粘土
A Ⅲ㉑:淡灰茶色砂質土
A Ⅲ㉒:灰褐色粘質土(砂を多く含む)
A Ⅲ㉓:淡黒色砂質土
A Ⅲ㉔:暗茶褐色砂
A Ⅲ㉕:灰褐色砂
A Ⅲ㉖:暗灰色砂質土
A Ⅲ㉗:暗茶褐色粘質土
A Ⅲ㉘:灰色砂
A Ⅲ㉙:乳灰褐色粘質土
A Ⅲ㉚:茶褐色粘土
A Ⅲ㉛:灰色粘土
A Ⅲ㉜:灰茶色粘土
A Ⅲ㉝:淡黄灰色砂質土
B Ⅰ①:耕作土
B Ⅰ②:淡灰黄色砂質土(床土)
B Ⅰ③:乳灰褐色砂質土
B Ⅰ④:淡乳色砂質土
B Ⅰ⑤:乳灰色砂質土
B Ⅰ⑥:茶褐色粘質土
B Ⅱ①:暗灰褐色砂質土(マンガンを多く含む、上面遺構面)
B Ⅱ②:淡灰色砂(マンガンを多く含む)
B Ⅱ③:暗茶褐色砂質土(マンガンを多く含む)
B Ⅱ④:茶褐色砂質土(マンガン離化層、茶色に変色、B Ⅱ③に類似)
B Ⅱ⑤:暗茶灰褐色砂質土(マンガンを多く含む)
B Ⅱ⑥:暗橙灰褐色砂質土(僅かにグライ化)
B Ⅱ⑦:灰色砂(僅かにグライ化)
B Ⅱ⑧:灰色砂質土(粗砂を多く含む、僅かに粘性がある)
B Ⅱ⑨:暗灰茶褐色砂質土(マンガンを多く含む、A Ⅱ⑨に類似)
B Ⅱ⑩:粗砂混じり黒色粘土(A Ⅱ②に類似)
B Ⅱ⑪:茶褐色砂質土(マンガンで茶色に変色)
B Ⅱ⑫:灰褐色砂礫(小クサリ礫を含む、B Ⅱ⑤に類似)
B Ⅱ⑬:淡黒青灰色砂(地山)
B Ⅱ⑭:淡灰褐色砂
B Ⅱ⑮:淡灰茶褐色砂
B Ⅱ⑯:暗橙褐色砂混じりシルト
B Ⅲ①:灰色粘土
B Ⅲ②:黄褐色粘土
C Ⅰ①:灰色土(旧耕作土)
C Ⅰ②:淡灰色粘質土(旧耕作土)
C Ⅱ①:暗茶褐色粘質土(遺成土?)
C Ⅱ②:暗褐色粘質土(遺成土?)
C Ⅱ③:茶褐色粘土(マンガンを多く含む、床土?)
C Ⅱ④:黄粘ブロック構成土(遺成土)
C Ⅱ⑤:黄粘ブロック混じり灰色粘土(遺成土)
C Ⅱ⑥:灰乳褐色砂質土(マンガンを多く含む)
C Ⅱ⑦:暗灰灰茶褐色粘質土(マンガンを多く含む)
C Ⅱ⑧:茶褐色粘質土(マンガン面)
C Ⅲ①:黄褐色粘土(山土粘土)

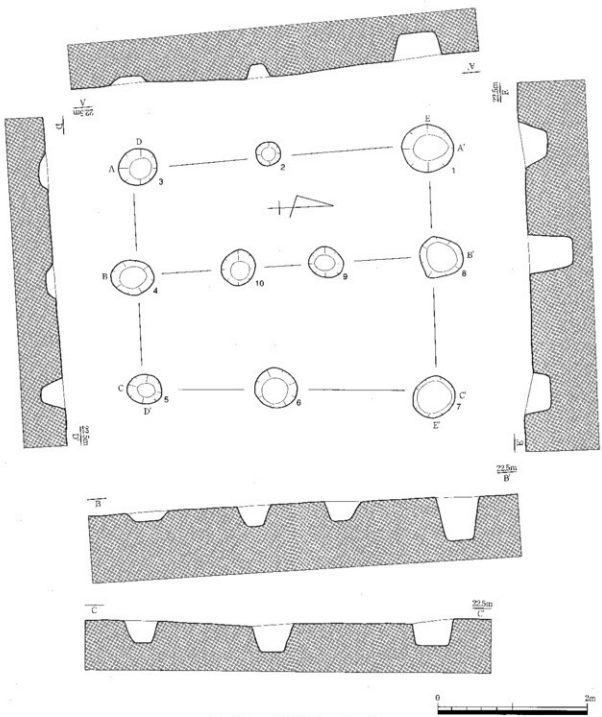
第９図　土層断面図(6)



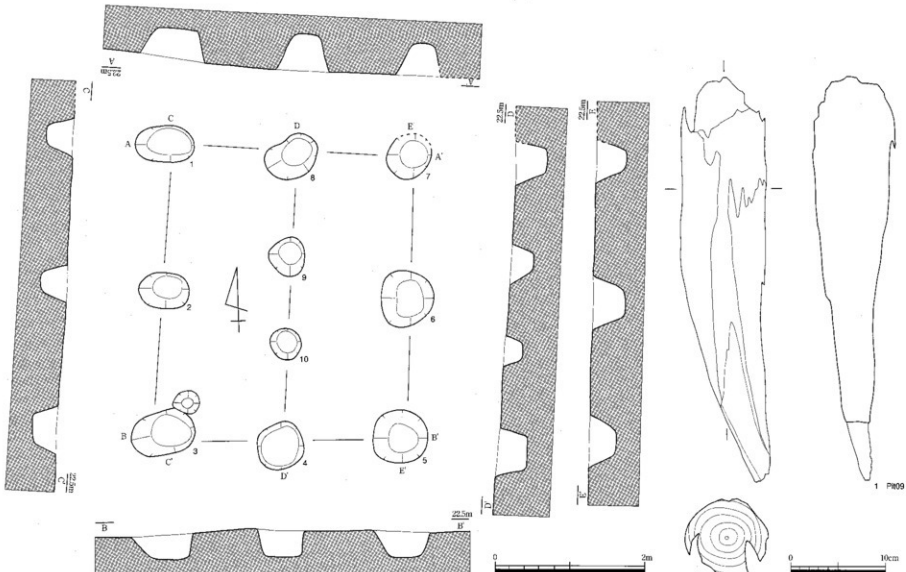
第 10 図　掘立柱建物跡配置図

1　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第10図に示したように、Ⅱ区～Ⅵ区までやや間を空けながら満遍なく分布している。これは、丘陵斜面を段々に造成して平坦面を作り出し、この平坦面上に建物を配置した結果であると考えられる。しかし、平坦面が南北に伸びることから、調査区外にどの程度の掘立柱建物跡が存在しているかは予測できない。



第11図　SB01 平・断面図



第 12 図　SB02 平・断面図、出土遺物実測図

第２表　掘立柱建物跡一覧表

名称		規模						方向	
報告名	遺構名称	梁間(間)	×	桁行(間)	梁間(m)	×	桁行(m)	面積(㎡)	
SB01	SB17	2		2	3.2		3.9	12.48	N 0°E
SB02	SB16	2		2	3.2		3.8	12.16	N 3°E
SB03	SB15	2		3	3.4		5.1	17.34	N 87°E
SB04	SB14	2		3	3.7		5.4	19.98	N 87°E
SB05	SB07	2		2以上	3.3			0	N 30°E
SB06	SB08	2		3	3.5		5.0	17.5	N 30°E
SB07	SB11	2		2	3.7		4.3	15.91	N 13°E
SB08	SB10	2		2(3)	3.3		4.3	14.19	N 7°E
SB09	SB06	1以上		3以上				0	N 4°W
SB10	SB05	3		3以上	4.9			0	N 3°E
SB11	SB03	2		2	3.0		4.4	13.2	N 0°E
SB12	SB04	2		4	3.5		5.3	18.55	N 3°E
SB13	SB02	2			4.0			0	N 0°E
SB14	SB01	2		3	3.9		5.8	22.62	N 5°E
SB15	SB13	2		1以上	4.0			0	N 85°W
SB16	SB12	2			3.3			0	N 75°W
SB17	SB09	4		5	5.0		7.5	37.5	N 5°E
SB18	-	3		4	2.9		5.0	14.5	N 0°E
SB19	-	2		2	2.0		3.9	7.8	N 2°E

ＳＢ０１（第 11 図）

Ⅱ区の中央部北側で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁間２間（3.2 m）×桁行２間（3.9 m）、面積 12.48 ㎡で主軸方位はＮ 0°　Ｅを測る。なお、この掘立柱建物跡は棟方向に Pit09・10 の束柱を配している。柱穴掘り方平面は径 0.4 ～ 0.8 m の不整円形、断面は深さ 0.2 ～ 0.5 m を測る逆台形状を呈する。検出面が南に傾斜することから、南側の柱穴の残存率は低い。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む黒色系のシルトからなる。遺物は須恵器と土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。

ＳＢ０２（第 12 図）

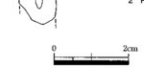
Ⅱ区中央部北側で、SB01 の東側で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁間２間（3.2 m）×桁行２間（3.8 m）、面積 12.16 ㎡で主軸方位はＮ 3°　Ｅを測る。なお、この掘立柱建物跡は棟方向に Pit09・10 の束柱を配しており、SB01 同様の形態を持つ。柱穴掘り方平面は径 0.4 ～ 0.8 m の不整円形、断面は深さ 0.2 ～ 0.4 m を測る逆台形状を呈する。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む淡黒色系の粘質土からなる。遺物は須恵器と土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。

１は Pit09 から出土した柱材で、材質（以下、材質については第４章第１節の分析結果に基づく。）はヒノキ科である。柱材は、先端が杭状に尖っており、上端は折れた状態を示している。

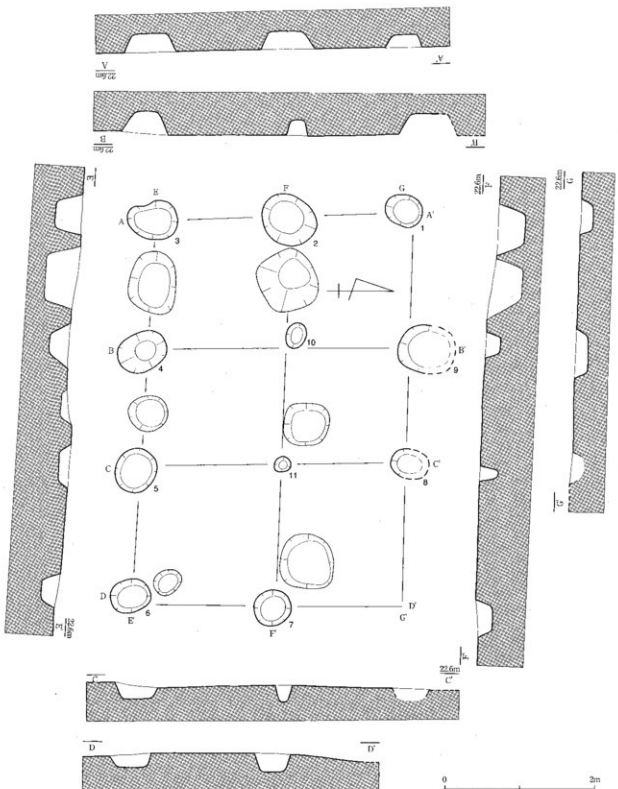
ＳＢ０３（第 13・14 図）

Ⅱ区北東部で SB04 に後出する形で検出した、東西棟で総柱の掘立柱建物跡である。梁間２間（3.4 m）×桁行３間（5.1 m）、面積 17.34 ㎡で主軸方位は N87°　Ｅを測る。柱穴掘り方平面は径 0.3 ～ 0.6m の不整円形、断面は深さ 0.2 ～ 0.4m を測る逆台形状を呈する。埋土は黄灰色の粘土ブロックを含む淡黒色系の粘質土からなる。遺物は須恵器片、土師器片、土製管玉等が出土しているが詳細な時期については不明である。

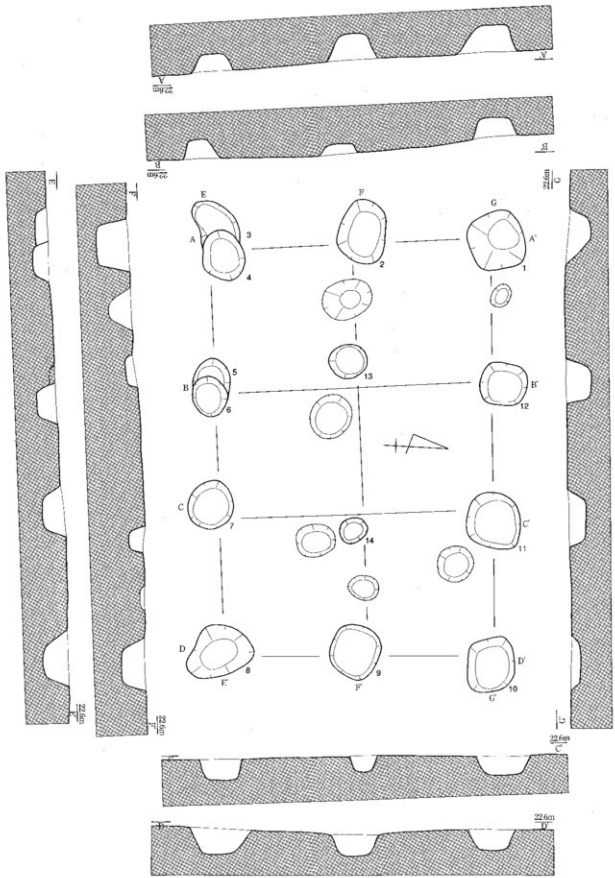
２は Pit04 から出土した土製管玉で、下半部が欠失している。切断面が斜めに入り、研磨したように平滑である。管状土錘の可能性



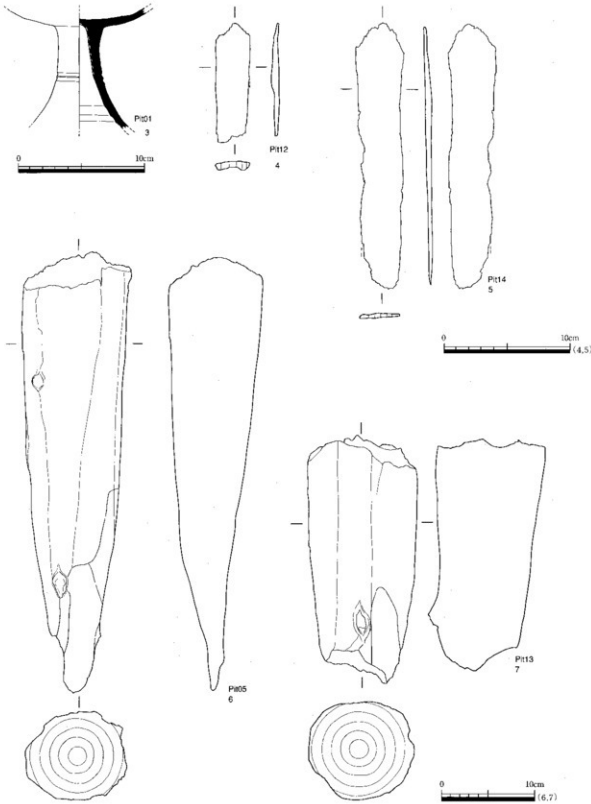
第 14 図　SB03 出土遺物実測図



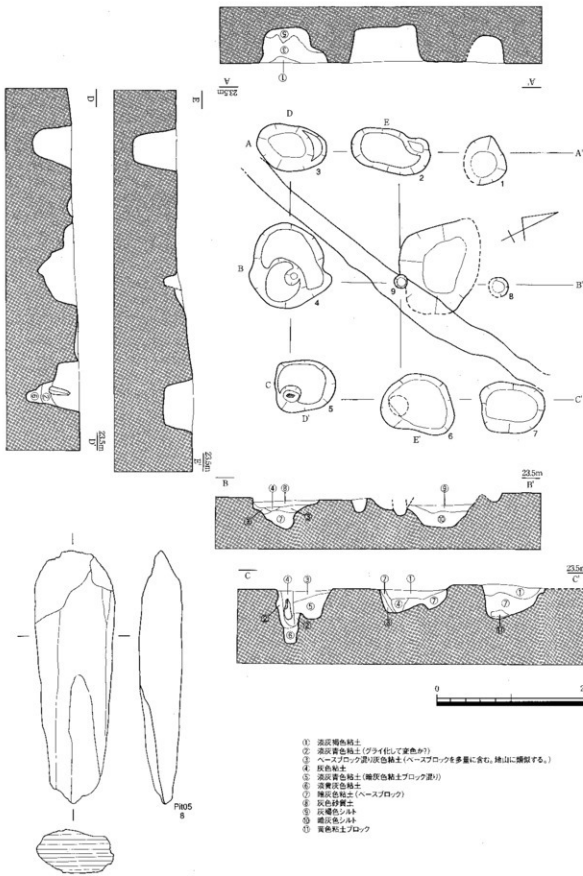
第 13 図　SB03 平・断面図



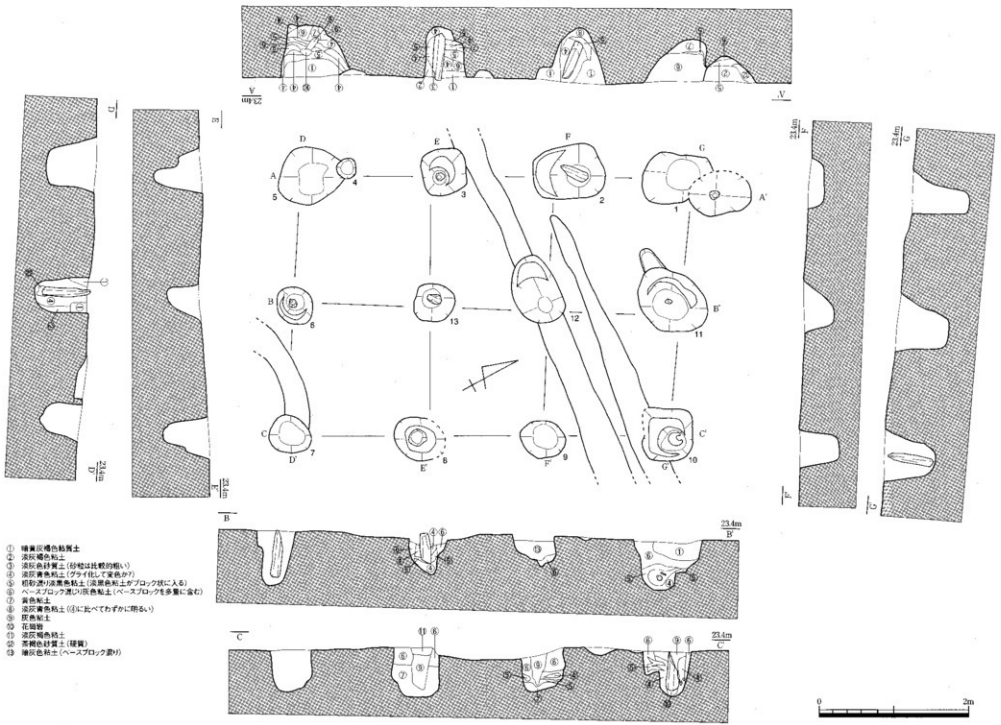
第15図　SB04 平・断面図



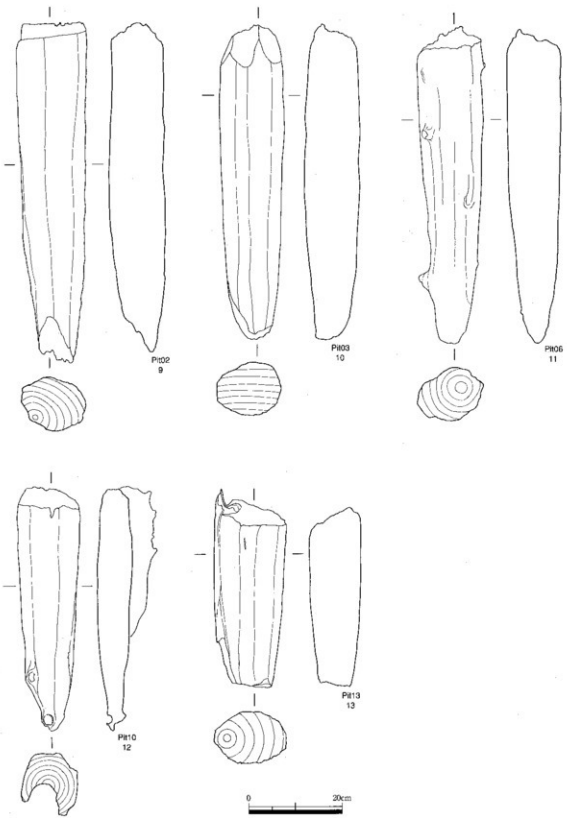
第 16 図　SB04 出土遺物実測図



第 17 図　SB05 平・断面図、出土遺物実測図



第 18 図　SB06 平・断面図



第 19 図　SB06 出土遺物実測図

も考えられるが、中央部が紡錘状に膨らまないことや、摩滅はしているが丁寧なつくりであることから土製管玉とした。

ＳＢ０４（第15・16図）

Ⅱ区北東部でSB03に先行する形で検出した、東西棟で総柱の掘立柱建物跡である。梁間２間（3.7m）×桁行３間（5.4m）、面積19.98㎡で主軸方位はN87°Ｅを測る。柱穴掘り方平面は径0.5～0.8mの不整方形、断面は深さ0.2～0.4mを測る逆台形状を呈する。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む黒色系の粘質土からなる。遺物は須恵器、土師器片、木製品等が出土している。

３はPit01から出土した須恵器高杯高台で、杯部と高台端部を欠失している。長高台二段で、中央部に二条の凹線が見られる。４（Pit12）・５（Pit14）は薄い板材で、共に上部を山形に削っていることから斎串の可能性が高い。なお、４は先端部も欠失している。斎串は自然河川等からの出土が多く、柱穴からの出土は珍しい。材質は両者ともモミ属である。６（Pit05）・７（Pit13）は柱材で、材質はそれぞれコウヤマキである。６は、先端が杭状に尖っており、上端は折れた状態を示す。７は、上下とも折れた状態を示している。

SB04の年代は、唯一の出土遺物である３により、杯部と高台端部を欠失していることから明確ではないが、同じ三木町に所在する小谷窯跡出土須恵器の編年（信里2002）に準拠すれば様相１に比定され、７世紀第２四半期頃に位置付けられる。

ＳＢ０５（第17図）

Ⅴ区中央でSB06に隣接して検出した、南北棟の総柱掘立柱建物跡である。Ⅲ区とⅤ区の境にある里道の関係で南半分のみ検出した。梁間２間（3.3m）×桁行２間以上（3.0m）、面積9.9㎡以上で主軸方位はN30°Ｅを測る。柱穴掘り方平面は径0.6～1.2mの不整円形、断面は深さ0.3～0.7mを測る不整Ｕ字状を呈する。埋土は暗灰色系の粘土と黄灰褐色系の粘土からなる。

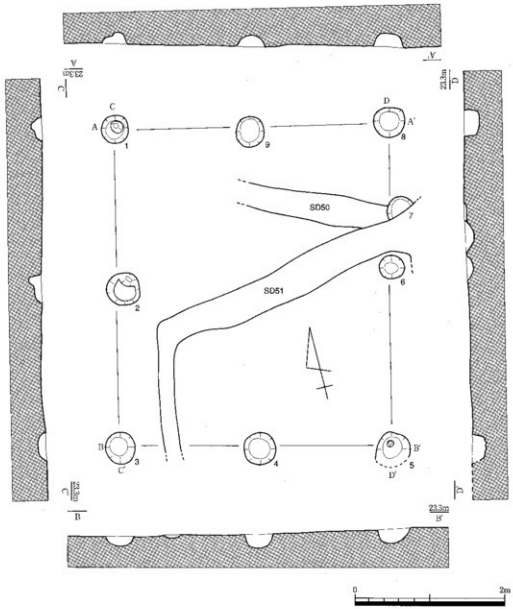
８はPit05から出土した柱材で、材質はカヤである。柱材は、やや扁平で先端が尖っており、上端は折れた状態を示している。

出土遺物は弥生土器と土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。

ＳＢ０６（第18・19図）

Ⅴ区中央でSB05に隣接して検出した、南北棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間２間（3.5m）×桁行３間（5.0m）、面積17.5㎡で主軸方位はN30°Ｅを測る。柱穴掘り方平面は径0.5～1.0mの不整円形、断面は深さ0.3～0.7mを測る不整Ｕ字状を呈する。埋土は淡黒色系の粘土と黄灰褐色系の粘土からなる。柱穴の中には先の２種類の埋土を互層に埋め込み、柱を締め固めている柱穴もある。なお、12柱穴中５柱穴より柱材を検出した。出土遺物は柱材以外には土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。

９～13は柱材である。それぞれ、９（Pit02）、10（Pit03）、11（Pit06）、12（Pit10）、13（Pit13）から出土した。材質はいずれもコウヤマキである。柱材は先端が杭状に尖っており、上端は折れた状態を示すものが多い。



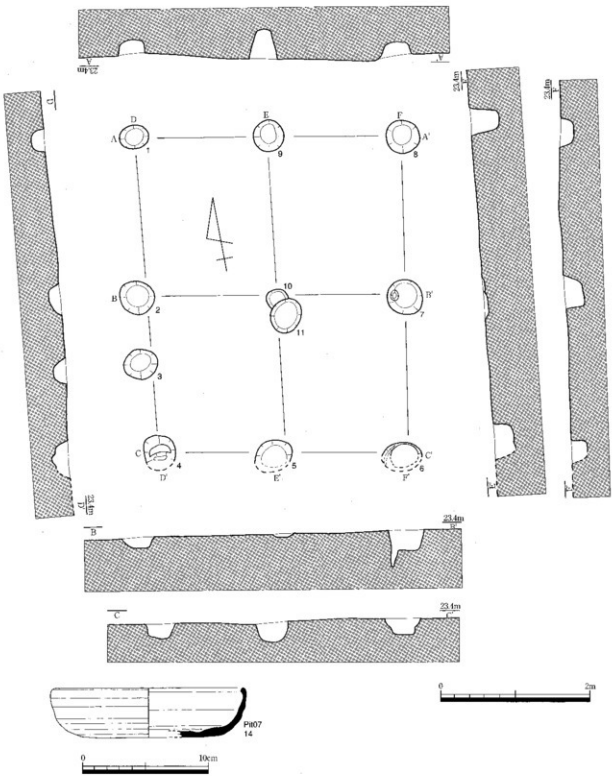
第20図　SB07平・断面図

SB07（第20図）

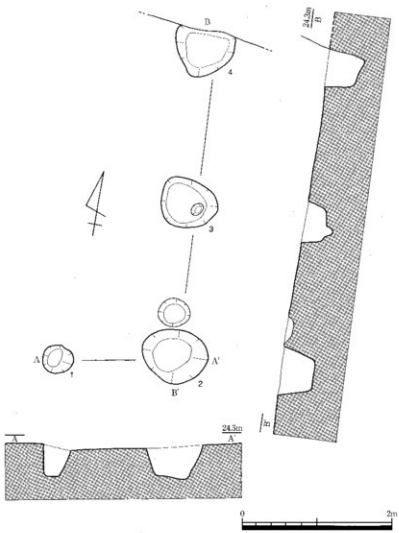
V区中央でSB08に隣接して検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（3.7m）×桁行2間（4.3m）、面積15.91㎡で主軸方位はN 13° Eを測る。柱穴掘り方平面は径0.3～0.5mの不整円形、断面は深さ0.1～0.2mを測る不整U字状を呈する。埋土は黄灰褐色系の粘土を含む灰色系の砂質土である。出土遺物は須恵器、土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。

SB08（第21図）

V区中央でSB07に隣接して検出した、南北棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間（3.3m）×桁行2間（4.3m）、面積14.19㎡で主軸方位はN7° Eを測る。柱穴掘り方平面は径0.4～0.5m



第 21 図　SB08 平・断面図、出土遺物実測図



第22図　SB09 平・断面図

の不整円形、断面は深さ0.1～0.4mを測る不整U字状を呈する。埋土は黄灰褐色系の粘土を含む灰色系の砂質土である。出土遺物は須恵器杯・甕、土師器の細片等である。

14は須恵器杯である。底面は比較的平坦で、回転ヘラ切りで仕上げられている。口縁端部は内湾して丸く終わる。口径が大型化していることから様相3、7世紀第4四半期に位置付けたい。

SB09（第22図）

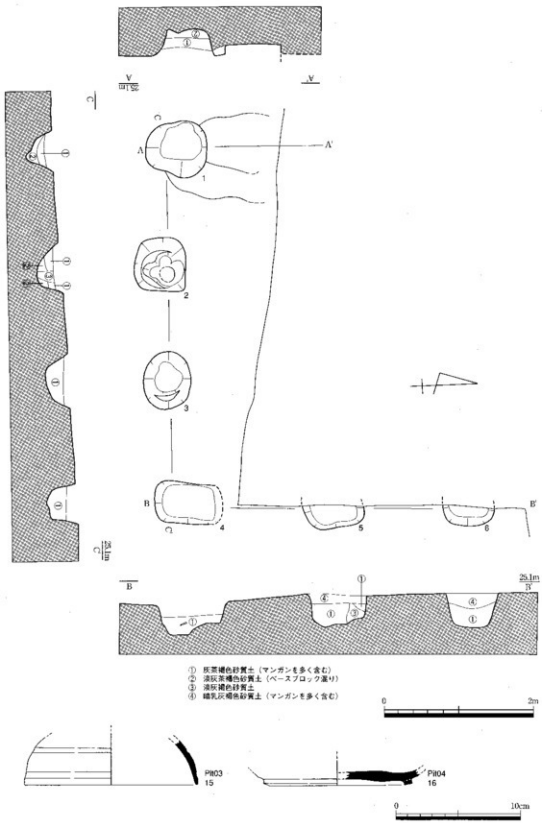
Ⅳ区西端で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間以上×桁行3間以上で主軸方位はN4°Wを測る。柱穴掘り方平面は径0.7mの不整円形、断面は深さ0.4mを測る逆台形状を呈する。

出土遺物はなく、時期については不明である。

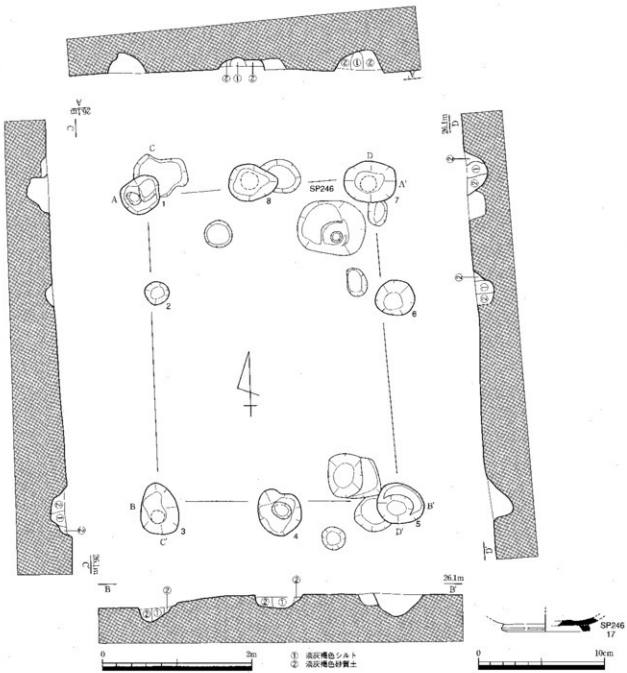
SB10（第23図）

Ⅳ区で検出した東西棟と考えられる掘立柱建物跡である。梁間3間（4.9m）×桁行3間以上で主軸方位はN3°Eを測る。南北棟の可能性も否定できないが、南北棟の場合は梁間が3間となり、本遺跡では類例のない大型建物跡の可能性を考える必要がある。このため、ここでは東西棟としておく。柱穴掘り方平面は径0.7mの不整円形、断面は深さ0.5mを測る逆台形状を呈する。Pit02では、断面に柱痕が見られ、検出している他の柱材同様、杭状の形態を呈している。他のPitの埋土は、水平堆積土であることから、その多くは柱材を抜き取った可能性が高い。

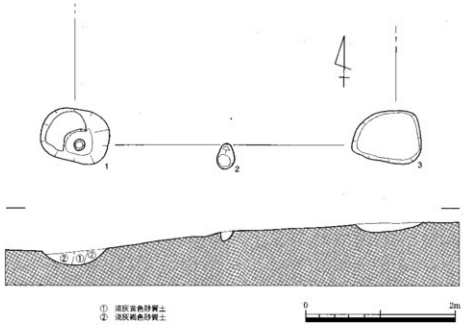
出土遺物は須恵器杯蓋15（Pit03）と須恵器杯16（Pit04）がある。15は小片のため、器種・口径にやや問題を残すが、様相1より一段階古く位置付けられ、飛鳥Ⅰに比定される。16は高台のみの出土であるが、高台断面が四角形を呈し、外方向に広がりがなく、比較的器高が低いことを考慮すれば様相4、8世紀初頭と考えられる。柱穴の埋没状況は不明であるが、年代的に新しい16から8世紀初頭の建物としておく。



第 23 図　SB10 平・断面図、出土遺物実測図



第 24 図　SB11 平・断面図、出土遺物実測図



第26図　SB13平・断面図

ＳＢ１１（第24図）

Ⅳ・Ⅵ区にまたがって検出した南北棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(3.0ｍ)×桁行2～3間(4.4ｍ)、面積13.2㎡で主軸方位はＮ0°　Ｅを測る。Ⅳ・Ⅵ区の境は未調査であり、検出状況から見て桁行3間と推定される。柱穴掘り方平面は径0.6ｍの不整円形、断面は深さ0.3ｍを測る逆台形状を呈する。Pit03・04・06・07・08には、断面に柱痕が認められる。

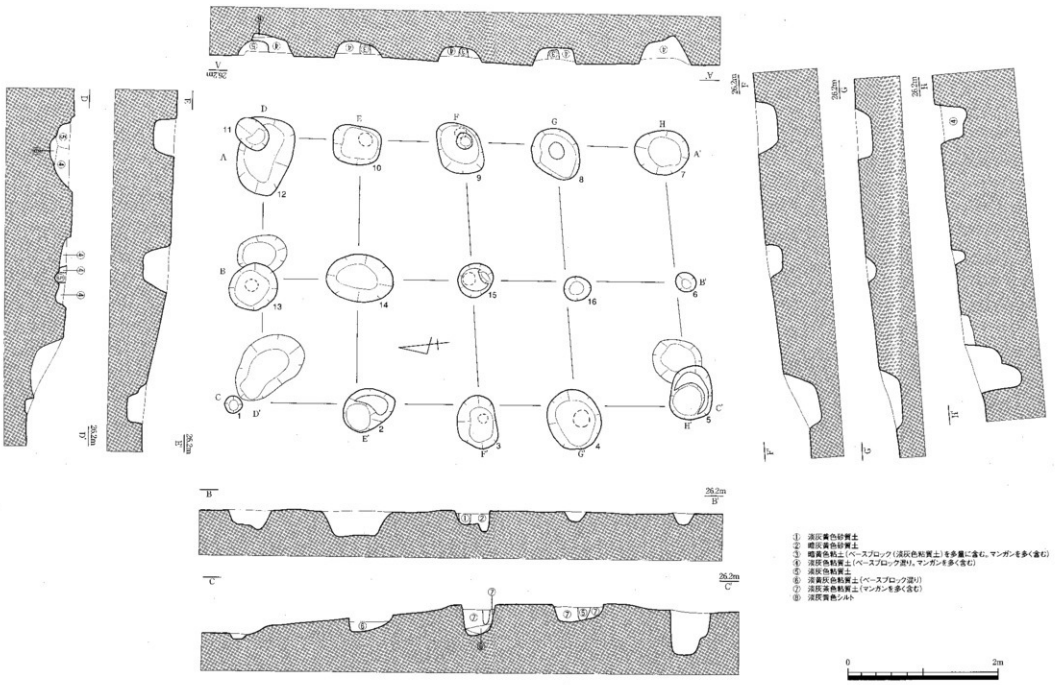
出土した遺物は須恵器杯17（SP246）のみである。SP246はPit08に切られており、厳密にはこの建物に伴う遺物とはいえないが、建て直し前の柱穴の可能性があり、近接する年代と考えて掲載した。17は底部縁辺に近い位置に高台を設け、四角く広がりが少ないため様相4、8世紀初頭に位置付けられる。

ＳＢ１２（第25図）

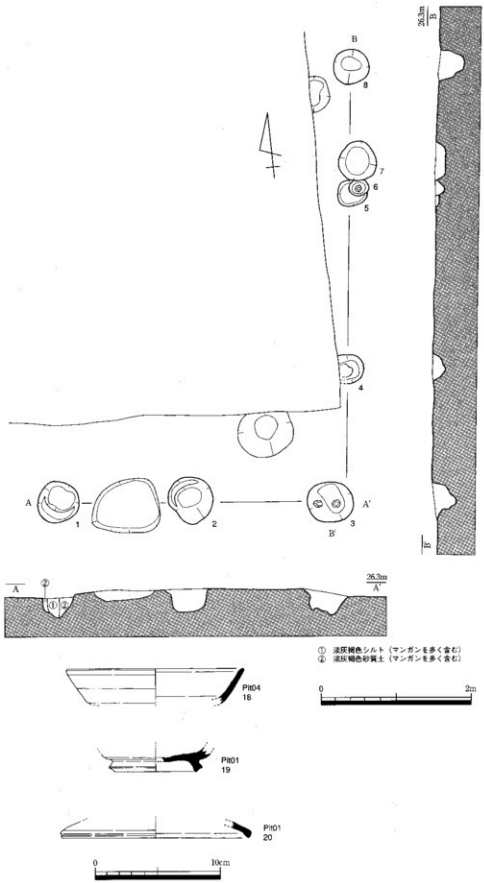
Ⅵ区東部中央でSB11・13・14と近接して検出した、南北棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間(3.5m)×桁行4間(5.3ｍ)、面積18.55㎡で主軸はＮ3°　Ｅを測る。柱穴掘り方平面は径0.2～1.0mの不整円形ないしは楕円形、断面は深さ0.2～0.6mを測る浅い不整Ｕ字状を呈する。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む灰色系の粘質土からなる。四周の主柱穴には柱痕が認められる。出土遺物は須恵器と土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。

ＳＢ１３（第26図）

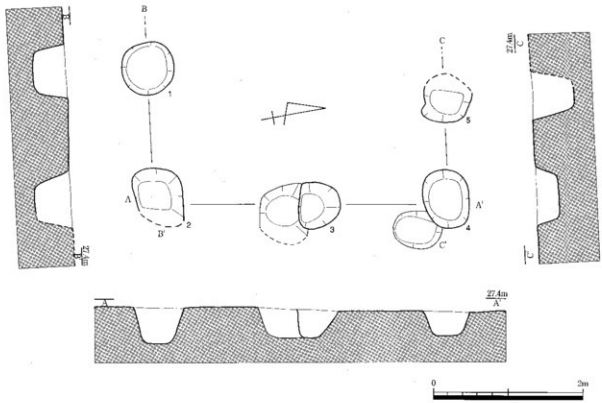
Ⅵ区東部中央でSB11･12･14と近接して検出した､南北棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(4.0m)×桁行1間以上で主軸方位はＮ0°　Ｅを測る。柱穴掘り方平面は径0.75～0.9mの不整円形、断面は深さ0.2mを測る浅い不整Ｕ字状を呈する。Pit01には柱痕が確認できる。出土遺物は須恵器と土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。



第25図　SB12平・断面図



第 27 図　SB14 平・断面図、出土遺物実測図



第28図　SB15平・断面図

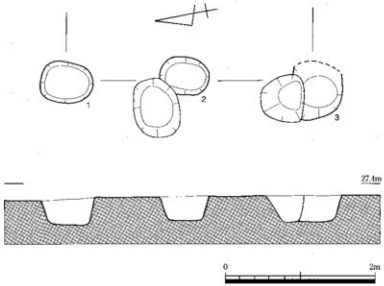
ＳＢ１４（第27図）

Ⅵ区東部中央でSB11・12・13と近接して検出した、南北棟の掘立柱建物跡である。二辺の一部のみ確認しており、総柱の可能性も否定できない。現状で、梁間２間（3.9m）×桁行３間（5.8m）、面積22.62㎡で主軸方位はＮ５°　Ｅを測る。柱穴掘り方平面は径0.6mの不整円形、断面は深さ0.3mを測る浅い不整Ｕ字状を呈する。Pit01には柱痕が確認できる。出土遺物は18の須恵器杯（Pit04）、19の須恵器杯（Pit01）、20の須恵器杯蓋（Pit01）である。18は、底部が欠失しているが高台杯と考えられ、口縁部がやや内湾気味に伸び、口縁端部内側にやや突出することから、様相３－４、７世紀第４四半期から８世紀初頭に位置付けられる。19は、小型の高台杯と考えられ、高台がやや高く、外側に広がることから様相３、７世紀第４四半期に位置付けられる。20は体部が扁平にならず、口縁端部が丸く終わることから、これも様相３、７世紀第４四半期に位置付けられよう。以上３点の資料から、７世紀第４四半期の建物と考えられる。

ＳＢ１５（第28図）

Ⅵ区南側中央でSB16と近接して検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。調査区が狭く建物の一部を検出できただけである。梁間２間（4.0ｍ）×桁行１間以上で主軸方位はN85°　Ｗを測る。柱穴掘り方平面は径0.5～0.8mの不整円形ないし不整方形、断面は深さ0.3～0.6mを測る不整Ｕ字状を呈する。埋土は淡灰褐色系の砂質土である。出土遺物は須恵器と土師器の細片だけであり、

詳細な時期については不明である。



第29図　SB16平・断面図

SB16（第29図）

Ⅵ区南側中央でSB15と近接して検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。調査区が狭く建物の一部を検出したのにとどまる。梁間2間（3.3m）×桁行1間以上で主軸方位はN75°Wを測る。柱穴掘り方平面は径0.5～0.7mの不整円形ないし不整方形、断面は深さ0.35mを測る逆台形状を呈する。出土遺物は須恵器と土師器の細片だけであり、詳細な時期については不明である。

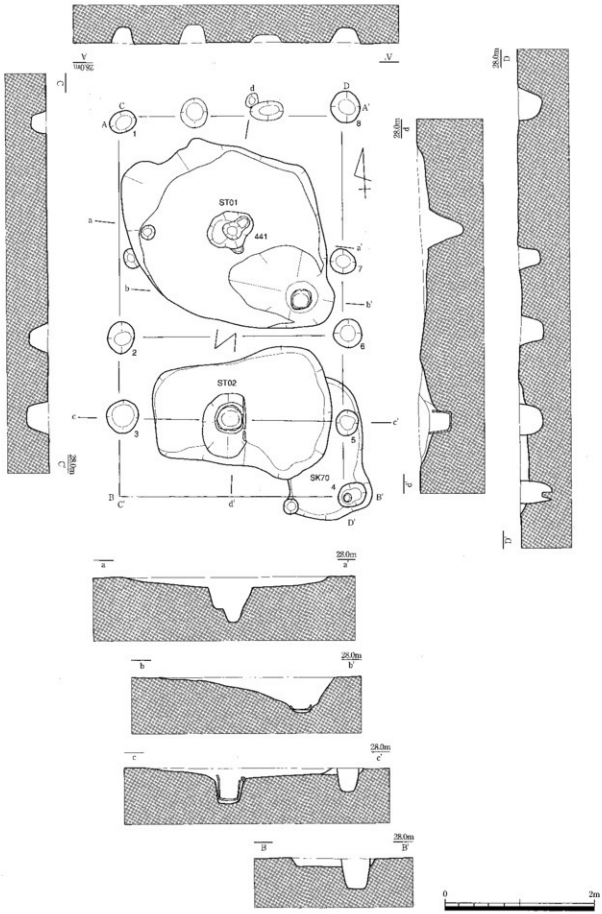
SB17（第30図）

Ⅵ区中央で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。整然とした掘立柱建物跡ではないが、現状では梁間4間（5.0m）×桁行5間（7.5m）、面積37.5㎡で主軸方位はN5°Eを測る。柱穴掘り方平面は径0.4mの不整円形、断面は深さ0.25mを測る逆台形状を呈する。出土遺物はなく、時期については不明である。

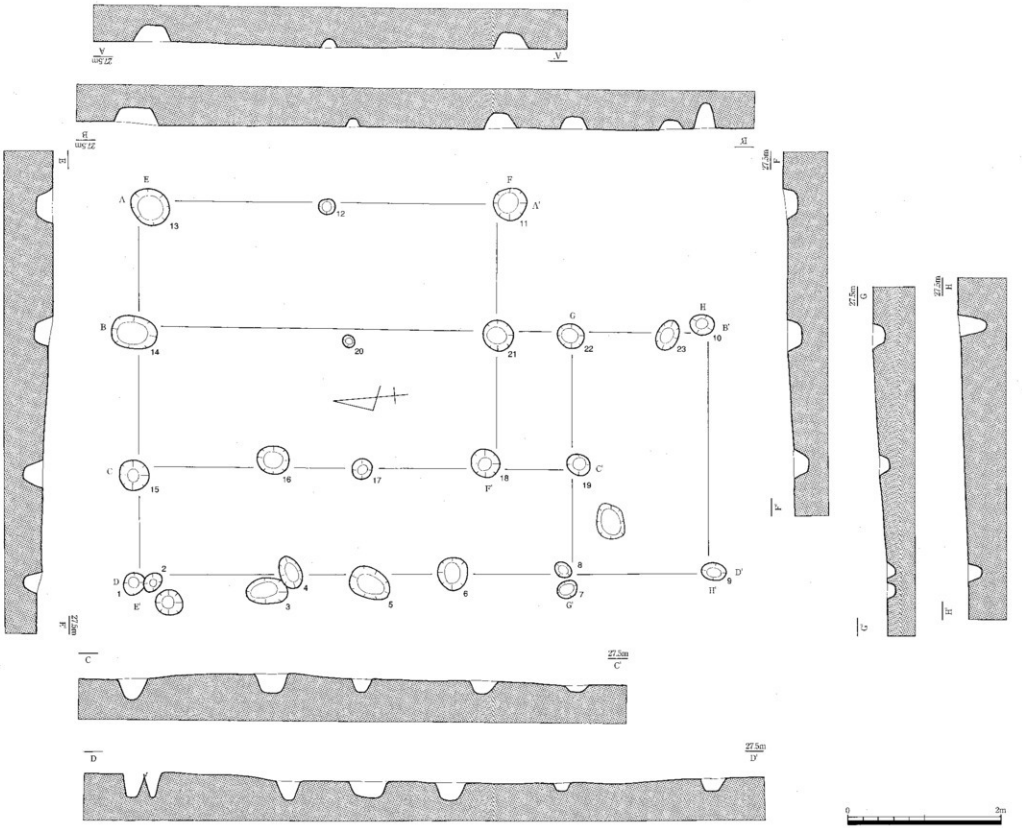
SB17は、西辺を構成するPit01～09で5間幅、北辺を構成するPit01・13～15で3間幅を測るが、南辺ではPit9・10の1間幅、東辺ではPit11～13の2間幅とPit10・21～23の2間幅の2列で構成される。以上、南北に4列の柱列、東西に4列の柱列が確認されるが、南北の柱列は北辺を除いて東西に続く柱列はない。こうした総柱とは異なる柱穴の配置は他には見られないものの、建物の間取りを表す可能性があると考えている。但し、Pit12・20のように、他に比べて著しく小さな柱穴が見られることをどう評価するかは今後の類例を待ちたい。

SB18（第31図）

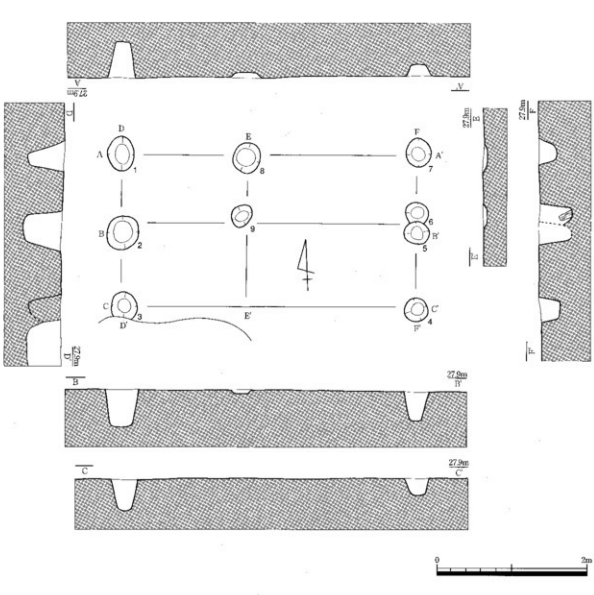
Ⅵ区東端で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。南辺の柱穴を一部欠くが、梁間3間（2.9m）×桁行4間（5.0m）、面積14.5㎡で主軸方位はN0°Eを測る。柱穴掘り方平面は径0.4mの不整円形、断面は深さ0.3mを測る逆台形状を呈する。柱穴からの出土遺物は確認できないが、後述するST01・02が梁間に合致しており、切り合い関係が見られないことからST01・02を覆う施設と考えている。ただし、南辺にはPit04のみ確認され、想定される2柱穴が認められない問題もある。この掘立柱建物跡をST01・02に伴う施設と考えた場合、年代はST01・02から出土した土師質土器深鉢84・85の年代観により18世紀後半以降に位置付けることができる。



第31図　SB18平・断面図



第30図　SB17 平・断面図

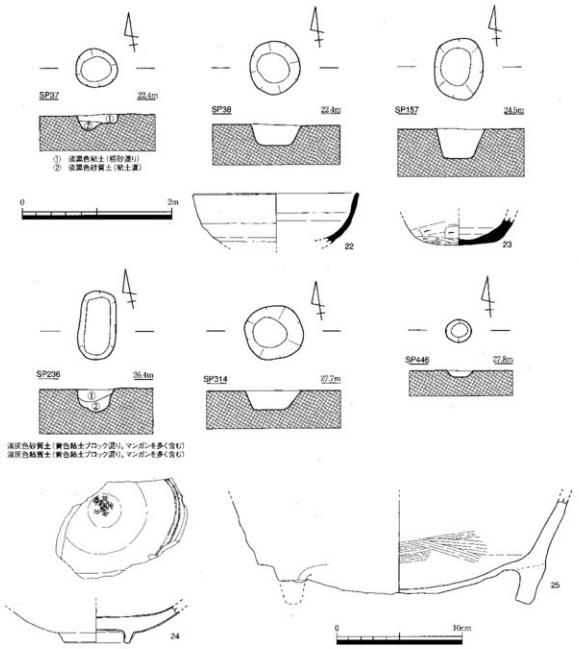


第32図　SB19平・断面図、出土遺物実測図

ＳＢ１９（第32図）

Ⅵ区東端で、SB18の南に隣接して検出した東西棟で総柱状の掘立柱建物跡である。南辺の柱穴を一部欠くが、梁間２間（2.0ｍ）×桁行２間（3.9ｍ）、面積7.8㎡で主軸方位はN2°　Eを測る。柱穴掘り方平面は径0.3ｍの不整円形、断面は深さ0.4ｍを測る逆台形状を呈する。出土遺物はPit01から出土した21のみである。

21は土師質土器焙烙（御厩系）で、粘土紐巻き上げ成形により、頸部はわずかに直立し、口縁部



第 33 図　SP 平・断面図、出土遺物実測図

が大きく開く形態となる。底部外面には入念な指押さえ、内面には板ナデ調整を認める。内耳は遺存しないが、口縁部の特徴から、おおむね18世紀末～19世紀初頭に位置付けておきたい。

2　柱穴跡（第33図）

ここでは、個々の柱穴は取り上げず、遺物が出土したもの等の主な柱穴を紹介する。

ＳＰ３７

径0.55ｍの柱穴で、埋土は2層に分かれる。

ＳＰ３８

径0.7ｍの柱穴で、断面は逆台形、須恵器高杯？22が出土している。22は、口縁部のみであるが、口縁部が一旦屈曲する部分に沈線状の段を有することから高杯と考えている。様相2、7世紀第3四半期に位置付けられる。

ＳＰ１５７

径0.65ｍの柱穴で、断面は逆台形、須恵器壺底部23が出土している。23は、底部にヘラ削りが顕著であるが、全体の形態が不明であり、詳細な時期については不明である。

ＳＰ２３６

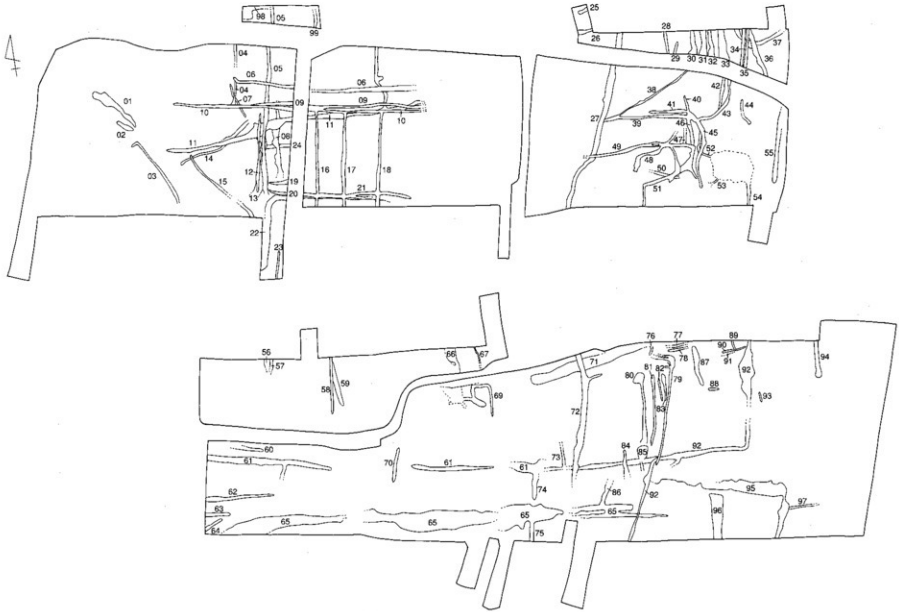
長辺0.95ｍ、短辺0.5ｍの長方形の柱穴で、断面はU字形を呈し、2層の埋土からなる。24の肥前系磁器鉢が出土している。見込みには蛇の目釉剥ぎを認め、中央にコンニャク印判による五弁花の押印を認める。18世紀後半に比定される。

ＳＰ３１４

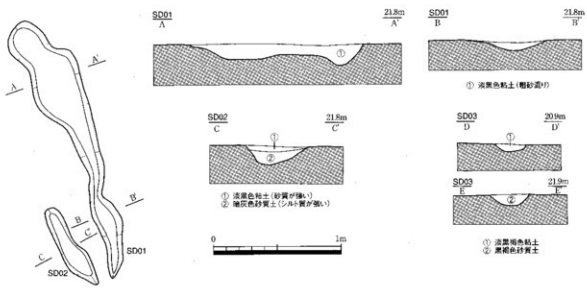
径0.8ｍの柱穴で、断面は逆台形、25の土師質土器有高台深鉢が出土している。底部は丸く突出し、その外縁に高台を三方向に貼付する。外器表面はあばた状に剥落し、調整は不明であるが、被熱痕跡は確認できない。おおむね17世紀前葉に比定される。

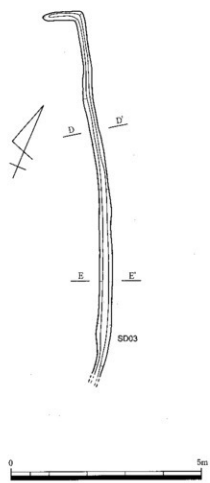
ＳＰ４４６

径0.35ｍの柱穴で、断面は浅い逆台形を呈する。



第 34 図　溝状遺構配置図





第35図　SD01～03平・断面図

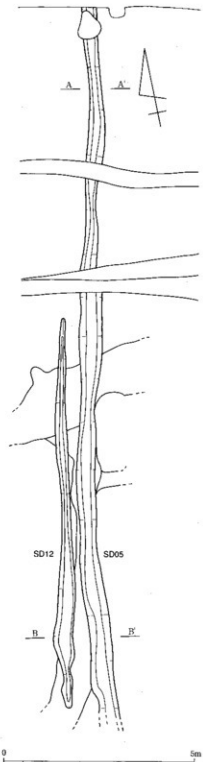
3　溝状遺構

ここでは、遺物が出土している溝状遺構（以下「溝」という。）を中心に、主な溝について記述する。検出できた溝の全体は第34図に示したとおりである。

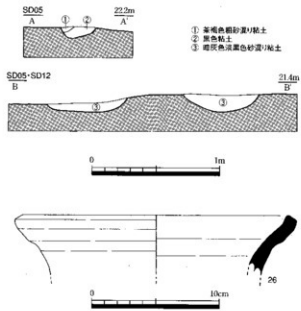
本遺跡で検出された溝群は、位置関係から見て大きく3グループに分けられる。グループ1は、Ⅰ区・Ⅱ区にまたがる部分で検出されている。グループ2は、Ⅲ区・Ⅴ区で検出されている。グループ3は、Ⅳ区・Ⅵ区での検出である。

SD01～03（第35図）

3条ともⅠ区中央部を北西から南東に伸びる。SD01と02は形状が不定形で近接することから、元は同一の溝の底部分と考えられる。埋土は前者が1層、後者が2層で、自然埋没と考えられる。SD03は、北端で直角に屈曲するが、あまり伸びずに終わる。南端は自然消滅している。断面は浅いU字状で埋土は1層である。出土遺物がないため時期については不明である。



第36図　SD05・12平・断面図、出土遺物実測図

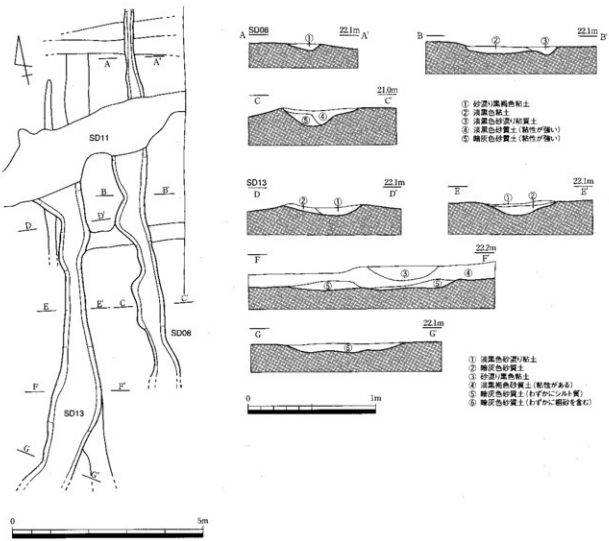


ＳＤ０５・１２（第36図）

Ｉ区の東端を２条並行して南北に伸びている。SD05は、北端で浅いＵ字状の断面を持ち、南側では幅広の浅い皿状の断面に変わる。北端ではかろうじて埋土が２層に分けられ、堆積状況から自然埋没と考えられる。SD12は北端・南端とも自然消滅し、断面は浅い皿状を呈する。

溝の先後関係から、SD06・09・10に先行し、SD11・13・24に後出する。

26は、SD12から出土した須恵器甕口縁部片である。口縁部は、やや内湾気味に外上方に伸び、口縁端部はやや摘み上げて終わる。口縁部のみの出土であり、ここでは７世紀後半に位置付けておく。



第37図　SD08・13平・断面図

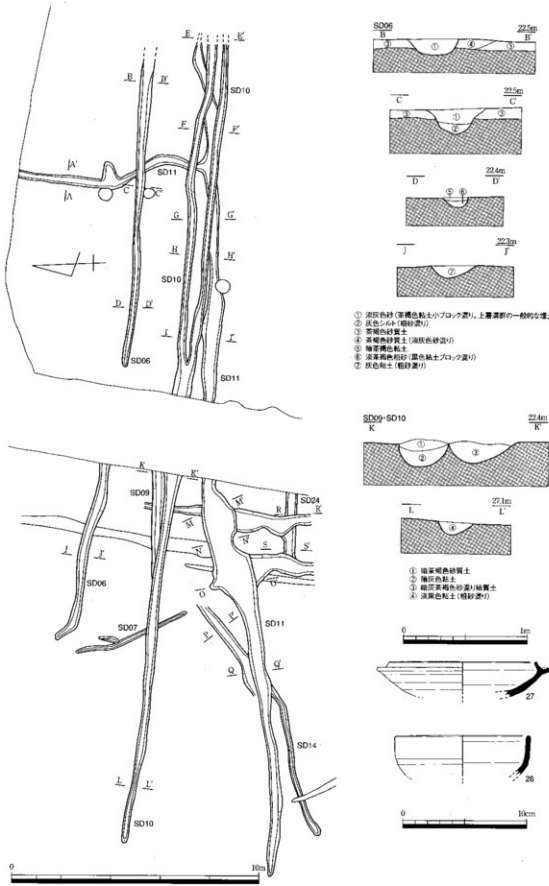
SD08・13（第37図）

SD05・12と重複する形で検出した不定形な溝である。SD08は北端・南端が自然消滅し、埋土は南端側で2層確認できるものの、多くは1層である。SD13は、先のSD05・12とほぼ重なっており、南端部分がやや西にカーブを描いている。埋土は中央部で2層確認されたが、北側・南側では1層である。この2条の溝は、部分的に並行関係にあることから、同時期に機能していた可能性が高い。

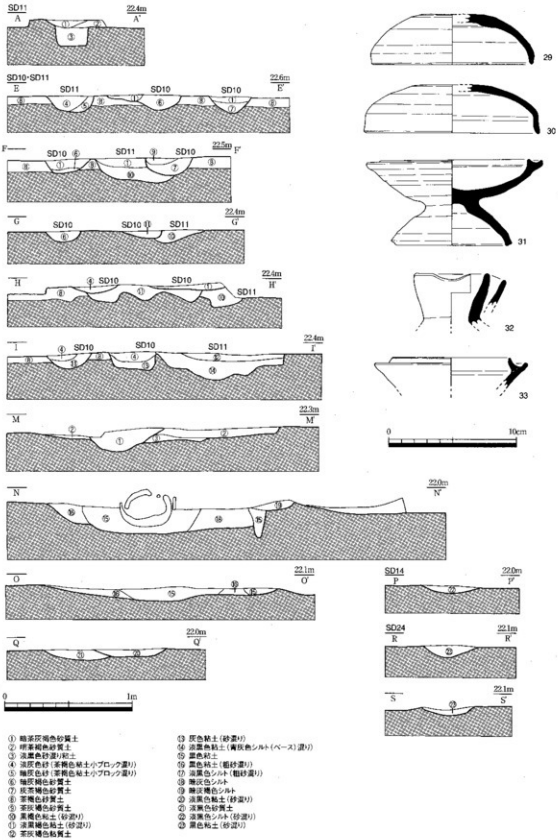
溝の先後関係から、SD11に先行し、SD24に後出する。出土遺物がないため時期については不明である。

SD06・07・09・10・11・14・24（第38～43図）

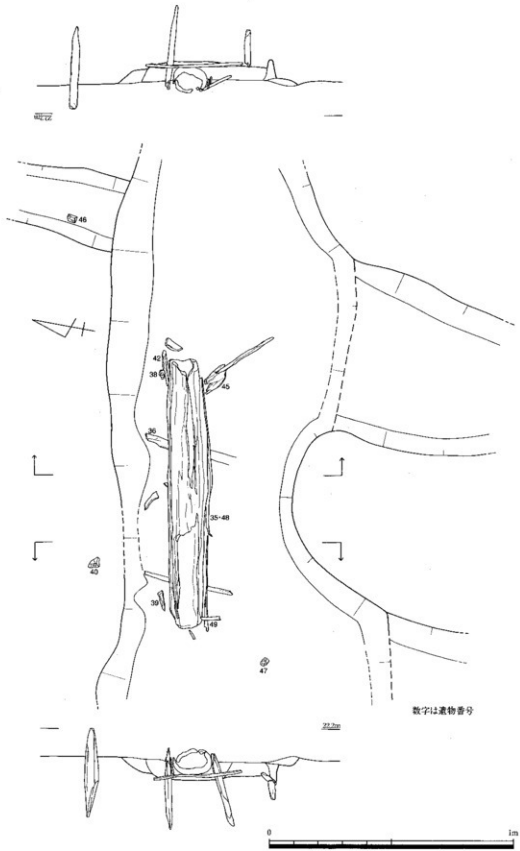
SD06は、調査区を東西に伸び、東端で北に直角に屈曲する。西端は、やや北に屈曲する形で終わる。SD04・05・11を切っており、これらの遺構より後出する。埋土は東側で1層、西側で2層確認され、自然埋没と考えられる。出土遺物がなく、時期については不明である。



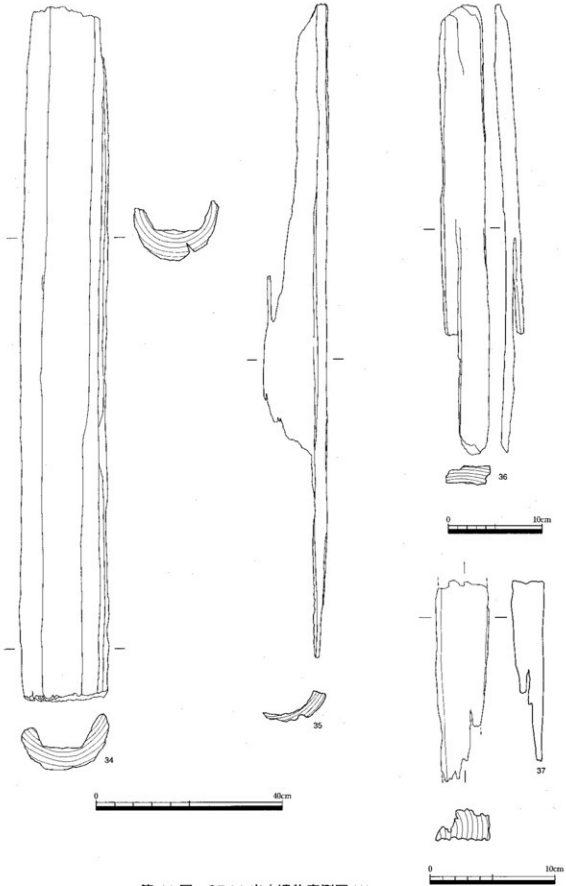
第 38 図　SD06・07・09・10・11・14・24 平面図、
SD06・09・10 断面図、
SD09・10 出土遺物実測図



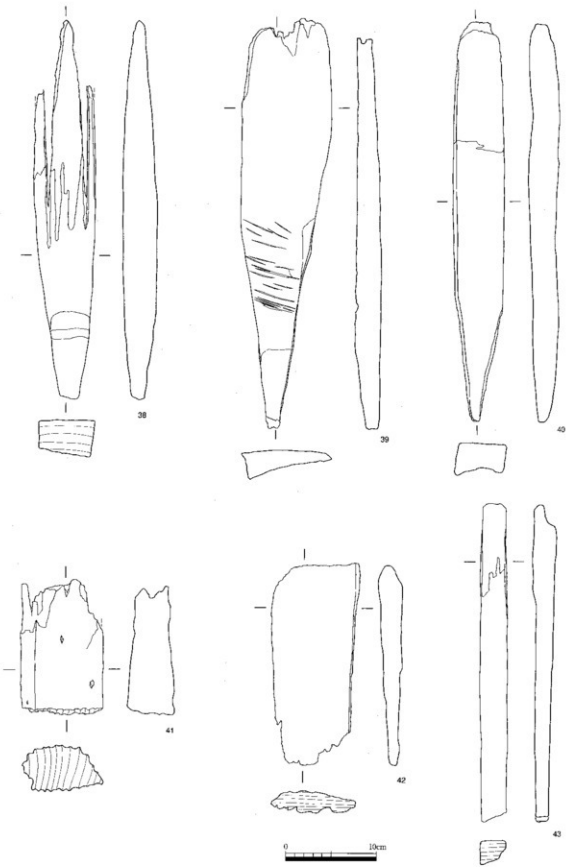
第 39 図　SD10・11・14・24 断面図、出土遺物実測図



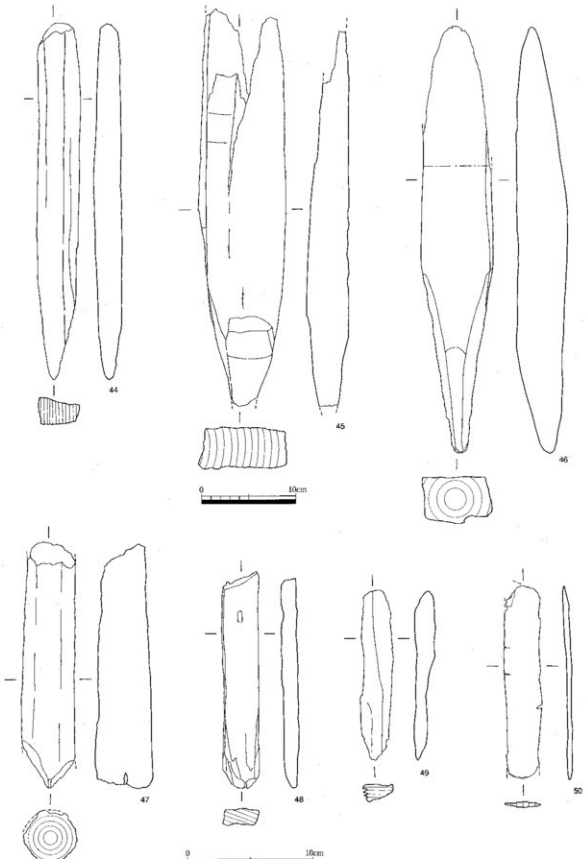
第 40 図　SD11 木樋出土状態図



第 41 図　SD11 出土遺物実測図 (1)



第 42 図　SD11 出土遺物実測図 (2)



第 43 図　SD11 出土遺物実測図 (3)

SD07は、北西から南東方向に伸びる短い溝で、方向的にはSD01～03に並行して伸びる。切り合い関係からSD04・10に後出する。出土遺物がなく、時期については不明である。

SD09・10は、調査区を東西に伸びる溝で、SD06と並行している。SD09をSD10が切っており、SD10が後出する。SD09・10とも埋土はおおよそ2層からなり、自然埋没と考えられる。SD05・07・08・11に後出する。SD10は、後述するSD06・07・08等と同一時期と考えられ、様相4と考えられる。出土遺物は、27の須恵器杯身と28の須恵器杯の2点があり、SD10が先述したように様相4とした場合、これらの須恵器はSD09に伴う可能性が高い。27は6世紀代から継続する器形であるが、口縁端部の伸びが小さく、この器種の最終段階に近い器形と考えられ、様相2、7世紀第3四半期に位置付けられる。28は、口縁部が直立する杯で、口縁端部は丸く終わる。これも様相2と考えられる。このことから、SD09の埋没年代は7世紀第3四半期に位置付けられる。

SD11は、検出長35.0m、幅0.5～1.3m、深さ0.2m、主軸方位はN83.5°Wを測る溝で、Ⅰ区では南西方向から北東方向に伸び、Ⅱ区で東西に方向を変更したのち、途中で北側にも分岐する。断面は浅いU字状ないし皿状を呈し、埋土は黒色系の粘土からなる。なお、Ⅰ区東端付近で溝中より小規模な木樋（第40図）を検出している。

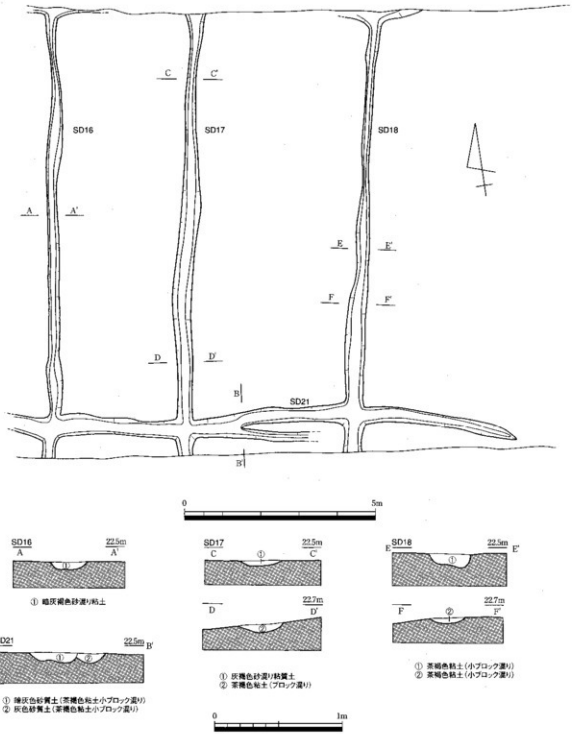
木樋は、木を縦に二分割して刳り貫いた合口型を呈する。検出長は、長さ1.5m、幅0.2mを測る。三辺に杭を打ち、木樋との間に小さな板を挟んで木樋を固定している。木樋底部には高さ調整のためか、長さ0.5m程度の小さな板を、木樋に直交する形で東西二箇所に設置している。この木樋は、概報段階では周囲の溝群に流れを振り分ける機能を持つものと考えた。切りあい関係から同時併存が想定できるのはSD13のみであり、振り分け機能を前提とすればこの溝との関係が想定できる。

ただし、第39図に示した土層断面からは、SD11が完全に埋没したのち、一部を掘り直して木樋を設置した状況も見られ、流れの振り分け以外の用途も想定する必要があるが、現状のデータでは性格を特定することは困難である。

この木樋及びこれに関連する資料として29～33（第39図）の須恵器や34～50（第41～43図）の木製品が出土している。

29は須恵器杯蓋で、天井部から丸く口縁端部に至ることから様相1、7世紀第2四半期に比定される。30も須恵器杯蓋で、口縁端部がやや立ち上がった後屈曲して天井部に至ることから、29よりも古い様相と見ることができ、飛鳥Ⅰ、7世紀第1四半期を考えている。31は有蓋高杯で、杯部は受部の立ち上がりが低く、口縁端部とさほど差がない状態であることから、このタイプの最終段階と考えられ、様相1に比定される。32は平瓶の口縁部であるが、体部が欠失していることから年代を特定できない。口縁部の形態から7世紀代に位置付けておく。33は須恵器杯身で、体部が小型化している点、受け部が短く内傾する点などを考慮して飛鳥Ⅰに位置付けておく。

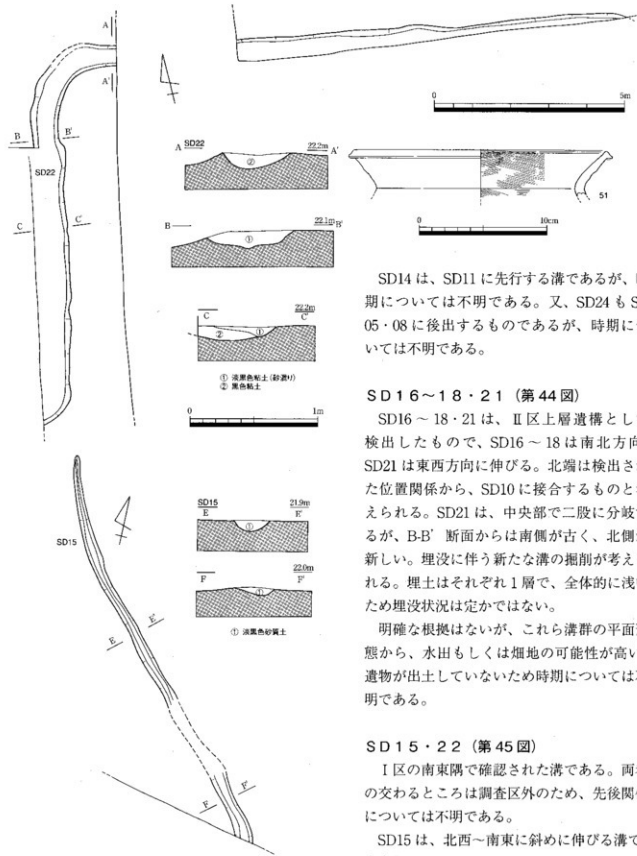
次に木製品であるが、34は木樋の身部分である。内刳りは断面逆台形状に加工されている。材質はコウヤマキである。35･36は蓋部分の破片で、形状からすれば、身のような加工はしておらず、単純な内刳りである。材質はヒノキであり、身部分と材質が異なる。37はどの部位か不明であるが、木樋に関連する杭の一部と考えられる。材質はモミ属である。38～40・44～46は板材を用いた杭である。それぞれ形状に差はあるが、先端を両側面から斜めにカットしている。上端は切りそろえていないが、ほぼ同じ長さである。材質は38・39・45がヒノキ、40・44・46がコウヤマキである。41・42は板材片であるが、元の形状は不明である。材質はそれぞれモミ属・ヒノキである。43は棒状の角材で、上端に一部加工痕が見られる。用途は不明である。材質はヒノキである。47



第 44 図　SD16～18・21 平・断面図

も杭であるが、角材ではなく丸太杭で二方向からカットしている。材質はコナラ属クヌギ節である。48･49 は板材片で用途は不明である。材質はそれぞれヒノキ・コウヤマキである。50 は薄い板材で、明確な切り込み等は観察できないが、斎串と考えられる。材質は針葉樹である。

時期は出土須恵器から見て様相 1、7 世紀第 2 四半期の可能性が高い。



第 45 図　SD15・22 平・断面図、SD22 出土遺物実測図

SD14 は、SD11 に先行する溝であるが、時期については不明である。又、SD24 も SD 05・08 に後出するものであるが、時期については不明である。

SD16～18・21（第 44 図）

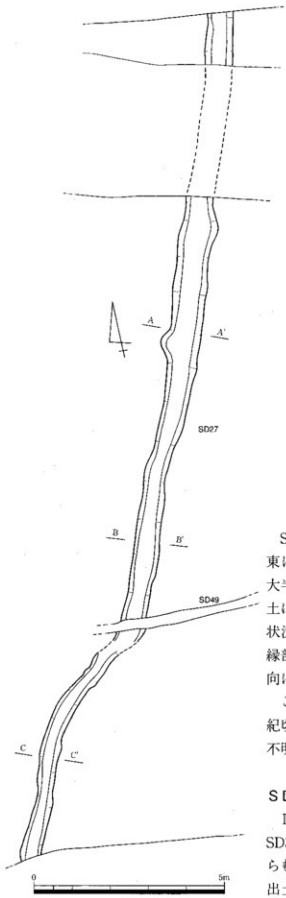
SD16 ～ 18・21 は、Ⅱ区上層遺構として検出したもので、SD16 ～ 18 は南北方向、SD21 は東西方向に伸びる。北端は検出された位置関係から、SD10 に接合するものと考えられる。SD21 は、中央部で二股に分岐するが、B-B' 断面からは南側が古く、北側が新しい。埋没に伴う新たな溝の掘削が考えられる。埋土はそれぞれ 1 層で、全体的に浅いため埋没状況は定かではない。

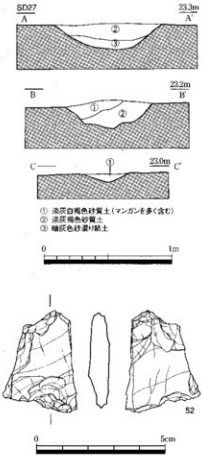
明確な根拠はないが、これら溝群の平面形態から、水出もしくは畑地の可能性が高い。遺物が出土していないため時期については不明である。

SD15・22（第 45 図）

Ⅰ区の南東隅で確認された溝である。両者の交わるところは調査区外のため、先後関係については不明である。

SD15 は、北西～南東に斜めに伸びる溝で、方向的には SD01 ～ 03、07 などに共通する。埋土は 1 層で、出土遺物はない。





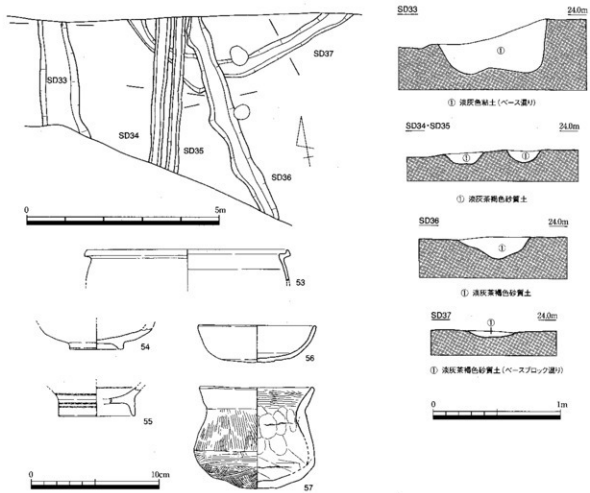
第46図　SD27平・断面図、出土遺物実測図

SD22は、調査区を南北に伸びる溝で、北端で90°東に屈曲する。東西部分はSD21の南側を伸びるが、大半が調査区外になり明確な判断はできていない。埋土は1層が多いが、C-C'断面では2層確認でき、堆積状況からは自然埋没と考えられる。51は土師器甕口縁部片である。口縁は「く」の字に伸び、端部が外方向に拡張され、内面にハケ調整を施している。

この溝の時期は、51の資料を前提に考えれば3世紀頃と想定されるが、この溝の年代を表すかどうかは不明である。

ＳＤ２７（第46図）

Ⅲ・Ⅴ区にまたがり南北方向で検出された溝である。SD39に後出し、SD49に先行する。南側でやや西に膨らむ。埋土は2層からなり、自然埋没と考えられる。出土遺物は52のみで、楔形石器である。一側面は単



第 47 図　SD33 ～ 37 平・断面図、SD33・36 出土遺物実測図

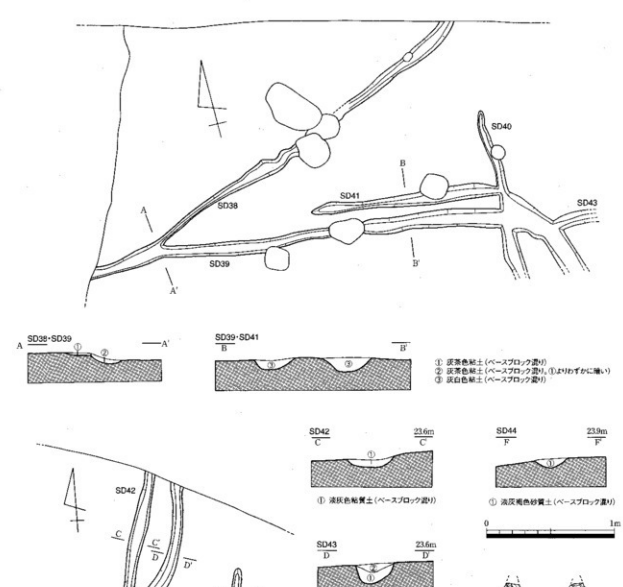
純に剥離されており、上下に調整痕が明瞭に残る。弥生時代に位置付けられる。ただし、溝の年代をこの時代に考えるには他の溝との関係から躊躇する。

ＳＤ３３～３７（第 47 図）

Ⅲ区東側で検出した溝群である。SD33 は、ほぼ南北に伸びる溝で、逆台形の断面形態を持ち、他の溝に比べて深い。埋土は 1 層で、深さから考えれば人為的に埋められた可能性もある。埋土中から 53 ～ 55 が出土している。

53 は施釉陶器行平鍋である（産地不明）。口縁部は受け口状を呈する。19 世紀第２四半期以降の所産と考えられる。54 は瀬戸・美濃系陶器腰錆碗である。畳付を除く外面には鉄釉、内面には灰釉を認める。口縁部が遺存しないため、正確な年代は明らかではないが、おおむね 18 世紀後半に比定される。55 は肥前系磁器広東碗である。高台側面及び見込み周縁には圏線を認める。1780 ～ 1820 年代ヵ。

SD34・35 は、ほぼ同規模で並行している。断面は浅い U 字形を呈し、埋土は 1 層からなる。上面の削平を考慮すれば、1 条の溝になる可能性が高い。時期は、遺物が出土していないため不明である。



第 48 図　SD38 ～ 44 平・断面図、SD43 出土遺物実測図

SD36 は、南北に伸びる溝で、SD34・35 に先行し、SD37 に後出する。形状はやや不定形で、断面は緩やかな V 字形を呈する。埋土は 1 層で、56・57 が出土している。

56 は土師器の鉢で、やや平底を残すものの丸底に近い。57 は土師器の小型丸底壺で、体部下半に最大径部を持ち、短く外反する口縁部を有する。体部外面、口縁部内面をハケ調整している。体部内面下半は板ナデの痕跡が見られる。底部はやや平底を残している。時期は 51 同様 3 世紀代と

考えられる。

SD37はSD34～36に先行する溝で、隅丸方形の角部分を想定させる平面形態を有する。大半が調査区外に伸びるため、全体の形状や性格は不明である。断面は浅い皿状を呈し、埋土は1層である。また、出土遺物がないことから時期については不明である。

以上、SD33は18世紀末～19世紀代の所産となる陶磁器を認め、その最終埋没年代は53の行平鍋の存在により、19世紀第2四半期以降となり、周辺遺構の状況を考慮すると、おおむね19世紀と考えられる。また、SD36は弥生時代末～古墳時代初期頃の所産と考えられる。

ＳＤ３８～４４（第48図）

Ⅴ区中央部で検出された錯綜した溝群の一部を構成する。SD38・39は、西側が南北に伸びるSD27と交差し、SD27より西側に伸びないため、この溝から分岐したものと考えられる。A－A′断面からは、SD38の埋没後にSD39の埋土が見られるため、当初はSD38の溝が機能し、埋没後SD39が設けられたと考えられる。SD38は、Ⅴ区北壁に入ったのちⅢ区側で検出されたSD28～32のいずれかにつながるものと考えられるが、特定できていない。SD39は東に伸びたのち、南北に伸びるSD40・46に合流する。SD40・46は、平面形態上は同一の溝と考えられ、北側のSD40から西に伸びるSD41が見られる。SD41はSD39と並行して伸びている。

SD42はこの一群の東にあり、南北に伸びている。南を弧状に伸びるSD43に切られており北側はⅤ区北壁に入り、平面的にはⅢ区ではSD33と合流すると考えられるが、埋土の違いやSD33の年代観とは合わないと考えている。

SD43は、南端でSD45につながり、円弧を描いて北に伸びる。SD42同様北壁に入る。この溝の埋土からは58の石鏃が出土しているが、他に弥生土器など認められないため、混入と判断している。このため、時期については不明である。SD44はⅤ区東端で逆J字状の形態を持って検出された。埋土は1層で時期については不明である。

ＳＤ４５・４８～５１（第49図）

SD45は、SD39・41の延長上にあり、南に屈曲して蛇行しながら伸び、南端は自然に消滅する。

SD46は、SD45に切られ、隅丸方形の角部分のように屈曲し、SD52とつながり、SX05に連続する。

SD47は、SD49に切られる短い溝で、南北方向に伸びる。

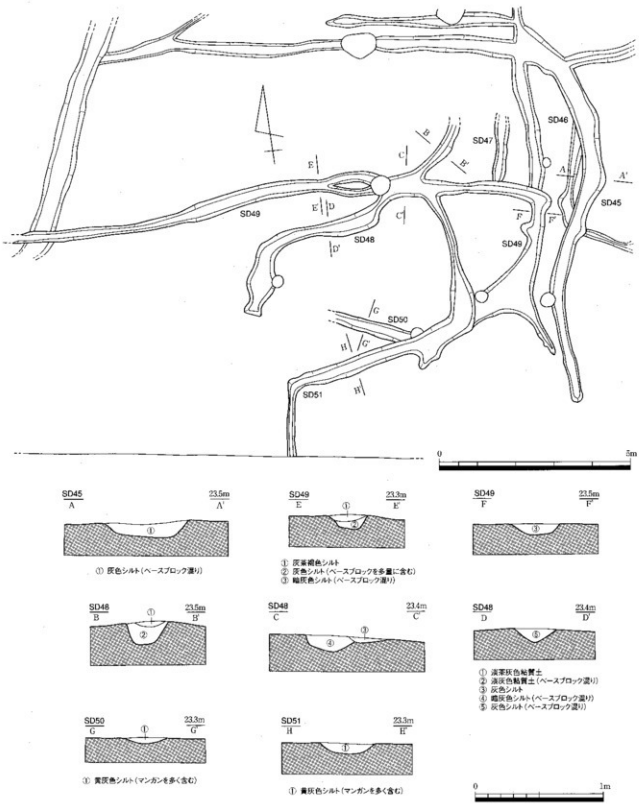
SD48は、東西に伸びるSD49にクロスする形で北東から南西に伸びる溝である。

SD49は、東西に伸び、東端で大きく南に屈曲し、SD51にあたって消滅する。SD51の西側にSD50が見られ、これに続く可能性もある。

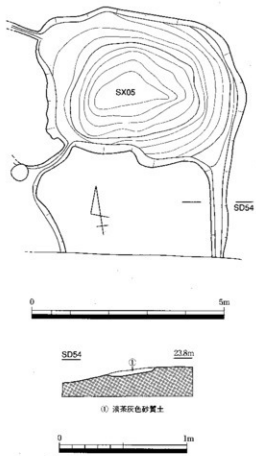
SD50はSD51に先行し、西端は自然消滅する。

SD51はSD49とSD48の合流点の少し東側から南に分岐する溝で、一旦西に屈曲し、その後南に屈曲して調査区外に伸びる。

埋土はすべて1～2層で、浅い断面を有する。出土遺物はなく、時期については不明である。



第 49 図　SD45・48 ～ 51 平・断面図



第 50 図　SD54 平・断面図

ＳＤ５４（第 50 図）

SD54 は、出水施設と考えられる SX05 から南に伸びる溝で、断面が逆皿状を呈し、埋土は 1 層からなる。遺物は出土していないが、SX05 と同時期に機能していたと考えられる。

ＳＤ５８・５９・６１・７４（第 51・52 図）

SD58・59 は、Ⅳ区中央で検出され、北側は調査区外、南側は自然消滅している。SD58 が先行し、SD59 が後出する。断面は SD58 が逆台形で埋土は 1 層、SD59 は浅い皿状を呈し、埋土は 1 層からなる。遺物は出土しておらず、時期については不明である。

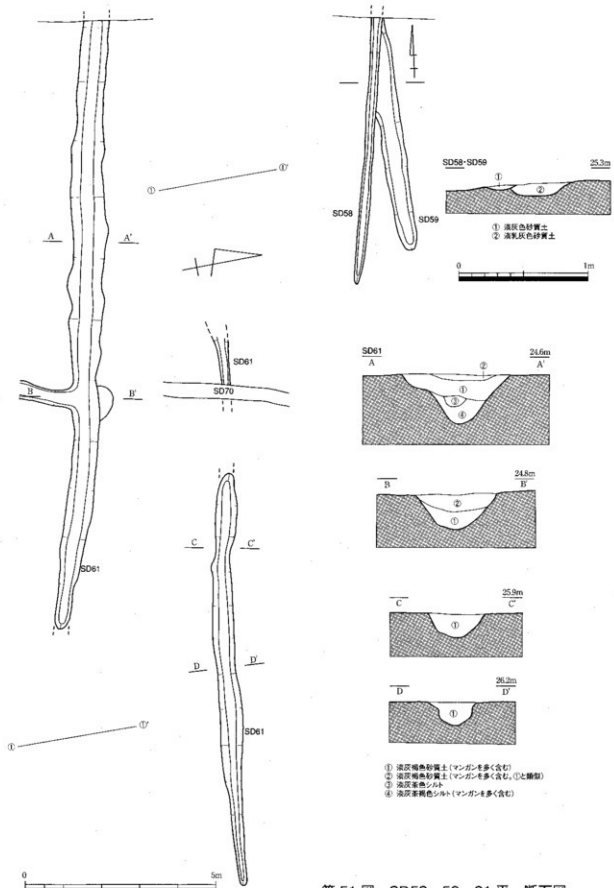
SD61 は、Ⅵ区の西端から中央部東側まで東西に伸びる溝で、SD92 に突き当たって終わる。断続的に後世の削平を受けて消滅しているが、Ⅵ区のほぼ中央部で南に SD74 が分岐する。この溝に先行するのは SD73 のみで、SD70・72・84・85 に後出する。溝は西側が低くなっており、その分残りがよく、断面 A-A′では 4 層の埋土が確認されている。埋没は自然埋没と考えられ、部分的な埋没の後に再び流路としての機能を持っていたと考えられる。第 52 図に示した溝東側では埋土が 1 層になる。SD61 からは 59、SD74 からは 60 の資料が出土している。

59 は陶胎染付碗である。外面には簡略化した草花文を認める。胎土、釉薬及び絵薬の特徴から、香川県東部富田吉金窯産の可能性が高く、18 世紀末～ 19 世紀前半に比定される。60 は中国産白磁碗である。横田・森田分類白磁碗Ⅴ類に該当する (横田・森田 1978)。

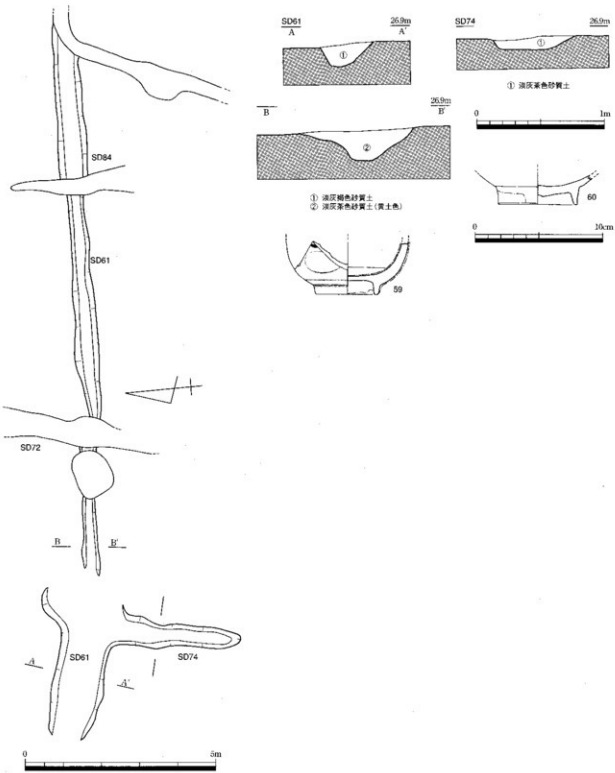
以上、出土遺物の年代観に従う限り、SD61 は 19 世紀代、SD74 は 12 ～ 13 世紀代に比定されるが、両者は重複関係ではなく、同一溝と考えられるため、廃絶年代は 19 世紀前半頃としておく。

ＳＤ６２～６４（第 53 図）

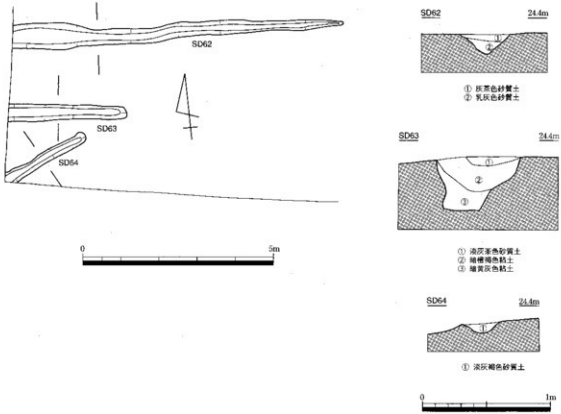
Ⅵ区南西隅で検出された溝で、SD62・63 はほぼ並行して東西に伸び、SD64 は北東から南西方向に伸びる。SD64 は後述する SD65 に並行して伸びているとも考えられる。断面は、SD62 がＶ字形を呈し、2 層の埋土からなる。SD63 は 3 層の埋土からなるが、断面形態は不定形である。SD64 は浅い皿状の断面で、埋土は 1 層である。3 条の溝とも東端は自然消滅している。また、西端は西壁に入ってＶ区儡で確認されていないことから、Ⅲ・Ⅴ区とⅣ・Ⅵ区の境で未調査区を南北に伸びる溝の存在を想定させるものである。遺物は出土しておらず、時期については不明である。



第 51 図　SD58・59・61 平・断面図



第 52 図　SD61・74 平・断面図、出土遺物実測図

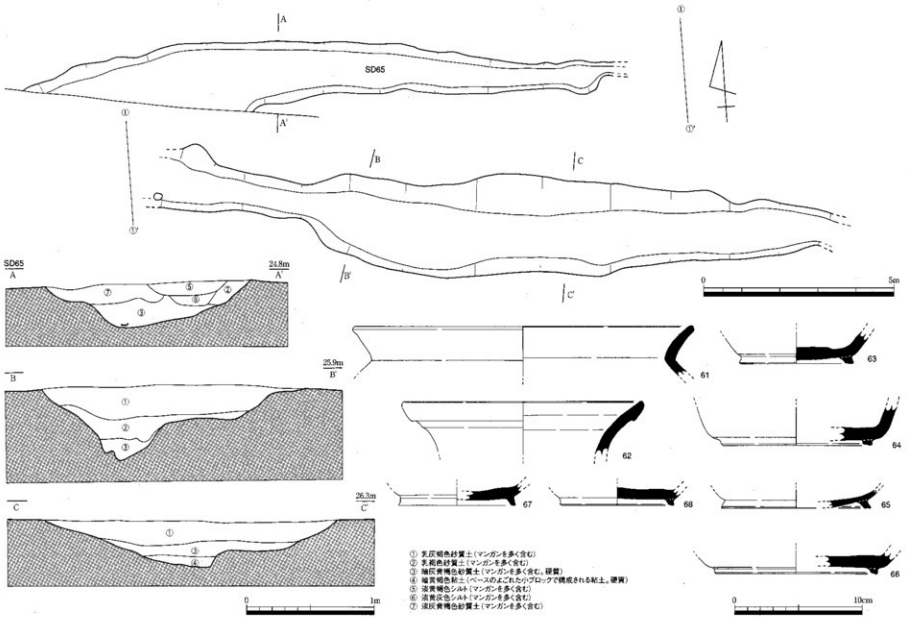


第53図　SD62～64平・断面図

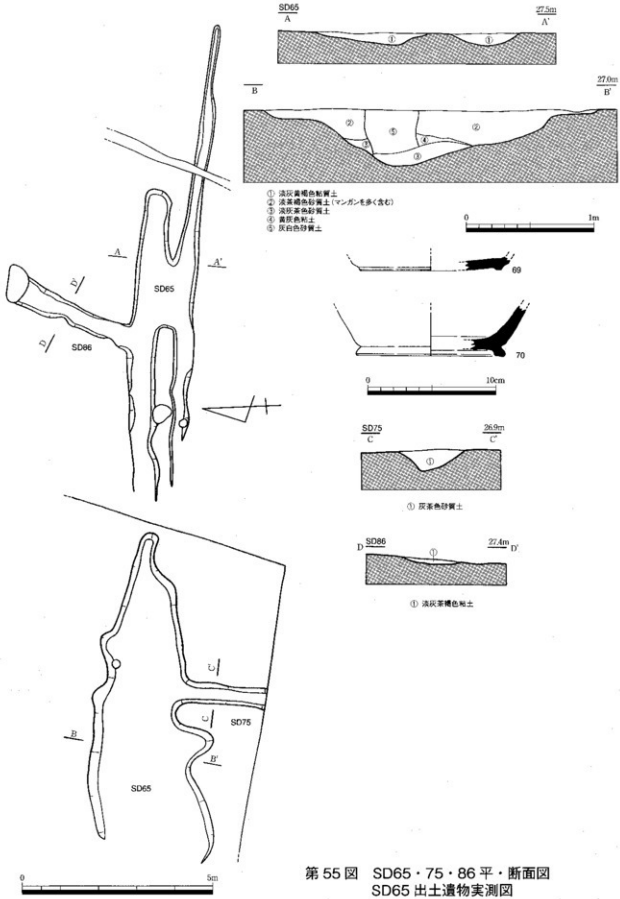
SD65・75・86（第54・55図）

Ⅵ区の西端から中央部東側まで東西方向に伸びる溝である。かなり削平を受けており残りが悪い。主軸方位はN 83.5° W、検出長55.0 m、幅1.0～4.2 m、深さ0.1～1.2 mを測る。断面は浅いV字状を呈し、埋土は1～5層からなる。西端は南側調査区外から湾曲して伸びており、第54図右側平面図でも図示しているように、溝の底部にわずかな凹みが連続して見られることから、道としての機能を持った施設と考えることもできる。ただし、断面B-B'やC-C'を見てもわかるように、底面が平坦ではないことからこの可能性は低く、わずかな凹みをどう解釈するかは今後の課題である。SD75・86はSD65から派生した溝で、いずれも断面は浅く、埋土は1層からなる。SD75は南に分岐しており、調査区外に伸びるため全体形状は不明である。SD86は北側に分岐し自然消滅する。SD65の出土遺物は61～70の須恵器や少量の土師器細片である。

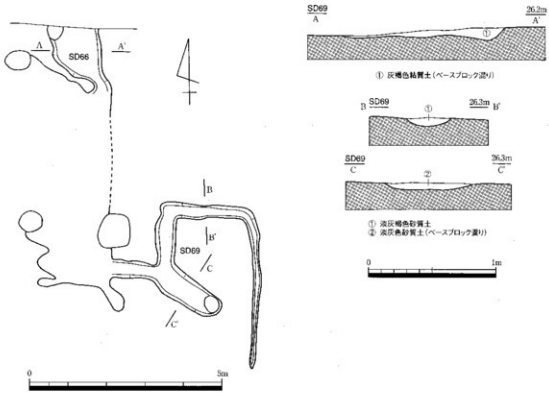
61は、須恵器甕の口縁部で、「く」の字に外反する短い口縁部を持つ。62も須恵器甕の口縁部で、やや長く「く」の字に外反して端部外面は肥厚する。7世紀代と考えられる。63は須恵器長頸瓶の底部で、底部端に高台が付く。高台は低くやや外傾する。様相3、7世紀第4四半期に比定される。64は壺底部で、底部端よりやや内側に高台が付く。高台は低く垂直に下りる。63同様、様相3に比定される。65～69は須恵器杯底部である。65はやや丸みを持った底部に外傾する高台が付く。底部底は、高台とほぼ同一の高さになる。様相3と考えられる。66は底部端からやや内側に短く垂直に下がる高台を持ち、様相4、8世紀初頭に下る可能性がある。67は底部端にやや細めで外傾



第 54 図　SD65 平・断面図、出土遺物実測図



第 55 図　SD65・75・86 平・断面図
SD65 出土遺物実測図



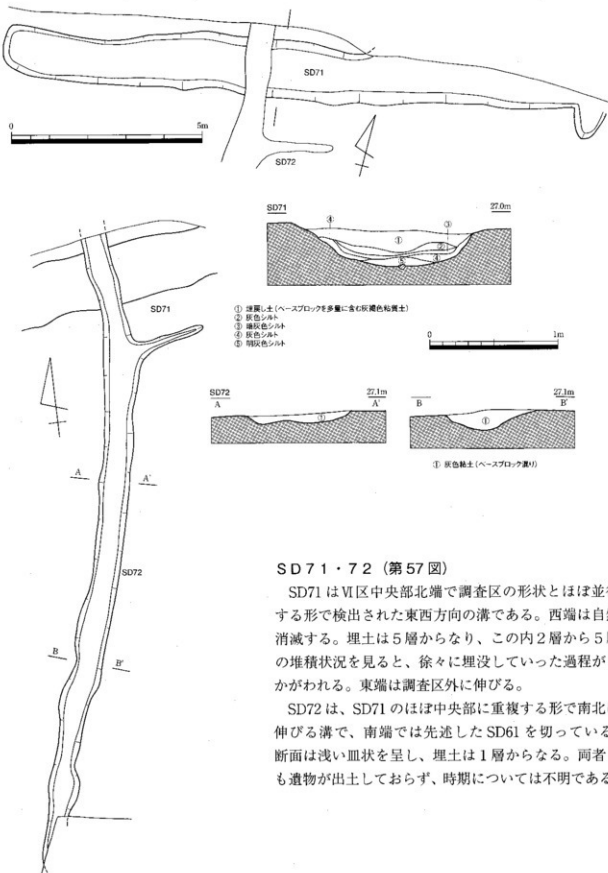
第 56 図　SD66・69 平・断面図

する高台を持ち、様相 3 と考えられる。68 は底部端に短く垂直に下がる高台を持ち、平城Ⅱ、8 世紀前半頃に比定される。69 は、形骸化した高台を持ち、8 世紀代のいずれかに比定される資料である。70 は壺の底部で、底部端に外傾する高台を持つ。7 世紀後半～ 8 世紀代に比定される。

以上の資料から、SD65 は 7 世紀後半から 8 世紀前半にかけて埋没したと考えられる。

ＳＤ６６・６９（第 56 図）

SD66 はⅣ区、SD69 はⅥ区で検出した。SD66 は調査区北側から南側に伸びる不定形な溝で、西側は不明確で自然消滅している。この西側の膨らみは断面 A-A' の状況から見て地山の窪みと考えられる。SD69 は、SD66 から続く「７」字形の溝で断面は浅い皿状を呈し、埋土は 1 層からなる。両者とも遺物が出土しておらず、時期については不明である。

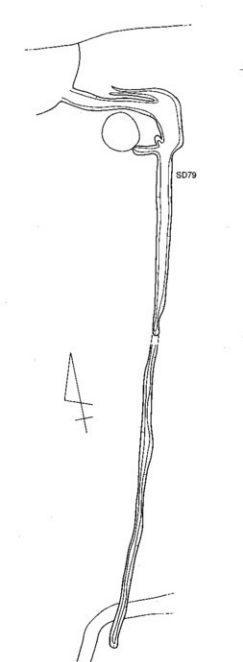


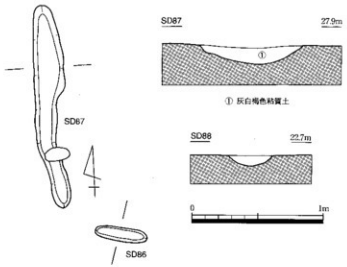
SD71・72（第57図）

SD71はⅥ区中央部北端で調査区の形状とほぼ並行する形で検出された東西方向の溝である。西端は自然消滅する。埋土は5層からなり、この内2層から5層の堆積状況を見ると、徐々に埋没していった過程がうかがわれる。東端は調査区外に伸びる。

SD72は、SD71のほぼ中央部に重複する形で南北に伸びる溝で、南端では先述したSD61を切っている。断面は浅い皿状を呈し、埋土は1層からなる。両者とも遺物が出土しておらず、時期については不明である。

第57図　SD71・72平・断面図





第 58 図　SD79・87・88 平面図、SD87・88 断面図、SD79 出土遺物実測図

SD79・87・88（第 58 図）

SD79 は、Ⅵ区中央東よりで調査区のほぼ北端から中央部まで伸びる南北方向の溝である。北壁から伸びる SD76 から一旦東に短く伸び、直角に屈曲して南に伸びたのち自然消滅する。南端では SD92 を切っている。断面は浅い皿状を呈し、埋土は 1 層からなる。埋土中から 71・72 が出土している。

71 は焼締陶器ミニチュア甕である。口径 4.4cm、器高 3.7cm を測り、径 3.6cm の蓋を伴う。蓋にはボタン状の突起を有する。備前系ヵ。72 は須恵器杯の底部で、底部端にやや外傾する高台を持ち、様相 3、7 世紀第 4 四半期に比定される。

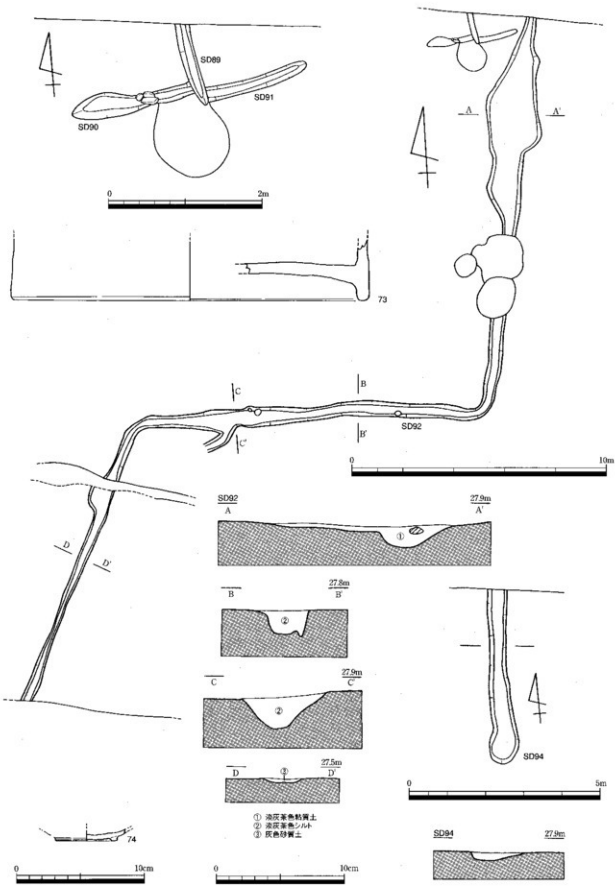
以上、出土遺物の年代観から SD79 は明治期以降の所産である可能性が高いと考える。

SD87・88 は、SD79 の東側で確認した溝で、上面を削平された後の深い溝底のみが残存したものと考えられる。いずれも浅い皿状の断面を呈し、埋土は 1 層からなる。

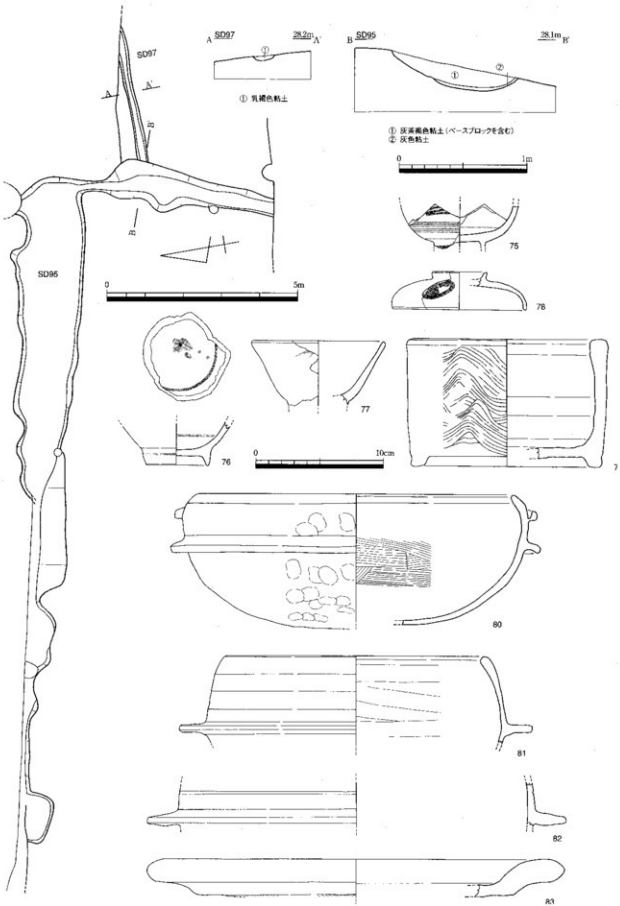
SD89～91（第 59 図）

SD89 ～ 91 は、Ⅵ区北東部で検出された溝群で、いずれも断片的で、一端は自然消滅している。SD89 は南北方向の、90・91 は東西方向の溝である。切り合いからは、SD90・91 が SD89 に先行する。

73 は SD90 から出土した瓦質鉢である。筒状の体部下位に底部を貼付した形態を呈する。底部内面



第 59 図　SD89 ～ SD92・94 平面図、
SD92・94 断面図、SD90・92 出土遺物実測図



第 60 図　SD95・97 平・断面図、出土遺物実測図

は板ナデ調整、外面にはナデ調整を認める。19世紀代の所産ヵ。

ＳＤ９２（第59図）

SD92は、Ⅵ区東部で検出された鍵型の溝で、北端部分がやや西に膨らんでいる。南端では浅くなるが、おおむね逆台形状の断面を有し、埋土は1層からなる。SD61・65に後出し、SD79・95に先行する。74は瓦器椀である。断面四角形の矮小化した高台を認める。和泉型瓦器椀と考えられ、おおむね13世紀前葉に比定される。

ＳＤ９４（第59図）

Ⅵ区東部で南北方向に伸びる溝である。南端は自然消滅し、断面は浅い皿状、埋土は1層からなる。出土遺物はなく、時期については不明である。

ＳＤ９５・９７（第60図）

SD95・97は、Ⅵ区東南部で検出した溝で、SD95は東西方向に伸びた後直角に屈曲して南の調査区外に伸びる。西側は徐々にあいまいな状態になり自然消滅する。断面は浅い皿状を呈し、埋土は2層からなる。溝底に薄く1層が堆積した後埋められた可能性がある。埋土中から75～83が出土している。

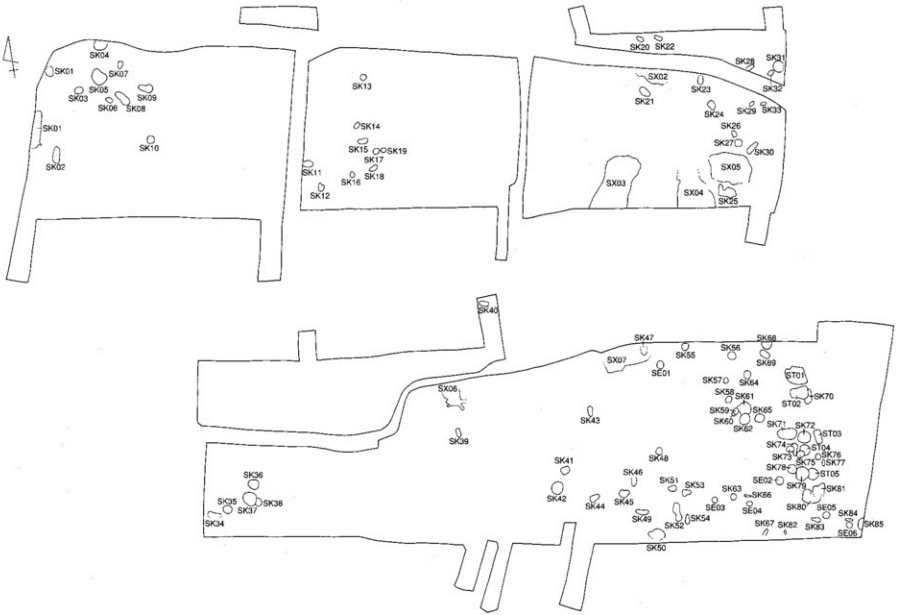
75・78は肥前系磁器である。75は端反碗である。外面腰部に多重圏線を認める。1820～1860年代。78は蓋である。外面には扇を銀杏状に配置した宝文を描く。逆八の字形に開くつまみ形態から、擂脚碗の蓋である可能性が高く、18世紀後半～19世紀初頭に比定される。76・77は瀬戸・美濃系陶器広東碗である。黄白色の粗い素地が選択され、いわゆる「太白手」と呼ばれるものである。前者の見込みにはコンニャク印判による五弁花、後者の外面には簡略化した草花文を認める。18世紀末～19世紀前葉の所産となるが、ガラス焼継の痕跡を認め、19世紀以降の使用年代が想定できる。79は瓦質鉢である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部を小さく内側に肥厚させる。脚を有するが、三脚か四脚かは判断できない。外面には丁寧なミガキ調整により波状文ないし青波文を表現する。18世紀後半～19世紀前半の所産ヵ。80～82は瓦質羽釜である。80は扁平な形態を呈し、口縁部はにぶく内湾する。口縁部外面には横方向に延びる外耳を認め、縦方向の穿孔を認めるが、穿孔は貫通しない。18世紀後半。81・82の口縁部は長く延び、後者には凹線を認める。型成形による製作工程が想定でき、幕末～明治時代の所産となる。83は土師質土器火消壺蓋である。落とし蓋となるが、把手は遺存しない。胎土中には多量の雲母粒を含有する特徴的な胎土である。

以上、SD95出土遺物の年代観は19世紀代となり、最も新しく位置付けられる型成形の瓦質羽釜の存在から(81・82)、その最終埋没は幕末ないし明治時代となる。

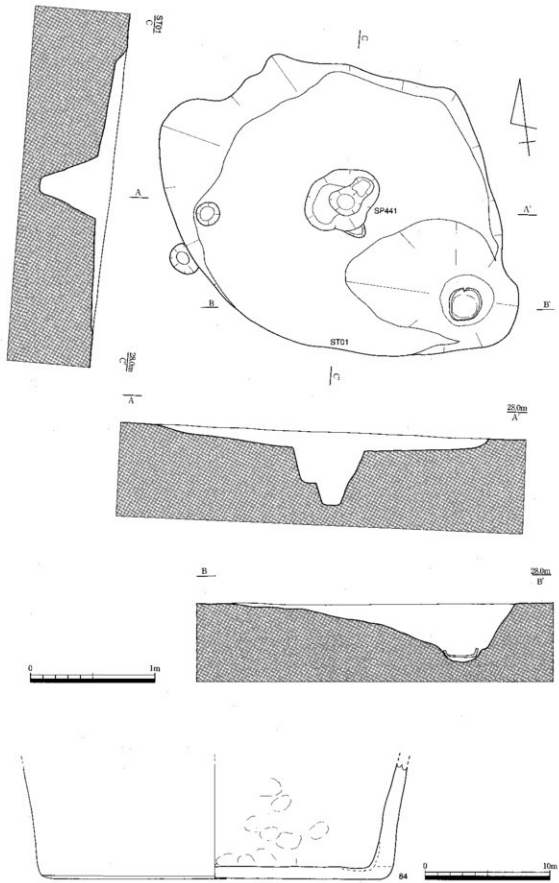
SD97はSD95に切られていることからこれに先行し、短く伸びた後自然消滅する。断面は浅い皿状を呈し、埋土は1層からなる。

4　墓

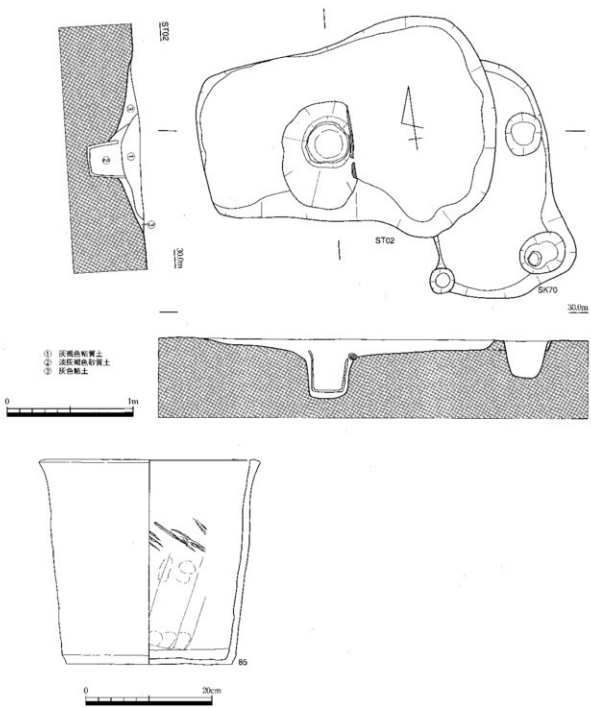
墓は、第61図（以下、土坑・井戸・不明遺構の全体配置についても同図による。）に示したように、Ⅵ区東辺部で集中して検出された。形状や内容はそれぞれ異なるが、本調査区の最高所に位置



第 61 図　墓・土坑・井戸・不明遺構配置図



第 62 図　ST01 平・断面図、出土遺物実測図

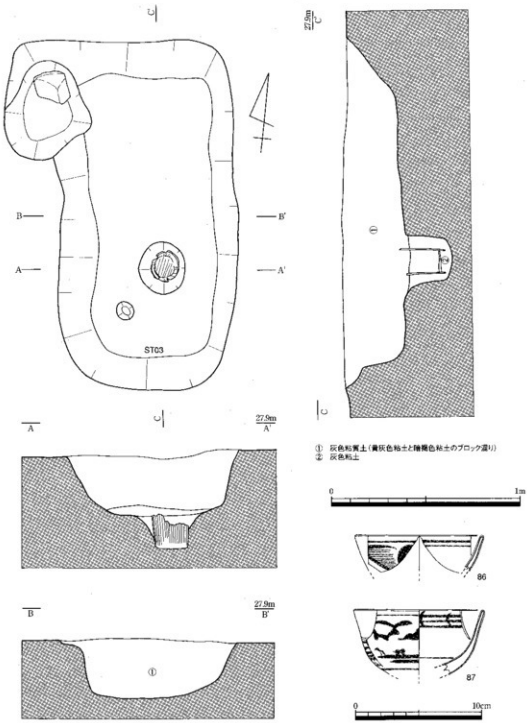


第 63 図　ST02 平・断面図、出土遺物実測図

し、眺望・環境など墓地として適地と考えられる。

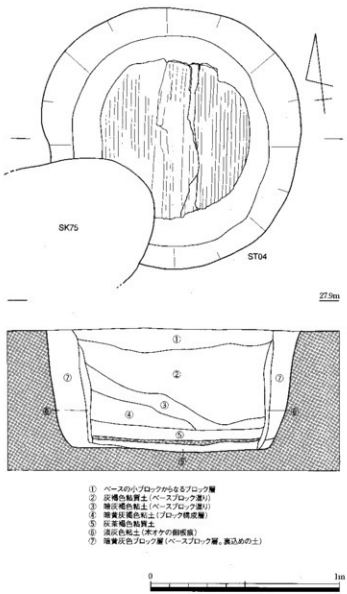
ＳＴ０１（第 62 図）

ST01 は、やや不整形な楕円形を呈し、中央部に二段掘りの Pit、南東隅に 84 の土師質土器深鉢を埋納した土坑が掘り込まれている。中央 Pit は、この施設に伴うものかどうか不明な点もあるが、伴うものと考えた場合には、上部に覆いやなど何らかの施設を想定することが可能である。しかし、



第64図　ST03平・断面図、出土遺物実測図

先に記載したSB18の柱穴との関連は不明である。また、主体部と考えられる土師質土器深鉢埋納土坑を、この土坑の縁辺部に穿っていることも、この中央Pitがこの墓に伴うものとの想定を強化するものである。この場合、中心Pitの周辺に将来的に複数の埋納を予定していた可能性もある。



第65図　ST04 平・断面図

断面は浅い皿状を呈し、中央 Pit は最深部から逆台形状に穿っている。現状では二段掘りが行われているが、柱の抜き取り跡の可能性もある。土師質土器深鉢埋納土坑は、土坑底から緩やかに底面に到達するなど、後の掘り込みとは考えられない。

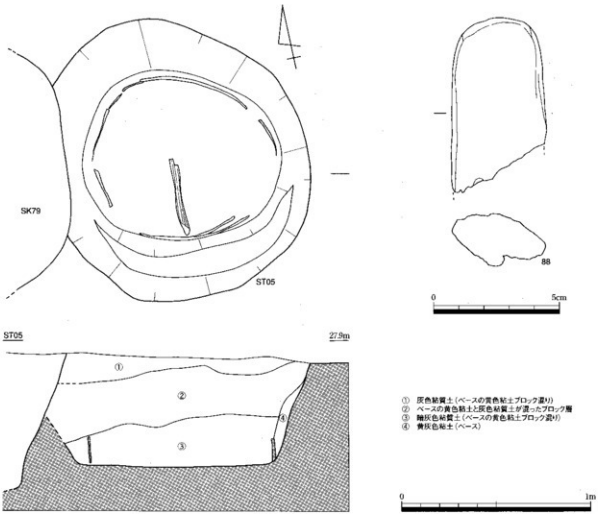
84 は土師質土器深鉢である。後述する 85 と同一器種となり、胎土中には多量の雲母粒と角閃石を認める。所属時期には問題を残すが、18 世紀後半以降に比定される。SB18・19、ST02 との関連から、18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産と考えたい。

ＳＴ０２（第 63 図）

ST01 に隣接して検出した墓である。墓坑平面は長楕円形状を呈し、底部には小さな凹を掘り込んだ後土師質土器深鉢（骨壺）を据えている。ST02 は、SK70 に後出するが、SK70 からは遺物が出土していない。断面形は浅い皿状を呈する。長径 2.4 m、短径 1.4 m、深さ 0.2 m、埋土は灰色系の粘土である。骨壺は口径 34 ㎝を測る土師質土器の円筒形の深鉢で、内部からは淡灰色の灰が検出された。なお、性格は不明であるが、壺の縁に小さな棒状の木製品が置かれていた。85 として図化した土師質土器深鉢は平底から直線的に外傾し、端部を三角形に肥厚させる。底部外縁には面取りを施し、底部外面には同心円状の板ナデ調整を認める。胎土中には多量の雲母粒と一定量の角閃石を含有し、御既周辺で製作された可能性が高い。その年代的位置付けは困難であるが、18 世紀後半以降の所産と考えておきたい。ST02 の掘り方形状に合致する SB18 は出土遺物が稀薄であり、その正確な所属時期は不明であるが、直交する主軸方位をとる SB19 の出土遺物を援用すると、18 世紀末～ 19 世紀初頭の年代を付与することができる。

ＳＴ０３（第 64 図）

ST03 は南北に細長い隅丸方形を呈し、中央やや南側に木桶（骨壺？）を設置している。墓壙は、短断面・長断面とも逆台形状を呈し、埋土は 1 層からなる。埋土中から 86・87 が出土した。86・

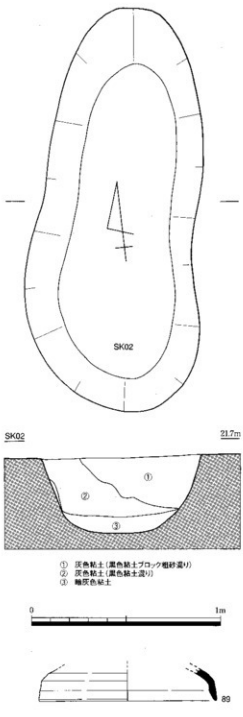


第66図　ST05平・断面図、出土遺物実測図

87は肥前系磁器端反碗である。後者の外面には山水文を認め、内面縁文様として、86は二重圏線、87は三重圏線にアクセントを加える。出土遺物の製作年代は1820～60年代となり、ST03の所属時期もおおむねその時期に合致する。

ＳＴ０４（第65図）

ST04は、ST01～03に見られる長方形の墓壙ではなく、主体である木桶を設置する円形の墓壙である。墓壙の形態は、木桶よりも一回り大きく掘り下げ、木桶を設置した後、墓壙との間を土で充填している。底板のみ検出されているが、断面に側板の形状をとどめていた。木桶内の土は自然流入と考えられる。出土遺物が確認できず、その年代的位置付けは困難である。しかし、その検出位置や掘り方形状に沿って桶を配置する構造の土坑が県内で散見できる。高松市松並町に所在する松並・中所遺跡では、桶は遺存しないが、掘り方形状に沿って円周上に巡る細い溝を検出した土坑があり（Ⅱ区B SK02）、桶を埋置した墓である可能性が想定される（松本2000）。出土遺物の年代観は18世紀前半となる。ST04とは構造が酷似しており、ST04もおおむね18世紀代の所産である蓋然性を想定することができる。



第67図　ST02平・断面図、出土遺物実測図

ＳＴ０５（第66図）

ST05は、ST04と構造が酷似しており、同様の円形墓壙を持つ。但し、底板は確認できず、断面にも側板の痕跡を留めるにすぎず、当初から底板がなかった可能性が高い。埋土は不自然な堆積で、後出するSK79が掘削された段階で一時に流入したと考えられる。埋土中から88が出土している。88は、盾製石斧片と考えられるが、先端部などを欠失しており詳細は不明である。遺構の性質上、混入と考えられる。遺構の所属時期は、ST04との構造上の類似性を考慮すると、18世紀代の所産と理解することができる。

５　土　坑

土坑は、調査区全体で85を数えるが、その多くは出土遺物を伴わず、時期については不明である。ここでは、遺物が出土した土坑を中心に報告する。

ＳＫ０２（第67図）

Ⅰ区西端で検出した長楕円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は3層からなる。埋土からは土層3の堆積段階では自然埋没、その後埋土2・3で一時に埋められたと考えられる。これは、埋土の流入が西側（低地側）からとなっており、自然埋没と逆方向であることからである。埋土中から89が出土した。89は須恵器杯蓋で、端部から直線的に上に伸び、丸く屈曲して天井部に至る。口縁端部は細く終わる。飛鳥Ⅰ、7世紀第1四半期頃に比定される。

ＳＫ０５（第68図）

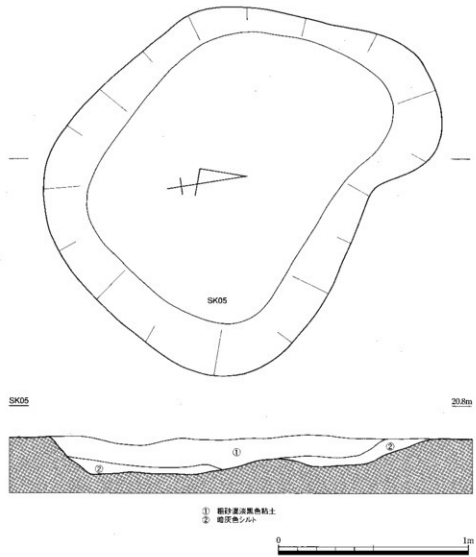
隅丸方形を呈し、断面は逆台形、埋土は2層からなる浅い土坑である。埋土の状態から自然埋没が想定される。

ＳＫ０８（第69図）

長楕円形の土坑で、断面は逆台形、出土遺物はない。

ＳＫ０９（第69図）

SK08同様、長楕円形（瓢箪型に近い）を呈し、埋



第68図　SK05平・断面図

土は2層からなる。北側が深くなる三角形の断面を持ち、自然埋没を思わせる。

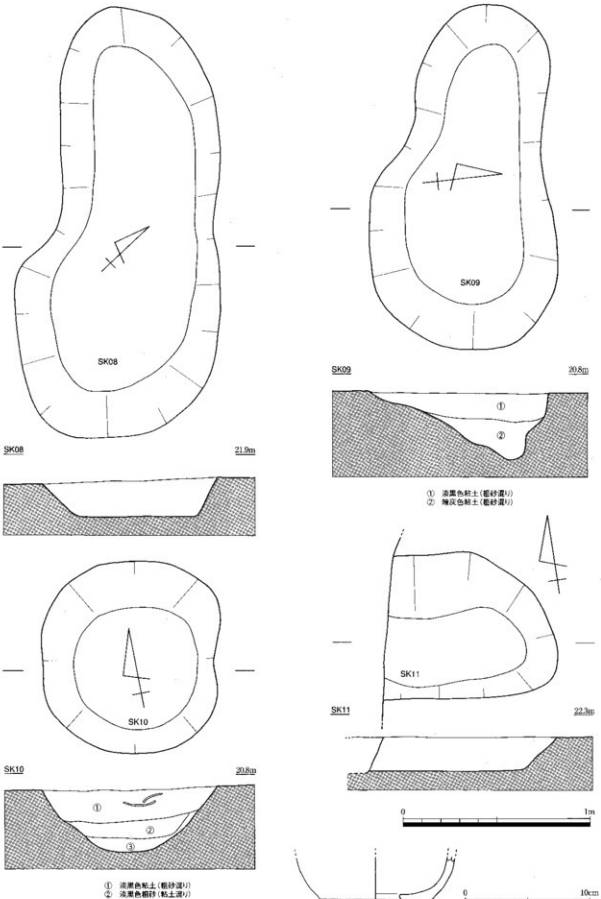
ＳＫ１０（第69図）

円形の土坑で、断面は上部が広がるＵ字形を呈し、埋土は3層からなる。土器片が出土しているが、小片のため時期については不明である。

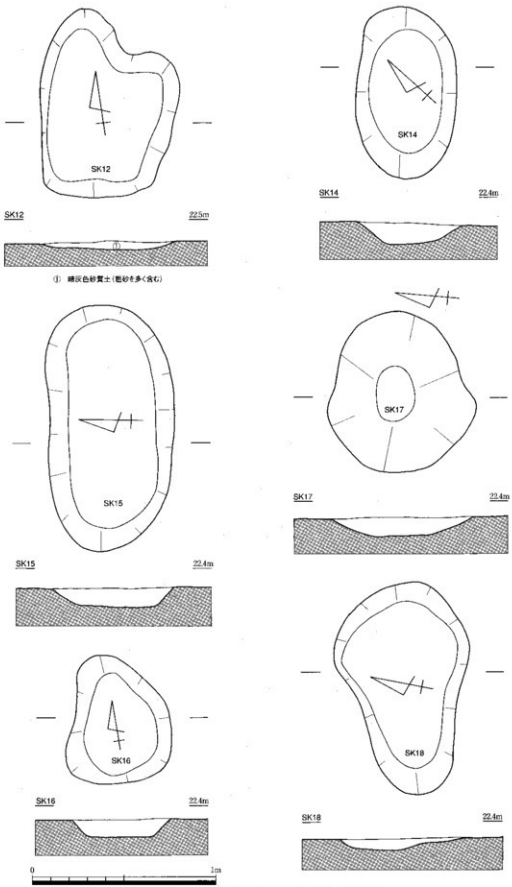
ＳＫ１１（第69図）

西側が調査区外に伸びるため、全体は不明であるが、東西方向の長楕円形と考えられる。断面は逆台形を呈する。埋土中から90が出土している。

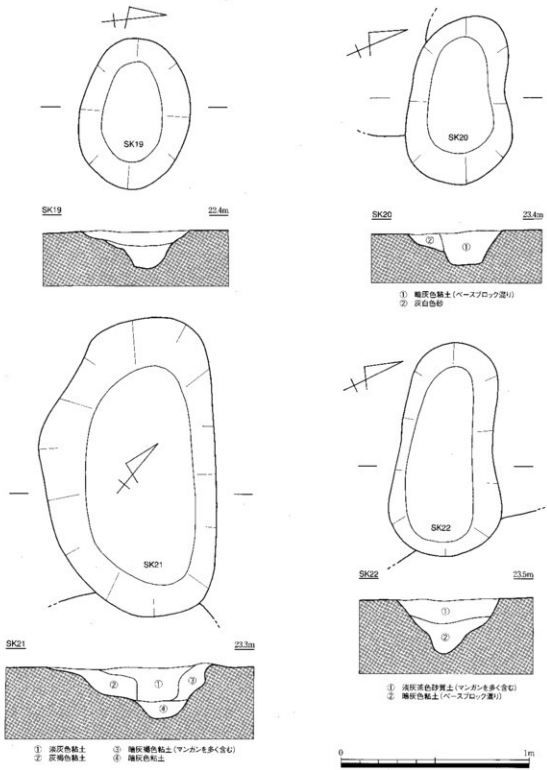
90は陶器鉢である。底部には焼成前穿孔を認め、高台の一部には刳り込みを施す。外面には黄ゴマの降灰を認めるが、胎土の特徴から積極的に焼締陶器と評価することはできない。年代的な位置付けは困難であるが、明治期以降の所産と理解したい。



第 69 図　SK08 ～ 11 平・断面図、出土遺物実測図



第 70 図　SK12・14 ～ 18 平・断面図



第 71 図　SK19 ～ 22 平・断面図

ＳＫ１２（第７０図）
不定形な土坑で、断面は皿状を呈し浅い。時期については不明である。

ＳＫ１４（第７０図）
楕円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。時期については不明である。

ＳＫ１５（第７０図）
楕円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。時期については不明である。

ＳＫ１６（第７０図）
不定形な土坑で、断面は逆台形を呈する。時期については不明である。

ＳＫ１７（第７０図）
円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。時期については不明である。

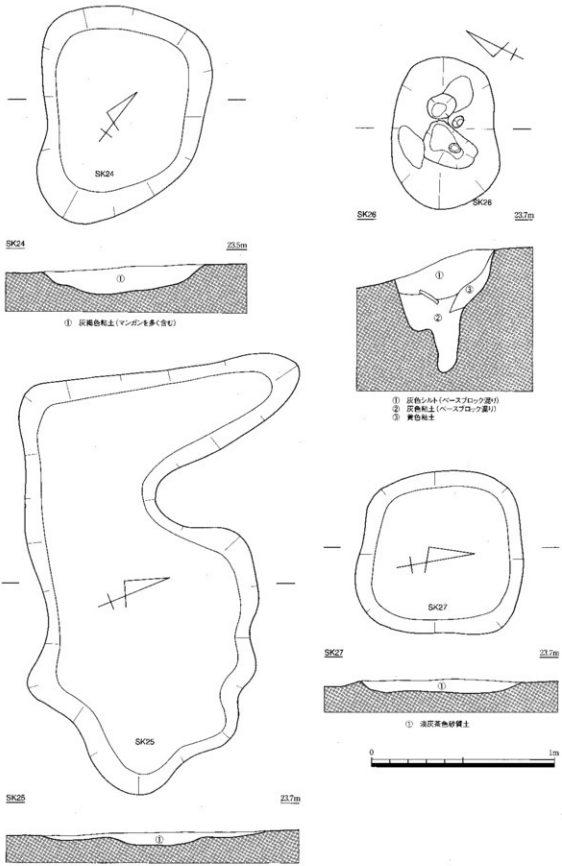
ＳＫ１８（第７０図）
不定形な土坑で、断面は浅い逆台形を呈する。時期については不明である。

ＳＫ１９（第７１図）
楕円形の土坑で、断面は逆台形を呈し、埋土は２層からなる。自然埋没と考えられる。時期については不明である。

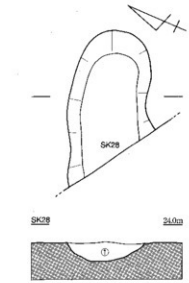
ＳＫ２０（第７１図）
楕円形の土坑で、断面は逆台形を呈し、埋土は２層からなる。埋土２は埋土１に切られていることから、一度埋まった後に再度掘り直され、再び埋まった状況がうかがわれる。人為的な状況と考えられる。時期については不明である。

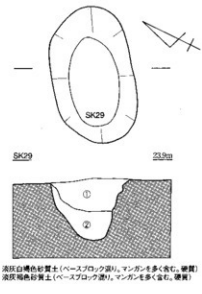
ＳＫ２１（第７１図）
楕円形の土坑で、断面は一部深い部分があるがおおむね逆台形を呈し、埋土は３層からなる。埋土２・３の堆積後、掘り直され、最終的に埋土１で埋まったと解釈できるが、埋土１が埋土３上面に接することから、これを偶然と考えるか、別の解釈が必要であるかは判断できない。時期については不明である。

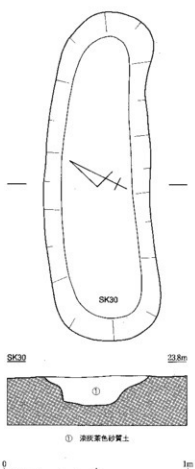
ＳＫ２２（第７１図）
楕円形の土坑で、断面は逆三角形を呈し、埋土は２層からなる。順堆積で自然埋没と考えられる。時期については不明である。

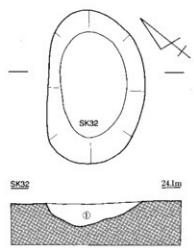


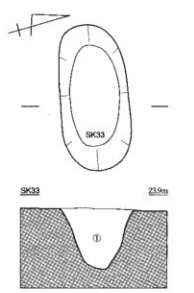
第 72 図　SK24 ～ 27 平・断面図



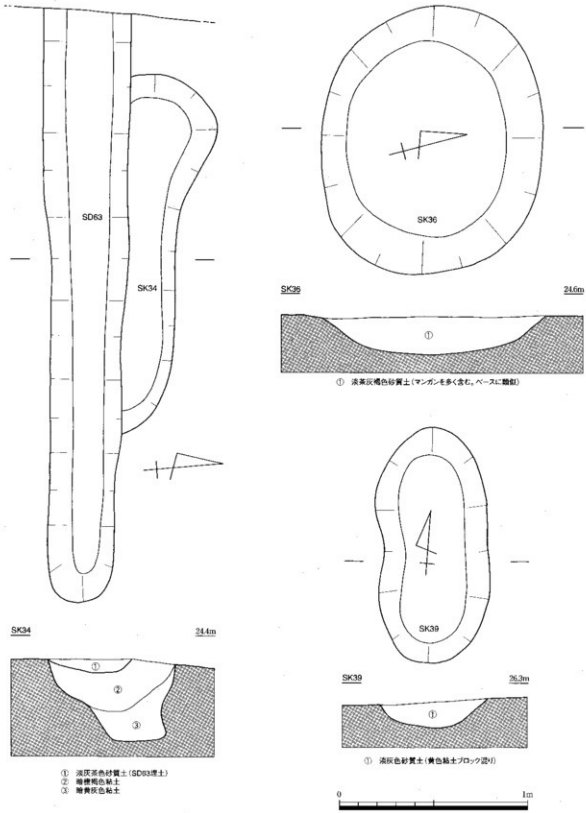








第 73 図　SK28 ～ 30・32・33 平・断面図



第 74 図　SK34・36・39 平・断面図

SK24（第72図）
不定形な土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、時期については不明である。

SK25（第72図）
不定形な土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、時期については不明である。

SK26（第72図）
楕円形の土坑で、中央部は杭を引き抜いた跡と考えられるような状況を示す。埋土は3層からなり、土器片が出土している。埋土の3層は、埋土3が埋土2に噛み込むように確認されており、堆積過程が明瞭ではない。時期については不明である。

SK27（第72図）
隅丸方形の土坑で、断面は浅い逆台形を呈する。埋土は1層で、時期については不明である。

SK28（第73図）
楕円形の土坑で、西半部は調査区外で未検出である。断面は浅い皿状を呈し、埋土は1層である。時期については不明である。

SK29（第73図）
楕円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は2層からなる。自然埋没を想定させる。時期については不明である。

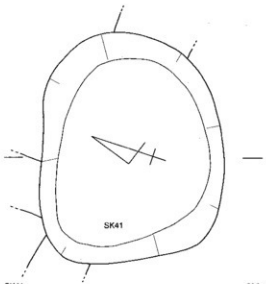
SK30（第73図）
長楕円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は1層からなる。時期については不明である。

SK32（第73図）
楕円形の土坑で、断面は皿状を呈する。埋土は1層からなり、時期については不明である。

SK33（第73図）
楕円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は1層からなり、時期については不明である。

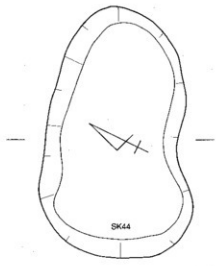
SK34（第74図）
南半分をSD63に切られている長楕円形を呈する土坑である。断面は不整形で、埋土2･3で埋まった後、SD63の埋土が認められる。時期については不明である。

SK36（第74図）
円形の土坑で、断面は皿状、埋土は1層からなる。時期については不明である。



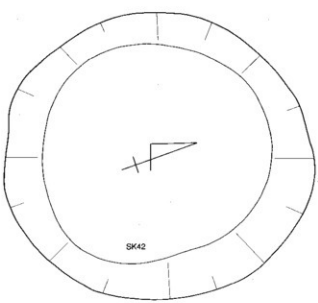
SK41 26.9m

① 灰色シルト（黄色粘土ブロック混じり。埋戻し土）



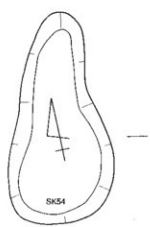
SK44 27.3m

① 乳褐色粘土（地山に類似）



SK42 27.0m

① 埋戻し土（ベースブロックを多量に含む）
② 灰色粘土（ベースブロックを多量に含む）



SK54 27.6m

① 灰黄色粘土（地山に類似）
② 灰黄褐色粘土（地山に類似）
③ 黄褐色粘土（地山に類似）

0 1m

第75図 SK41・42・44・54平・断面図

ＳＫ３９（第７４図）

楕円形の土坑で、断面は逆台形を呈し、埋土は１層からなる。時期については不明である。

ＳＫ４１（第７５図）

楕円形の土坑で、断面は浅い皿状を呈し、埋土は１層からなる。時期については不明である。

ＳＫ４２（第７５図）

円形の土坑で、断面は逆台形を呈し、埋土は２層からなる。土坑底はほぼ平らで、埋土１・２とも水平堆積である。時期については不明である。

ＳＫ４４（第７５図）

楕円形の土坑で、断面は浅い皿状を呈し、埋土は１層からなる。時期については不明である。

ＳＫ５４（第７５図）

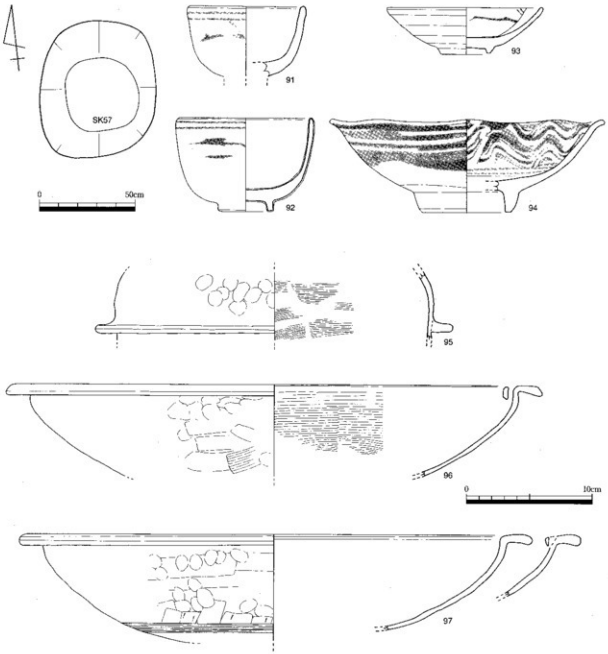
不定形な土坑で、断面は逆三角形を呈し、埋土は３層からなる。埋土３はブロック状に入っている。時期については不明である。

ＳＫ５７（第７６図）

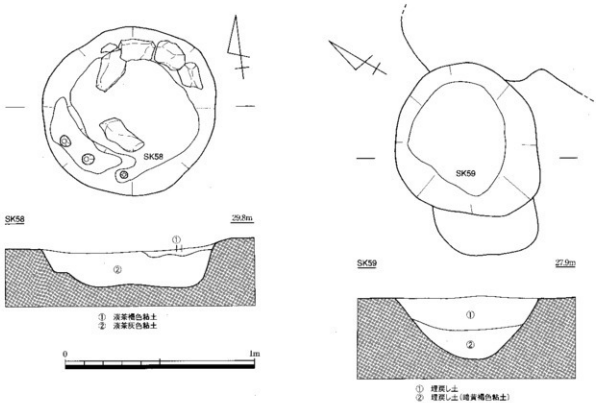
隅丸方形を呈する土坑である。埋土中から 91 ～ 97 の遺物が出土している。

91・92 は肥前系陶胎染付碗である。外面縁文様には二重圏線を施し、外面には簡略化した草花文を描く。18 世紀前半。93 は肥前系磁器皿である。見込みには蛇の目釉剥ぎを認め、底部無釉となる。口縁部内面には折枝文を描く。17 世紀末～ 18 世紀前半の所産と理解したい。94 は肥前系陶器皿である。胎土は橙色の色調を呈し、内面には波状、外面には直線的な刷毛目を施す。見込みには蛇の目釉剥ぎを認め、18 世紀第２・３四半期の所産となろう。95 は土師質土器羽釜である。口縁端部は遺存しないが、茶釜形の形態となろう。高松城跡（西の丸町地区）の土器・陶磁器様相を援用すると（松本・佐藤 2001）、18 世紀前半～ 18 世紀第四半期に認める形態となる。96・97 は瓦質焙烙である。いずれもわずか直立する頸部を認め、口縁部は大きく外反する。96 は図化した側の内耳には明瞭な穿孔を認めるが、もう一方は未貫通である。97 も図化した側はかろうじて貫通するが、もう一方の外耳の穿孔は未貫通である。18 世紀末～ 19 世紀第１四半期の所産となる。

以上、SK57 出土遺物は陶磁器及び土師質土器羽釜がおおむね 18 世紀前半に比定されるが、在地産の瓦質焙烙が 18 世紀第４四半期から 19 世紀第１四半期の所産となる。陶磁器の長期使用を考慮し、SK57 は 18 世紀末～ 19 世紀初頭に位置付けたい。



第 76 図　SK57 平面図、出土遺物実測図



第77図　SK58・59平・断面図

ＳＫ５８（第77図）

円形の土坑で、土坑周縁部に拳大の石を配している。断面は逆台形を呈し、埋土は2層からなる。石の用途は土坑内の何らかの施設を保護するためと考えられるが、埋土から見ても、そうした施設が確認できないため、不明である。時期については不明である。

ＳＫ５９（第77図）

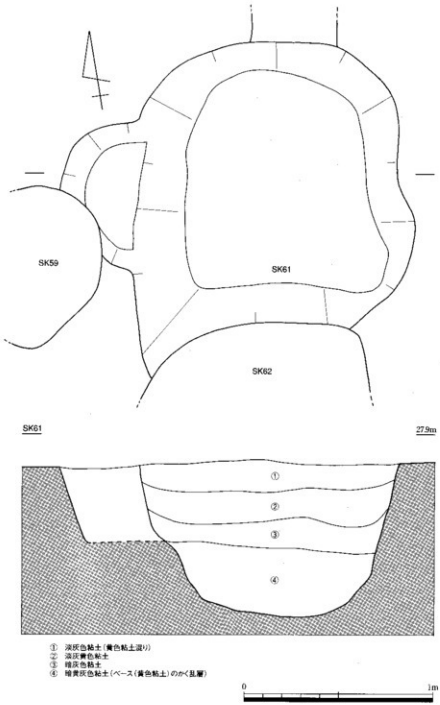
円形の土坑で、断面は逆三角形、埋土は2層からなる。順堆積で自然埋没と考えられる。時期については不明である。

ＳＫ６１（第78図）

やや不整形な方形で、断面は逆台形を呈し、埋土は4層からなる。自然埋没ではなく、人為的な埋没を想定させる。SK59・62に切られている。

ＳＫ６２（第79図）

円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は3層からなる。土坑底には埋められていた土師質大甕の破片及び拳大～人頭大の石が集積して検出されている。これを覆う埋土3の状況から、廃棄段階で破壊され、人為的に埋められた痕跡と考えられる。時期は近代以降であろう。

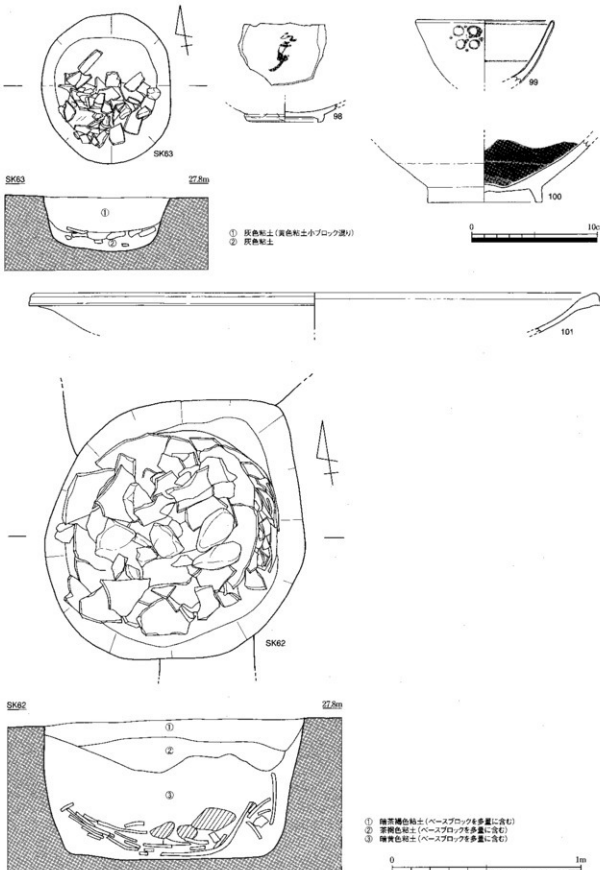


第78図　SK61平・断面図

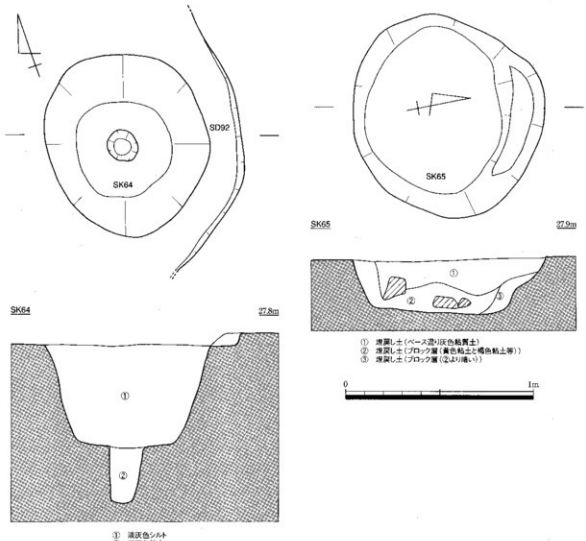
ＳＫ６３（第79図）

円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は２層からなる。土坑底から98～101の遺物が出土している。遺物を含む埋土２に対して、埋土１が厚く覆っていることから、廃棄され、人為的に埋められたと考えられる。

98は軟質施釉陶器鉢としたが、底部内面及び内面は無釉で、外面のみ施釉を認める。釉薬は明



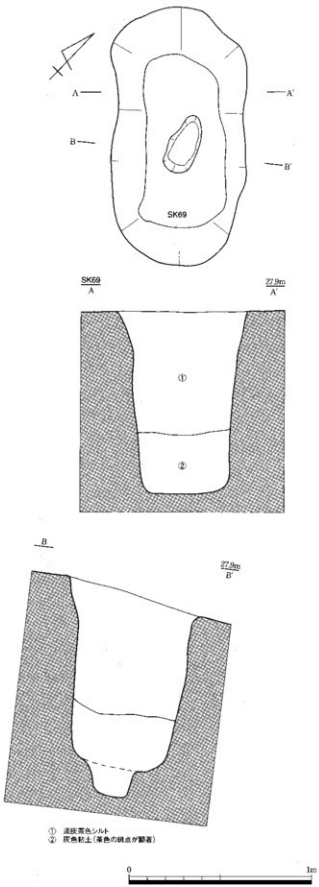
第 79 図　SK62・63 平・断面図、SK63 出土遺物実測図



第 80 図　SK64・65 平・断面図

赤橙色の色調を呈する柿釉である。内面には墨書を認める。幕末～明治期の所産となる。99 は瀬戸・美濃系陶器広東碗である（太白手）。外面には四弁花を呉須で描く。18 世紀末～ 19 世紀前半。100 は肥前系陶器鉢である。胎土は暗赤橙色の色調を呈し、暗緑灰色の灰釉を施す。内外面には直線的な刷毛目を認める。見込みには重ね積み痕跡を示す高台に付着した砂を円周状に認める。胎土の特徴から、北九州～中国地方産の可能性も払拭できない。101 は瓦質焙烙である。型成形により外面には剥離材である砂が顕著に付着する。口縁部はわずかに肥厚しており、佐藤編年Ⅷ群の所産となろう（1900 ～ 1940 年、佐藤 2001）。

以上、SK63 出土遺物のなかで最も新しい時期の所産は 101 の型成形の焙烙である。98 の軟質施釉陶器鉢もその時期まで下る可能性も残る。よって、SK63 は 20 世紀前半の所産と理解したい。



第 81 図　SK69 平・断面図

ＳＫ６４（第 80 図）

Ⅵ区北東部で検出した落とし穴状の土坑である。平面形は長径 1.0m、短径 0.9 mの円形、断面形は深さ 0.9 mを測る逆台形状を呈する。土坑底面は平坦で、中央部に深さ 0.3m の円形の掘り込みを持つ。埋土は上・下２層に区分できる。上層は淡灰茶色シルト、下層は淡灰色粘土である。出土遺物は皆無である。

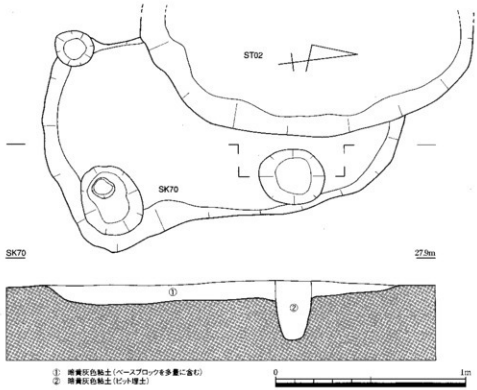
ＳＫ６５（第 80 図）

円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は２層からなる。埋土の状況からは、埋土２で埋まった後に掘り直し、最終的に埋土１で埋まったものと考えられる。時期については不明である。

ＳＫ６９（第 81 図）

Ⅵ区北東部で検出した落とし穴状の土坑である。平面形は長径 1.4m、短径 0.7 mの楕円形、断面形は深さ 1.0 mを測る逆台形状を呈する。底面は平坦で中央に深さ 0.15m の楕円形状の掘り込みを持つ。埋土は上・下２層に区分できる。上層は淡灰茶色シルト、下層は灰色粘土である。出土遺物は皆無である。

SK64・69 とも、形態的には縄文時代の落とし穴に類似するが、本調査では縄文時代に属する遺構・遺物が検出されておらず、断定にはいたらない。



第82図　SK70平・断面図

ＳＫ７０（第82図）

Ⅵ区北東部で検出した土坑で、ST02に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、断面は浅い皿状を呈する。埋没後、複数の柱穴に切られている。時期については不明である。

ＳＫ７１・７２（第83図）

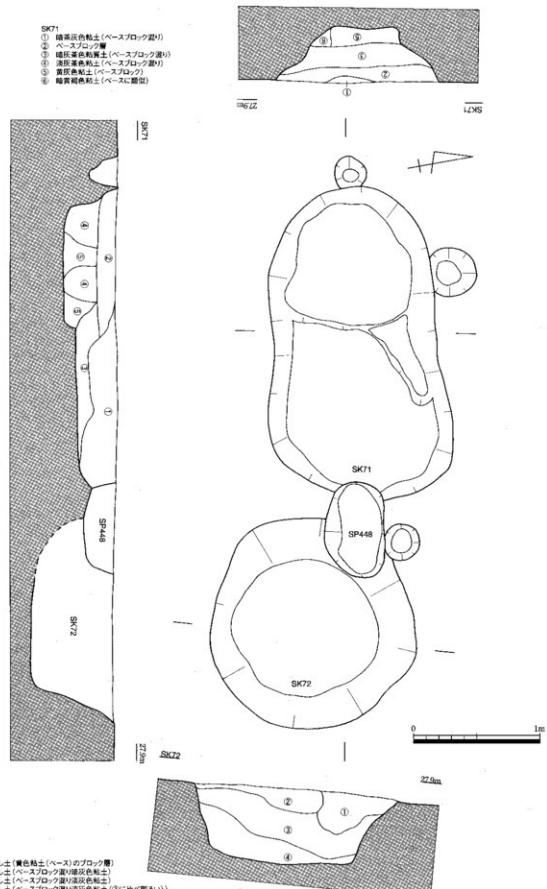
ST03に隣接して検出した土坑で、東西方向に並んで検出された。SK71は隅丸長方形を呈し、二段掘りが行われている。埋土は5層からなり、複雑な堆積状況を呈する。埋没過程としては、埋土5が堆積した後、埋土4の掘り込みが2箇所あり、その後埋土3が上部に堆積する。この後、埋土2が前面を覆い、最終的に埋土1が被さるようである。土坑の性格はこの堆積状況からは不明である。次にSK72は、円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は4層からなる。埋土2～4は順堆積で、埋没後埋土1に見られる掘り込みが行われている。時期については両者とも不明である。

ＳＫ７３（第84図）

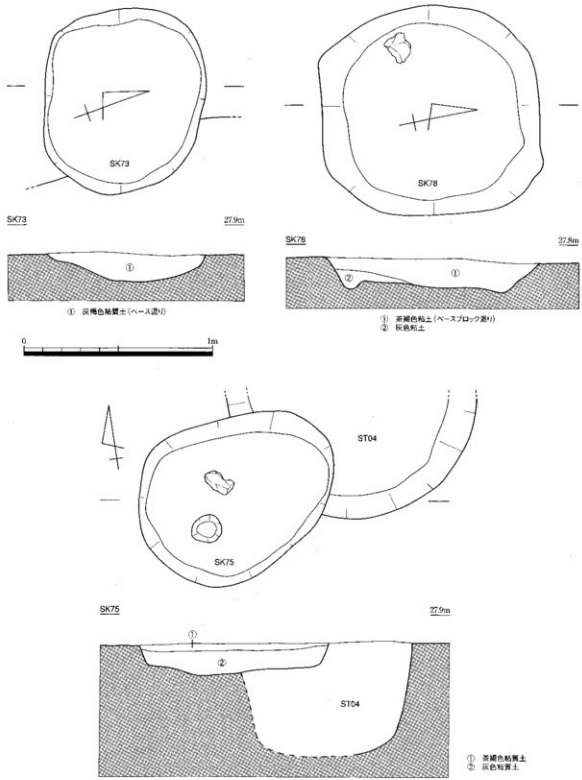
隅丸方形の土坑で、断面は皿状を呈し、埋土は1層からなる。時期については不明である。

ＳＫ７５（第84図）

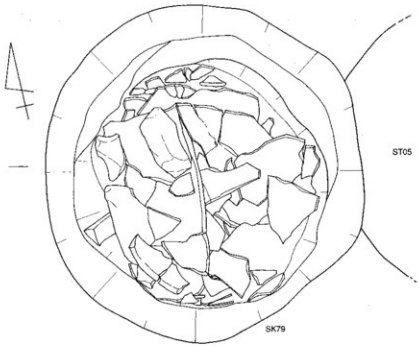
楕円形の土坑で、断面は浅い逆台形、埋土は2層からなる。時期については不明であるが、ST04に後出する。

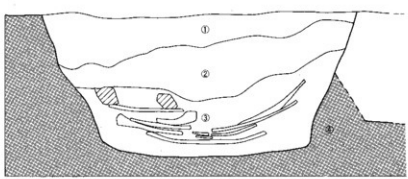


第 83 図　SK71・72 平・断面図

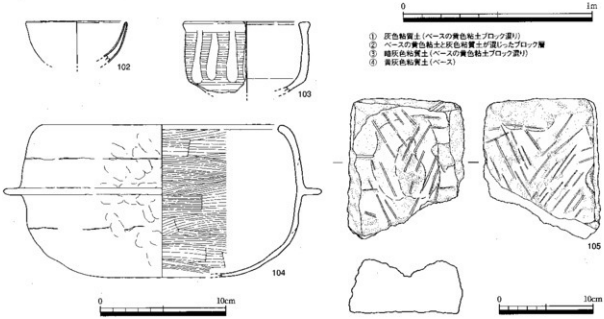


第84図　SK73・75・78平・断面図

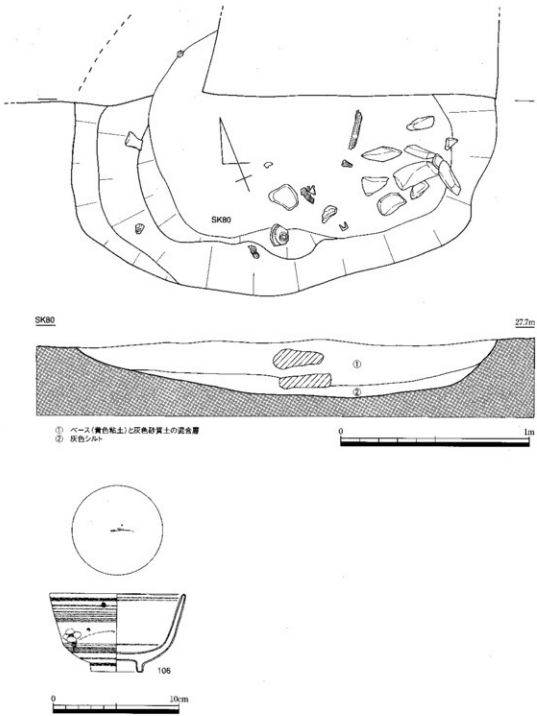




① 灰色粘質土（ベースの黄色粘土ブロック混り）
② ベースの黄色粘土と灰色粘質土が混じったブロック層
③ 暗灰色粘質土（ベースの黄色粘土ブロック混り）
④ 青灰色粘質土（ベース）



第 85 図　SK79 平・断面図、出土遺物実測図



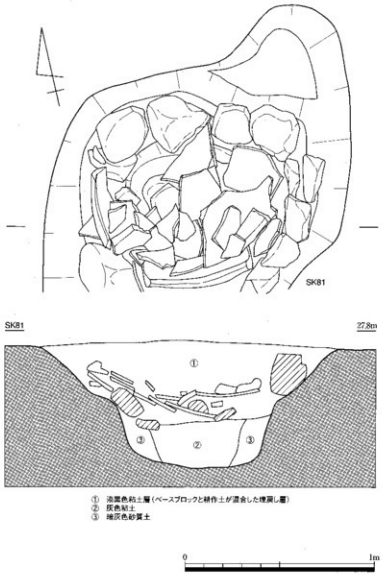
第 86 図　SK80 平・断面図、出土遺物実測図

ＳＫ７８（第 84 図）

隅丸方形の土坑で、断面は逆台形、埋土は 2 層からなる。時期については不明である。

ＳＫ７９（第 85 図）

円形の土坑で、断面は逆台形、埋土は 3 層からなる。埋土 3 に土器片が集中しており、設置され



第 87 図　SK81 平・断面図

ていた土師質大甕を破壊して埋めたと考えられる。ST05 を切っており、これより後出するものである。埋土中から 102 ～ 105 が出土している。

102 は肥前系磁器小杯である。外面には文様は確認できないが、笹葉文を描く可能性が高い。18 世紀後半頃の所産か。103 は瀬戸・美濃系陶器火入れないし香炉である。底部から明瞭に屈曲し、口縁部は直立する。端部は内側に小さく、外方へ強く引き出し、三角形に肥厚させる。内面は無釉であるが、口縁部には灰釉、外面には鉄釉を施す。口縁部外面にはカキ目を施し、等間隔にのみ彫りを行う。18 世紀後半。104 は瓦質羽釜である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部のみ小さく内側に折り曲げる。18 世紀後半頃の所産。105 は不明石製品である。角礫凝灰岩製。逆台形の断面形状を呈する延べ板状の形状を呈し、上面のみ明瞭に窪む。遺存する各面には線状の擦痕を認め、石臼等の石製品を金属製品の荒研ぎ用に転用した可能性が想定できる。

以上、SK79 出土遺物は 18 世紀後半の比較的一括性の高い内容を示し、遺構も 18 世紀後半の所産と考えられる。

ＳＫ８０（第 86 図）

北側が後世の攪乱を受けている楕円形の土坑である。埋土は 2 層からなり、自然埋没と考えられる。埋土中に礫等を多く含み、この中から 106 が出土している。

106 は肥前系磁器端反碗である。外面腰部及び口縁部に多重圏線を施すことにより文様帯を創出し、草花文を描く。1820 ～ 1860 年代。

ＳＫ８１（第 87 図）

SK80 に隣接して検出された不整形な土坑で、南側を欠失している。断面は逆台形を呈し、埋土

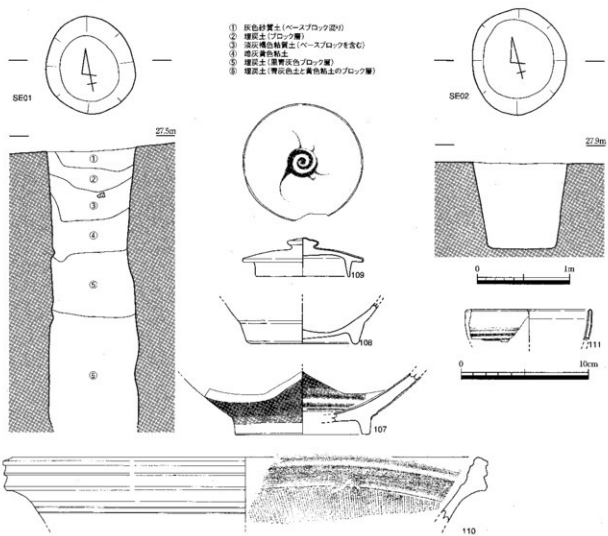
は3層からなる。土坑は、上端から直線的に内側に傾斜し、屈曲してほぼ垂直に下がる。底面はやや丸みを持っている。埋土の状況は、深い部分の中央部に埋土2が、両側面に埋土3が見られ、他の事例からすれば、埋土2部分に甕等が設置され、埋土3はこれを安定させるための充填土と考えられる。土師質大甕片はこれら埋土の上部、埋土1の下部にこれも甕を安定させるための拳大～人頭大の石とともに検出されている。時期は近代以降であろう。

6 井　戸

井戸と考えられる遺構は、SE01～06の6基である。SE03～06の4基はSE02同様の形状を示し、遺物が出土していないため図示していない。

SE01（第88図）

SE01は円形の井戸で、最深部までは検出できなかった。断面は円柱状にほぼ垂直に掘り込まれており、確認できる埋土は6層である。埋土は順堆積で、自然埋没の状況を呈している。埋土中か



第88図　SE01・02平・断面図、出土遺物実測図

ら 107 ～ 110 の遺物が出土している。

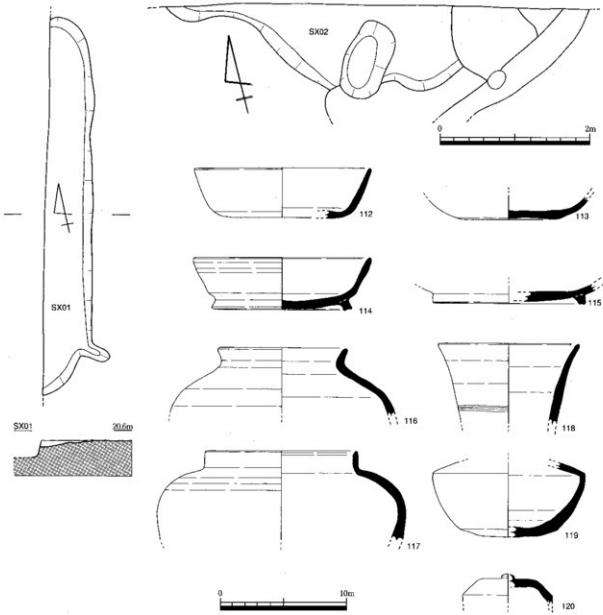
107 は肥前系陶器刷毛目鉢である。内面には直線的な刷毛目を認め、灰釉を施す。高台を除く外面には鉄しょうを施す。18 世紀後半。108 は肥前系磁器瓶である。外面には白磁釉ないし透明釉を施すが、染付は確認できない。幕末前後の所産か。109 は施釉陶器土瓶蓋である。扁平な宝珠状のつまみを有し、その上面には螺旋状の回転ナデ調整を認める。つまみの脇にはイッチン掛けを認める。幕末～明治期。110 は堺・明石系摺鉢である。口縁帯は三角形に肥厚し、内面には沈線状の段を認める。白神編年Ⅱ型式の所産となる (白神 1992)。

以上、SE01 出土遺物は 18 世紀後半に属する一群を認めるが、幕末～明治期まで下る陶磁器を認め、最終埋没時期は幕末ないし明治期と理解できる。

ＳＥ０２（第 88 図）

SE02 は円形の井戸で、深さ約 90cm を測る。断面は逆台形を呈する。埋土中から 111 が出土している。

111 は瀬戸・美濃系陶器腰錆碗である。口縁部外面には櫛描状の沈線を認め、おおむね 18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産となる。よって、SE02 の所属時期も当該期となろう。



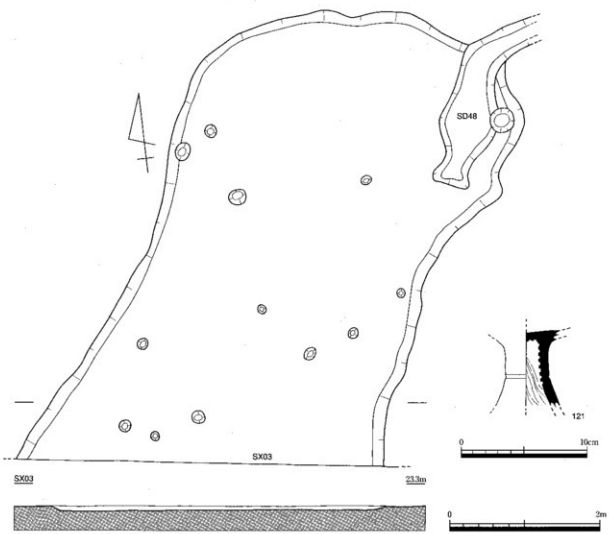
第 89 図　SX01・02 平・断面図、SX01 出土遺物実測図

7　不明遺構

ＳＸ０１(第 89 図)

SX01 は、Ⅰ区西端で検出しており、西側が調査区外に伸びるため遺構の性格が断定できず、不明遺構とした。現状では隅丸方形の東辺のような形状で、南東隅に少し突出が見られる。断面は浅い皿状を呈する。平・断面の状況からは、溝・竪穴住居跡など、遺構を特定することは難しい。埋土中から 112 ～ 120 が出土した。

112 は須恵器杯で、内外面とも摩滅が著しく年代等不明である。113 は須恵器鉢で、不明瞭な平底を呈する。年代は不明である。114 は須恵器杯で、底部端に高台が付き、底部中央が接地する特徴から様式 3 ～ 4、7 世紀第 4 四半期～ 8 世紀初頭に比定される。115 は須恵器盤の底部で、底部端に外傾する高台を設けており、様相 3、7 世紀第 4 四半期に比定される。116・117 は須恵器短頸



第 90 図　SX03 平・断面図、出土遺物実測図

壺の体部上半で、116 は肩がなで肩、117 は肩の張る器形である。共に年代は不明である。118 は須恵器長頸壺の口縁部で、逆「八」の字形に広がる。様相 3 前後と考えられる。119 は平瓶の体部で、肩部は明瞭に屈曲する。年代は不明である。120 は壺の蓋と考えられるが類例がない。

以上のことから、SX01 の年代は、おおよそ様相 3、7 世紀第 4 四半期頃と考えられる。

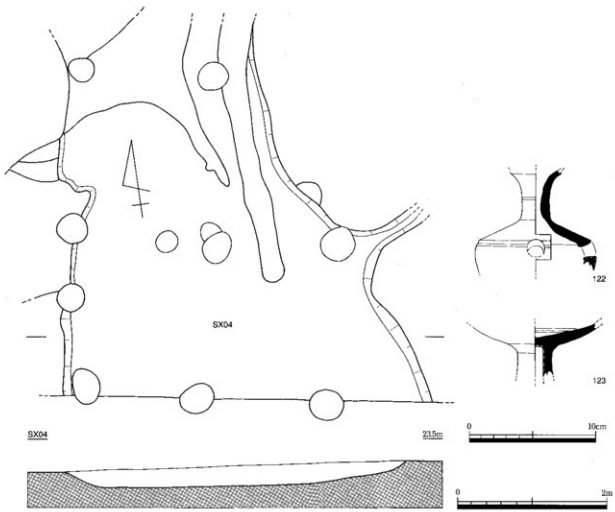
ＳＸ０２（第 89 図）

SX02 は、Ⅴ区北辺中央部で検出され、隅丸方形のコーナー部分に似た平面形を呈する。出土遺物はなく時期については不明である。

ＳＸ０３（第 90 図）

SX03 は、Ⅴ区南辺で検出しており、南側は調査区外に伸びる。隅丸長方形で、断面は浅い皿状を呈する。SD48 に切られており、埋土中から 121 が出土している。

121 は、須恵器高杯脚部である。杯部と脚端部が欠失している。中央に一条の沈線が見られ、7



第 91 図　SX04 平・断面図、出土遺物実測図

世紀代としておく。

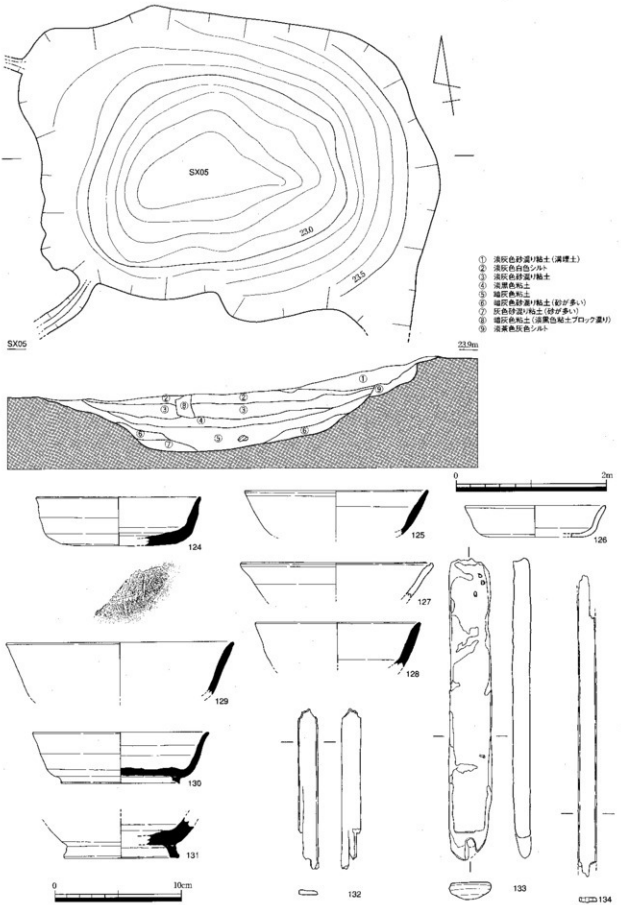
ＳＸ０４（第 91 図）

SX04 もＶ区南辺で検出しており、南側は調査区外に延びる。不定形な形状で断面は浅い皿状を呈する。北辺は不明瞭に終わる。埋土中から 122・123 が出土している。

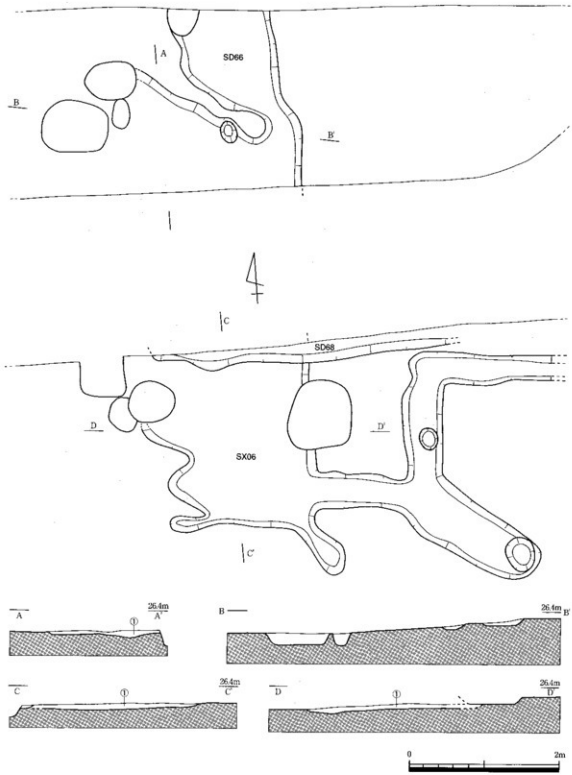
122 は須恵器甕の体部で、口縁部及び底部を欠失している。この器種の下限を考えると様相２以前と考えられるが、頸部が細くなるなど末期的な様相が見られるため、７世紀第１・２四半期と考えて大過なかろう。123 は須恵器高杯の杯部と脚部の接合部であるが、特徴的な部分が欠失しているため年代は不明である。

ＳＸ０５（第 92 図）

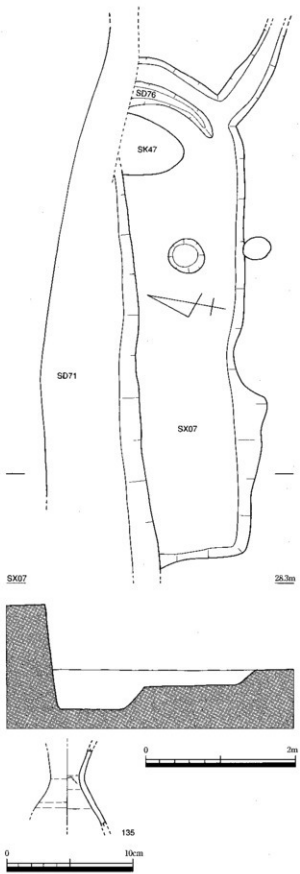
Ｖ区南東部で検出した「出水」状の遺構である。平面形は東西に長い長楕円形、断面形は鈍い擂鉢状を呈する。なお、SD52･53･54 の小規模な溝が合流している。長径 5.5m、短径 4.0 m、深さ 0.7 mを測る。埋土は上（埋土１～４）・下（埋土５～７）の大別２層に区分できる。上層は淡灰色系の



第 92 図　SX05 平・断面図、出土遺物実測図



第 93 図　SX06 平・断面図



第94図　SX07平・断面図、出土遺物実測図

粘土、下層は淡黒色系の粘土である。出土遺物は8世紀初頭の遺物が上層を主体に出土している。主要な遺物としては須恵器杯、土師器杯、板状木製品、桃核等である。

124・125・128～130は須恵器杯、126・127は土師器杯である。杯は各資料の形態から平城Ⅰ、8世紀初頭と考えられる。131は壺の底部で、底部端に外傾する高台を持ち、全体の形態が不明ではあるが様相3～4に比定されることから、全体的に8世紀初頭で矛盾はない。

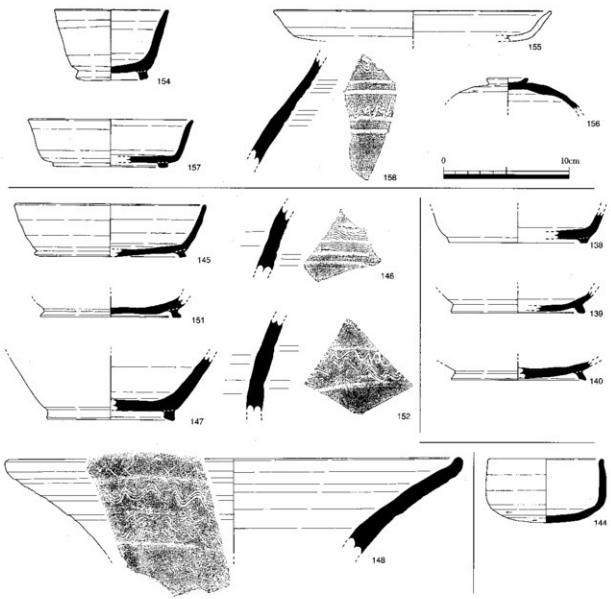
132～134はヒノキの木製品で、132は山形の切込みがあることから斎串、133は片側に円孔が認められるが用途は不明である。134は細い板状の木製品で斎串とも考えられるが、特徴的な部分が残っておらず用途は不明である。

ＳＸ０６（第93図）

Ⅵ区北辺で検出した不定形な遺構である。SD66・69とつながっているが、性格は不明である。断面は浅い皿状を呈する。時期については不明である。

ＳＸ０７（第94図）

同じくⅥ区北辺で検出しており、隅丸方形状を呈するが、北辺をSD71に切られている。断面は浅い逆台形を呈する。埋土中から135が出土している。135は京・信楽系陶器瓶である。頸部が窄まり、口縁部に向けて大きく開く形態となり、口縁部が片口状を呈する可能性が高い。年代的位置付けは困難であるが、19世紀第2・3四半期の所産と考えたい。



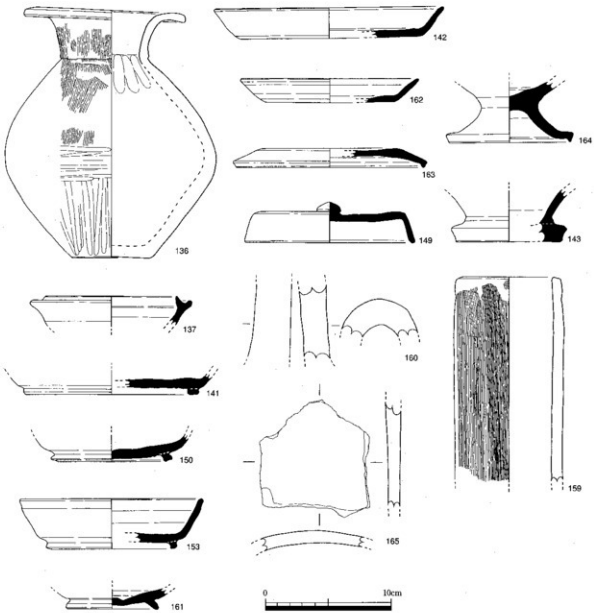
第 95 図　包含層出土遺物実測図 (1)

8　包含層（第 95 ～ 97 図）

136 ～ 173 は包含層出土の遺物である。包含層のうち、出土遺物が堆積状況と整合性のとれる層位は次のとおりである。

なお、出土資料については、この基本層を中心に、これ以外の土層から散発的に出土した資料も掲載している。

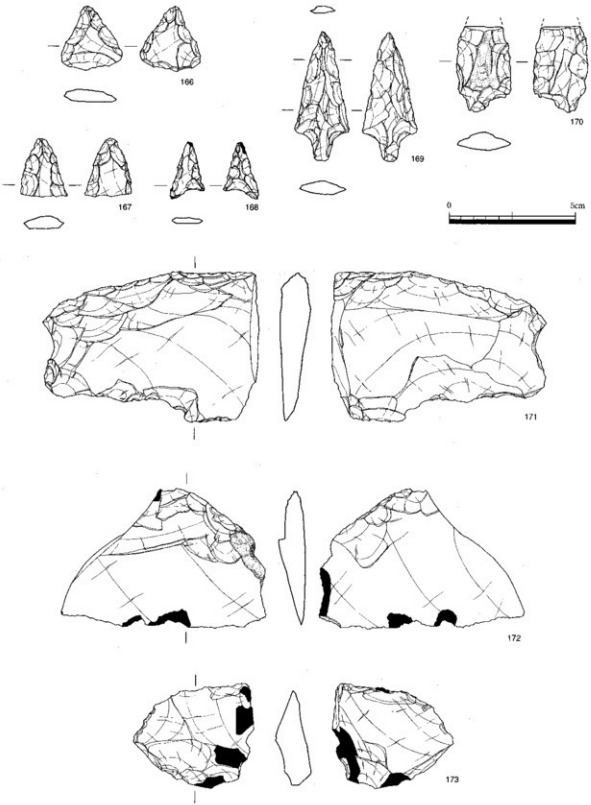
基本層 1（Ⅱ 2･3･6 層）からは、次の 6 点を図化した。154 は口径が小さく、器高の高い須恵器杯で、底部縁に低い高台が見られ、8 世紀代に比定される。157 は須恵器杯で、底部縁から内側に高台が付くが、外傾せず低い高台であることから平城Ⅰ～Ⅱ、8 世紀前半頃に比定される。156 は有蓋高杯の蓋部分で、つまみが扁平で形骸化していることから、この器種の最終形態と考え、飛鳥Ⅰ～様



第96図　包含層出土遺物実測図(2)

式1、7世紀第1・2四半期と考えられる。158は甕口縁部の破片で、二条沈線とこの間に波状文が見られるが、器形が不明であることから7世紀代としておく。155は土師器皿で、やや外反気味に伸びる口縁部を有する。口縁端部内側に沈線がめぐる。平城Ⅱ～Ⅲヵ。172は、二次調整のある剥片もしくはスクレイパーで、背面に調整が施されている。風化状態から弥生時代の所産と考えられる。以上、この土層に含まれる資料から、8世紀前半～中頃に形成された層と考えられる。

基本層2（Ⅱ13層）からは、次の7点を図化した。145・151は須恵器杯である。145は底部縁に高台が見られるが、外傾し157に比べて高い高台であることなどから様相4、8世紀初頭に比定される。151は底部縁に高台を持つが、外傾すること、やや高い高台であることから様式3、7世紀第4四半期に比定される。147は、長頸壺の底部で、体部下半部のみである。高台は底部縁に付き、



第 97 図　包含層出土遺物実測図 (3)

垂直方向に伸びるが時期決定は難しい。148は甕口縁部片で、外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。外面は沈線と沈線間に波状文が見られる。口径は実測図よりも広がる可能性がある。7世紀代に比定される。146も甕口縁部片であり、148に比べて細かな波状文を施している。この資料も7世紀代で考えられる。152も同様で、148に近い施文である。7世紀代に比定される。170は、凸基式石鏃の基部と考えられる。凸基部が中心からずれており、調整も整っていない。弥生時代の所産と考えられる。

以上、この土層に含まれる資料から、8世紀初頭頃に形成された層と考えられる。

基本層3（Ⅱ17層）では、173のみ確認されている。173は二次調整のある剥片と考えられ、縁辺部に調整が施されている。風化状態から弥生時代の所産と考えられる。この層の形成年代は不明であるが、基本層2と4の年代観から7世紀第4四半期～8世紀初頭としておく。

基本層4（Ⅱ26層）からは、次の3点を図化した。138・139・140はいずれも須恵器杯である。138は、底部縁辺部に高台を持ち、低くなりながらも外傾している。口縁部はやや内椀気味に立ち上がる。平城Ⅱ、8世紀前半頃と推定される。139・140は同じく縁辺部に高台を持つが、明瞭に外傾し、やや長い高台を有することから様相3、7世紀第4四半期に比定される。169は、小型の有舌尖頭器もしくは凸基式石鏃である。調整がやや雑であり、後者に分類するのが妥当かもしれない。171は、打製石庖丁の破片で、左右の短辺側に刳り込みが認められる。この層の形成年代は、138の資料評価によるが、他の層との比較から7世紀第4四半期に位置付けるのが妥当と考えている。この場合、138は混入と考えられる。

基本層5（Ⅱ27層）からは、144のみ図化した。やや深めの椀で、口縁端部は丸く終わる。様相2、7世紀第3四半期と考えられる。

以上、基本となる層から出土した遺物について紹介した。資料数が少なく、確定的なことは言えないが、次のような年代を想定することができる。

1　Ⅱ2・3・6層　8世紀前半～中頃
2　Ⅱ13層　8世紀初頭頃
3　Ⅱ17層　7世紀第4四半期～8世紀初頭頃
4　Ⅱ26層　7世紀第4四半期
5　Ⅱ27層　7世紀第3四半期

次に、各土層から単発資料として出土したものについて記述する。

136は弥生土器壺である。体部は算盤玉形を呈し、最大径が胴部中央にある。外面は最大径部より下がヘラ磨き、上がハケ目調整である。口縁部は、胴部境から外上方に開き気味に伸び、水平方向に屈曲して丸く終わる。内面の調整は観察できない。底部が大きな平底である点に少し疑問もあるが、他の要素を考慮すると後期後半、V－5様式（真鍋2000）に比定される。137は須恵器杯身で、受け部の立ち上がりが少なくなることから、様相1、7世紀第2四半期に位置付けうる。141は大型の須恵器杯もしくは盤で、底部縁に垂直に高台が付く。平城Ⅰ、8世紀初頭に比定される。150は須恵器杯で丸みを持った底面の縁に高台が付き、外傾する高台が見られる。様相3、7世紀第4四半期である。153も須恵器杯で、やや内椀気味に外上方に伸びる口縁部及び垂直に短く付く高台などを考慮すると様相4、8世紀初頭の年代を与えることができる。161も須恵器杯で、丸みを持った底部に外傾する高台を持つ。高台断面は四角くならず、先端は丸く終わる。142は須恵器皿で、底面から外上方に外反気味に伸びる口縁部を有する。年代は本遺跡の中心から離れて9世紀後半～

10 世紀前半、平安時代頃に下る資料である。162 は、須恵器杯で、形態は 142 に類似する。年代もほぼ同時期と考えられる。163 は須恵器杯蓋で、摘み部分が欠失している。天井部はやや下がるもののほぼ水平で、屈曲して端部に至る。端部はやや下方に三角形状に肥厚する。164 は須恵器高杯の脚部で杯部は欠失している。脚は「八」の字に開き、端部は断面三角形状になる。杯部が欠失しているが、7 世紀後半頃と考えている。149 は壺の蓋と考えられ、箱形の外形に形骸化した宝珠つまみが見られる。143 は須恵器鉢に分類されるもので、体部は円盤状の底部上面内側に外上方に直線的にのびる。様相 3、7 世紀第 4 四半期に比定される。160 は土師器羽口の端部で、溶解した状況が観察されるため、先端部付近の破片であることがうかがわれる。165 は瓦片、近世以降と考えられる。159 は土管で近代以降の資料と考えられる。166 ～ 168 は石鏃である。

＜参考文献＞

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』

佐藤竜馬 2001「瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙」『第 3 回四国徳島城下町研究会　四国と周辺の土器～焙烙の生産と流通～』

白神典之 1992「掣搢鉢考」『東洋陶磁』第 19 号

信里芳紀 2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小谷窯跡・塚谷古墳』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

藤澤良祐 1987「本業焼の変遷(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　VI』瀬戸市歴史民俗資料館

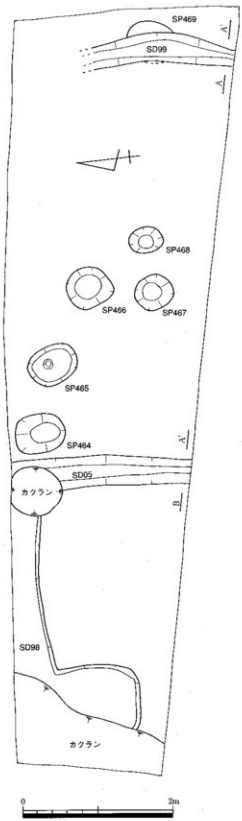
松本和彦 2000『都市計画道路鍋町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　松並・中所遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

松本和彦・佐藤竜馬 2001「高松城出土土器・陶磁器の変遷　様相の把握」『第 3 回四国徳島城下町研究会　四国と周辺の土器～焙烙の生産と流通～　佐藤発表追加資料』

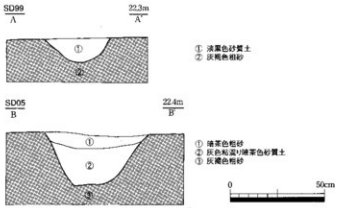
真鍋昌宏 2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年―四国編』木耳社

森下友子 2000「富田～吉金窯跡～出土の様相」『第 2 回徳島城下町研究会　四国・淡路の陶磁器～生産と流通Ⅰ～』

横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集 4』



第98図　平成10年度立会調査地区
平面図



第4節　平成10年度香川県教育委員会立会調査地区について

第98図は、平成10年度に香川県教育委員会が本遺跡の北側隣接地の立会調査で確認された遺構である。調査区中央には、南側の本調査区で確認されたSD05の延長部分を確認した。埋土は2層で、順堆積である。また、周辺で柱穴跡を確認していることから、集落が北側にも広がることが確認された。また、東端ではSD99が確認されたが、本調査区に接続できる溝が見られない。埋土は1層で単純な埋没と考えられる。

第4章　自然科学分析

第1節　樹種同定

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴からおおむね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試　料

試料は、尾端遺跡より出土した、柱材、斎串などの木材31点である。

3．方　法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結　果

結果を第3表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を第99･100図に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

カヤ　Torreya nucifera Sieb. et Zucc.　イチイ科　　図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

モミ属　Abies　マツ科　　図版2

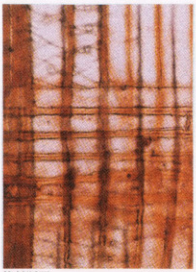
仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

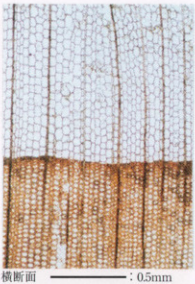
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～30細胞高である。

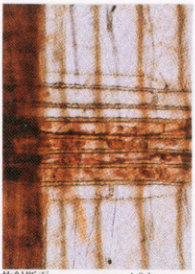
横断面 ――――：0.5mm


放射断面――――：0.1mm

接線断面――――：0.2mm

1．SB05　柱材　報8　カヤ

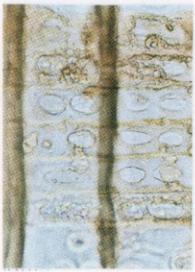

横断面 ――――：0.5mm


放射断面――――：0.1mm

接線断面――――：0.2mm

2．SB04　斎串　報5　モミ属

横断面 ――――：0.5mm


放射断面――――：0.05mm

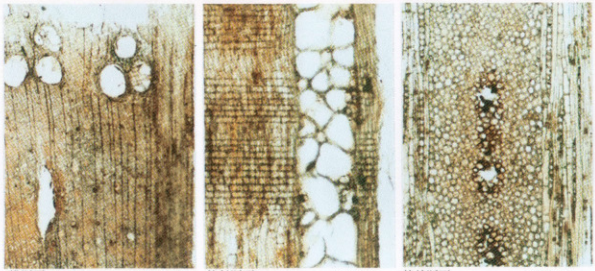
接線断面――――：0.2mm

3．SD11　板材　報40　コウヤマキ

第99図　木材顕微鏡写真1

横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.05mm　接線断面 ——— : 0.2mm

4．SD11　板材　報38　ヒノキ



横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.2mm　接線断面 ——— : 0.2mm

5．SD11　杭　報47　コナラ属クヌギ節

第100図　木材顕微鏡写真2

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

コウヤマキ　Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科　　図版3

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。

第３表　樹種同定結果

報文番号	遺構名	種類	結果（和名／学名）	
1	SB02	柱材	ヒノキ科	Cupressaceae
4	SB04	斎串	モミ属	*Abies*
5	SB04	斎串	モミ属	*Abies*
6	SB04	柱材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
7	SB04	柱材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
8	SB05	柱材	カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
9	SB06	柱材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
10	SB06	柱材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
11	SB06	柱材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
12	SB06	柱材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
13	SB06	柱材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
34	SD11	木樋	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
35	SD11	木樋	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
35	SD11	木樋	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
37	SD11	不明	モミ属	*Abies*
38	SD11	板材	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
39	SD11	板材	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
40	SD11	板材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
41	SD11	板材片	モミ属	*Abies*
42	SD11	板材片	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
43	SD11	角材	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
44	SD11	板材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
45	SD11	板材	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
46	SD11	板材	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
47	SD11	杭	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
48	SD11	板材片	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
49	SD11	板材片	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
50	SD11	斎串	針葉樹	conifer
132	SX05	斎串	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
133	SX05	不明木製品	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
134	SX05	斎串	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.

日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.　ヒノキ科　　図版４

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。樹脂細胞が見られる。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ヒノキ科　Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、やや小型のものが存在するが、型及び1分野に存在する個数が不明瞭である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロなどがあり、常緑高木である。

針葉樹　conifer

横断面：仮道管と放射組織が存在する。

放射断面：仮道管と放射組織が存在する。樹脂細胞が存在する。

接線断面：仮道管と単列の放射組織が存在する。

以上の形質より針葉樹に同定される。なお本試料は、保存状態が悪く変形が著しい為、広範囲の観察が困難なので、針葉樹の同定にとどまるが、樹脂細胞が存在する事から、マキ属、スギ、ヒノキ科のいずれかである可能性が高い。

コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops　ブナ科　　図版5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

5．所　見

同定の結果、尾端遺跡の木材は、カヤ1点、モミ属4点、コウヤマキ12点、ヒノキ11点、ヒノキ科1点、針葉樹1点、コナラ属クヌギ節1点であった。コウヤマキ、ヒノキが多いが、瀬戸内沿岸を中心とする近畿地方中央部とその周辺地域では、古墳時代以降は比較的大きな建築物の柱材として、コウヤマキ、ヒノキが用いられる。斎串はヒノキとモミ属であるが、ヒノキないし針葉樹が用いられる例が多い。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

第2節　花粉分析

株式会社 パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

尾端遺跡は香川県木田郡三木町に所在する。本遺跡からは、古代の掘立柱建物跡や溝、近世（江戸時代）の井戸・土坑などが検出されている。

本報告では各土層における土地利用の変遷、及び検出されたSD06が水田あるいは畑作に伴うものかの情報を得ることを目的として、花粉分析を実施する。

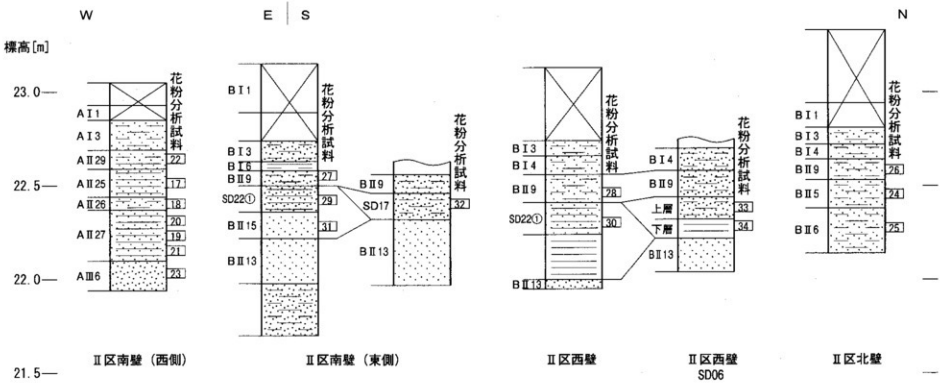
2．試　料

分析に用いた試料は、Ⅱ区南壁より11点、Ⅱ区北壁より3点、Ⅱ区西壁より2点、Ⅱ区西壁のSD06より2点の、計18点である。各地点の模式柱状図、および試料採取位置を第101図に示す。

3．分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。



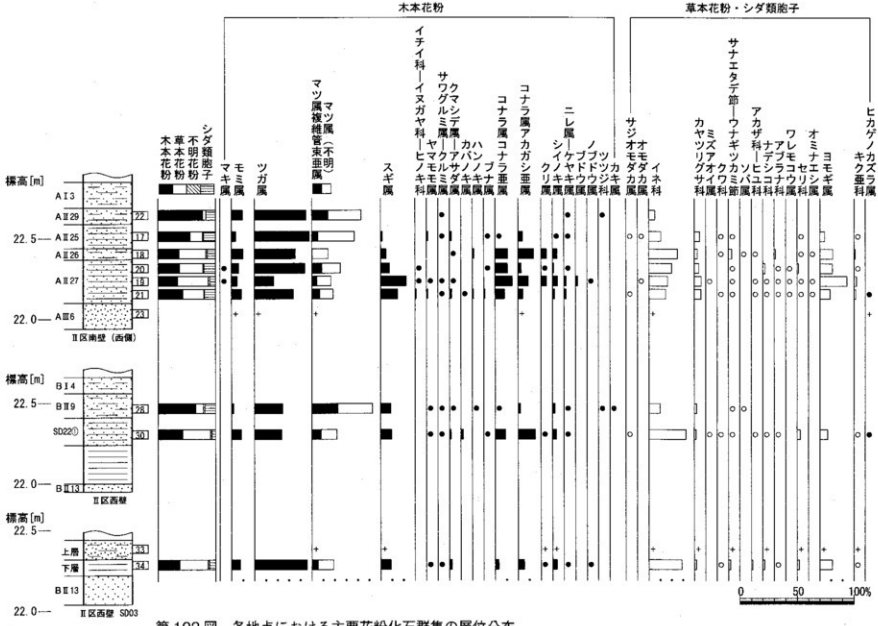
第101図　尾端遺跡における各地点の模式柱状図および試料採取位置

第4表　花粉分析結果（1）

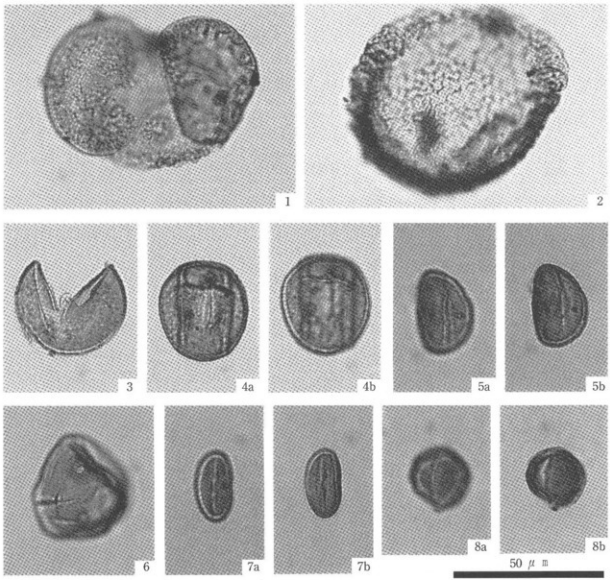
種類	Ⅱ区南壁							Ⅱ区南壁			
	AⅡ29層	AⅡ25層	AⅡ26層	AⅡ27層	AⅡ27層上	AⅡ27層下	AⅡ6層	BⅡ9層	SD17	SD23()	BⅡ15層
試料番号	22	17	18	19	20	21	23	27	32	29	31
木本花粉											
マキ属	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–
モミ属	10	9	21	10	11	14	6	–	–	–	–
ツガ属	47	114	75	35	79	55	13	–	–	–	1
マツ属複維管束亜属	15	13	1	9	16	11	–	–	–	–	–
マツ属（不明）	30	75	29	26	29	19	6	–	–	–	–
スギ属	–	4	10	47	14	24	–	–	1	–	–
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	–	–	–	1	1	2	–	–	–	–	–
ヤマモモ属	–	3	–	2	–	2	–	–	–	–	–
サワグルミ属－クルミ属	1	1	–	1	–	1	–	–	–	–	–
クマシデ属－アサダ属	–	4	1	1	–	3	–	–	–	–	–
カバノキ属	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
ハンノキ属	–	–	3	–	–	2	–	–	–	–	–
ブナ属	–	2	–	–	1	2	–	–	–	–	–
コナラ属コナラ亜属	–	2	23	31	19	13	–	–	1	–	–
コナラ属アカガシ亜属	–	9	29	19	5	7	1	–	–	–	–
クリ属	–	–	10	10	1	–	–	–	–	–	–
シイノキ属	–	1	8	9	2	3	–	–	–	–	–
ニレ属－ケヤキ属	1	1	–	4	1	3	–	–	–	–	1
エノキ属－ムクノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
キハダ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ミカン科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ブドウ属	–	–	–	4	–	–	–	–	–	–	–
ノブドウ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ツツジ科	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
カキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イボタノキ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
トネリコ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
草本花粉											
サジオモダカ属	–	1	–	–	–	2	–	–	–	–	–
オモダカ属	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–
イネ科	7	44	141	99	94	55	3	–	1	–	–
カヤツリグサ科	–	20	15	37	19	22	–	–	–	–	–
ミズアオイ属	–	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–
ユリ科	–	–	–	–	1	2	–	–	–	–	–
クワ科	–	1	2	–	–	1	–	–	–	–	–
サナエタデ節－ウナギツカミ節	–	1	16	2	3	2	–	–	1	–	–
タデ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
ソバ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
アカザ科－ヒユ科	–	–	4	5	–	2	–	–	–	–	–
ナデシコ科	–	–	–	5	9	1	–	–	–	1	–
キンポウゲ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
キンポウゲ科	–	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–
アブラナ科	–	–	6	2	1	1	–	–	–	–	–
ワレモコウ属	–	–	–	4	1	1	–	–	–	–	–
バラ科	–	1	–	5	2	–	–	–	–	–	–
マメ科	–	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–
アリノトウグサ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
セリ科	–	1	1	6	5	3	–	–	–	–	–
オミナエシ属	–	–	1	1	–	1	–	–	–	–	–
ヨモギ属	–	18	63	144	51	34	–	–	–	–	–
キク亜科	–	2	6	13	3	6	–	–	–	1	–
タンポポ亜科	–	1	5	3	5	4	–	–	–	–	–
不明花粉	–	7	15	18	10	4	3	–	1	–	–
シダ類胞子											
ヒカゲノカズラ属	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–
イノモトソウ属	–	–	4	–	–	2	7	–	–	–	–
ミズワラビ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
他のシダ類胞子	23	90	79	61	96	71	12	5	1	2	3
合　計											
木本花粉	105	238	211	211	180	162	26	0	2	1	2
草本花粉	7	91	265	331	194	138	3	0	3	2	0
不明花粉	0	7	15	18	10	4	3	0	1	0	0
シダ類胞子	23	90	84	61	96	74	20	5	1	2	3
総計（不明を除く）	135	419	560	603	470	374	49	5	6	5	5

花粉分析結果（2）

種類	Ⅱ区北壁			Ⅱ区西壁		Ⅱ区西壁 SD06	
	BⅡ9層	BⅡ5層	BⅡ6層	BⅡ9層	SD22①	上層	下層
試料番号	26	24	25	28	30	33	34
木本花粉							
マキ属	－	－	－	－	－	－	－
モミ属	－	－	－	2	20	－	10
ツガ属	－	1	－	25	55	－	61
マツ属複維管束亜属	－	－	－	23	19	－	7
マツ属（不明）	－	－	－	31	32	1	18
スギ属	－	－	－	9	22	1	12
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	－	－	－	－	－	－	－
ヤマモモ属	－	－	－	1	1	－	1
サワグルミ属－クルミ属	－	－	－	1	1	－	1
クマシデ属－アサダ属	－	－	－	1	3	－	3
カバノキ属	－	－	－	－	5	－	－
ハンノキ属	1	－	－	1	－	－	－
ブナ属	－	－	－	－	1	－	－
コナラ属コナラ亜属	－	1	－	1	21	－	4
コナラ属アカガシ亜属	－	－	－	2	35	－	7
クリ属	－	－	－	－	2	1	1
シイノキ属	－	－	－	2	8	1	5
ニレ属－ケヤキ属	－	－	－	1	2	－	1
エノキ属－ムクノキ属	－	－	－	－	3	－	－
キハダ属	－	－	－	－	－	－	1
ミカン科	－	－	－	－	1	－	－
ブドウ属	－	－	－	－	－	－	－
ノブドウ属	－	－	－	－	－	－	1
ツツジ科	－	－	－	1	－	－	－
カキ属	－	－	－	1	－	－	－
イボタノキ属	－	－	－	－	－	－	－
トネリコ属	－	－	－	－	1	－	－
草本花粉							
サジオモダカ属	－	－	－	－	1	－	－
オモダカ属	－	－	－	－	－	－	－
イネ科	1	1	－	15	170	4	99
カヤツリグサ科	－	－	－	3	8	2	6
ミズアオイ属	－	－	－	－	1	－	－
ユリ科	－	－	－	－	－	－	－
クワ科	－	－	－	－	1	－	3
サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	－	－	1	3	3	6
タデ属	－	－	－	－	－	－	－
ソバ属	－	－	－	1	－	－	－
アカザ科－ヒユ科	－	－	－	－	5	－	4
ナデシコ科	－	1	－	－	4	2	5
キンポウゲ属	－	－	－	－	1	－	－
キンポウゲ科	－	－	－	1	1	－	－
アブラナ科	－	－	－	－	1	－	1
ワレモコウ属	－	－	－	－	－	－	－
バラ科	－	－	－	－	3	－	－
マメ科	－	－	－	－	1	－	1
アリノトウグサ属	－	－	－	－	－	－	－
セリ科	－	－	－	－	14	3	6
オミナエシ属	－	－	－	－	－	－	－
ヨモギ属	－	－	－	－	36	1	37
キク亜科	－	－	－	－	3	1	1
タンポポ亜科	－	－	－	－	4	－	1
不明花粉	－	－	－	4	16	1	10
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	－	－	－	－	1	－	－
イノモトソウ属	－	－	－	－	－	－	1
ミズワラビ属	－	－	－	－	－	－	－
他のシダ類胞子	3	5	2	29	32	12	37
合計							
木本花粉	1	2	0	102	232	4	133
草本花粉	1	2	0	21	257	16	170
不明花粉	0	0	0	4	16	1	10
シダ類胞子	3	5	2	29	33	12	38
総計（不明を除く）	5	9	2	152	522	32	341



第 102 図　各地点における主要花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で産出した。なお、●○は 1 %未満、＋は木本花粉 100 個体



1．マツ属（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）
2．ツガ属（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）
3．スギ属（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）
4．コナラ属コナラ亜属（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）
5．コナラ属アカガシ亜属（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）
6．イネ科（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）
7．シイノキ属（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）
8．ヨモギ属（Ⅱ区南壁;AⅡ27層）

第103図　花粉化石顕微鏡写真